ふくしま道徳教育資料集

第Ⅲ集　郷土愛　ふくしまの未来へ

ふくしまから
はじめよう。
Future From Fukushima.

平成27年３月　福島県教育委員会

まえがき

震災を経験した本県の子どもたちに命の尊さ、思いやり、家族・郷土の大切さについて深く考えさせたいという思いで作成してきた「ふくしま道徳教育資料集」の集大成となる第Ⅲ版が完成しました。平成二十四年度に発行した第Ⅰ集「生きぬく・いのち」は、人と人との豊かな関係の中で生まれる命の大切さを、平成二十五年度に発行した第Ⅱ集「敬愛・つながる思い」は、周りの人に支えられて生きていくことへの感謝をテーマとしました。今回の第Ⅲ集「郷土愛・ふくしまの未来へ」は、人と人の絆の大切さ、未来に向かって前向きに生きる人間のたくましさをテーマにしています。郷土に対する誇りと愛情を胸に、夢や希望に向かって歩んでほしいという願いを込め、資料を作成しました。

お陰様で、第Ⅰ集、第Ⅱ集とも、県内はもとより、全国的にも話題となり、新聞やテレビでも取り上げていただいております。ある地方紙では「大人も読む価値がある中身だ。ＰＴＡ活動や社会教育の場などで活用してはどうか」「教材としてでなく、震災後の本県の実情を伝える資料にもなるだろう。風評や風化の歯止めの一助にもつながるのではないか」として社説の中、さらに中央紙の道徳教育のシリーズの中でも、本指導資料を活用した授業の様子を取り上げていただいています。

今年度、七校の道徳教育推進校に各地区の道徳教育のモデル校として研究を推進していただきました。推進校の一つである福島市内の小学校では、四年生の教室で第Ⅰ集「クリスマスのおくりもの」をもとに授業が行われました。京都の小学生から福島県庁に「自分へのクリスマスプレゼントは福島の子どもたちに届けてほしい」という手紙が届き、その願いを叶えたいと考えた県職員が、避難していた子どもたちに絵本をプレゼントするという資料です。授業では、様々な意見が出され、女の子のやさしさ、思いやりをもって行動することや人に親切にすることの大切さなどについて、真剣に考える子どもたちの姿がありました。

また、いわき市で行われた中学校教育研究会の県大会では、ふくしま道徳教育資料集第Ⅰ・Ⅱ集をもとに全授業が実施されました。二年生の教室では第Ⅱ集「三十年後の桜」を資料として授業が行われました。「世界一美しい浜街道」をつくるため、様々な困難を乗り越え、国道六号沿いに桜を植林していく活動を資料としたものです。文部科学省の「わたしたちの道徳」の資料とも関連させ、強い意志をもって生きていくことのすばらしさ、そしてその難しさを生徒は真剣に考えていました。

さて、国においては、道徳の時間の教科化に向けての準備が進められており、二十六年十月には、中央教育審議会から「道徳に係る教育課程の改善等について」が答申されました。その中で検定教科書の導入についても述べられており、そこでは、「教科書のみを使用するのではなく、各地域に根ざした郷土資料など、多様な教材を活用することが重要」「道徳教育の特性に鑑み、教科書だけでなく、国や地方公共団体は、教材の充実のための支援に努める必要がある」と資料の充実についてもふれています。今後、県教育委員会としても、本資料集はもとより、道徳教育の充実に向けて、様々な取組を行ってまいりたいと考えておりますが、資料第Ⅰ集「生きぬく・いのち」、第Ⅱ集「敬愛・つながる思い」、今回の資料「郷土愛・ふくしまの未来へ」の三部作は、県内の道徳教育の資料として有効に活用していただければと考えております。

また、本資料は学校教育はもとより、家庭、地域においても活用していただきたいと考えております。今後も風評や風化との戦いが続くものと思われますが、震災の記憶を語り継ぎ、福島県民にとって大切なものは何かを考える機会として、この資料集を手にとっていただく場面が増えることを願っております。

学校の教職員の皆様にお願いいたします。今の子どもたちには、「福島に生まれ」「福島で育つこと」に誇りを持った大人に成長していただきたいと思っております。そのためにも、この福島ならではの道徳教育を全学校で展開し、社会を生きぬく強さや人に対する思いやり、郷土を愛する心をもち、福島の未来を築く力になれる人の育成を推進することが大切です。是非、本資料を含め、三部作を活用していただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

最後に、第Ⅲ集の発刊に当たり、貴重な特別寄稿を賜りました兵庫教育大学大学院教授谷田増幸様、お忙しい中、指導資料の会議のたびに丁寧な指導をいただき、全体の監修をしていただいた上越教育大学副学長・同大学院教授林泰成様、同大学院教授早川裕隆様、金沢工業大学教授白木みどり様、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ集と全ての表紙を描いていただいた朝倉悠三画伯、本資料の執筆に当たっていただきました多くの作成委員の先生方、作成に当たって、取材にご協力いただきました関係の方々に敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

福島県教育庁義務教育課長　**飯村新市**

特別寄稿　「郷土に対する誇りと愛情が取り結ぶ絆、そして未来へ――」

兵庫教育大学大学院教授　谷田増幸

「何もない　そう思ってた　あの場所に
全てがあったと　知る今日この頃　17歳・男性」
（『私たちの道徳　中学校』）

1　私たちにとって郷土とは

郷土は、一般的には「人が生まれ育ったところ」といった意味合いだろうか。山麓に広がるのどかな緑の田園風景、群青色の海を背景にスクッと立つ白亜の灯台、乱反射して眩しいばかりの白一面の雪景色等々。多彩な自然に恵まれ、あるいは翻弄され、それでも先人たちはその地域で生業を立てて暮らし、独特の生活様式を生み出してきた。脈々と伝えられてきた伝統や文化もその中にある。

確固とした空間、時間の流れ。そこに人々の営みが重なる。私たちは、そのどこかで生を受け、時を過ごし、育てられてきた。紛れもない事実。根っこ。原風景。到底私たちが自由に対処できるものではない。私たちはいつもすでにある地域のそうした空間的・時間的・文化的諸契機の中にあるとも言われる。私たち一人一人が、今、郷土とどう向き合っていくのかが問われている。

2　郷土に対する思いが取り結ぶ絆

今、住んでいる地域を自分の郷土と考え、その復興と発展に尽くしている人もいる。生まれ育った場所を遠く離れて、今は別の場所から自分の郷土として思い描いている人もいる。そう、一人一人は互いに決して同じではない（個別性）。置かれている背景や条件も異なる。けれども、人間が決して単独の存在ではないということもまた事実であろう（共存在）。

メディアを介して伝えられる郷土の風景と地域の人々の言葉にも、一瞬にして目をやり耳を傾けてしまう。ときには郷土の山川草木に漂う独特の匂いに憩いを感じ、祭りの囃子や太鼓の音に途端に身体が踊り始める。懐かしさと親しみの共鳴。そして安堵と、あるいは沈黙。……郷土はどうなっているのだろうか、この先どのように変化していくのだろうかという「問い」。郷土についてだれかと語り合いたい、いやだれかと分かち合いたいという「思い」。さまざまな形にパラフレーズされる。

郷土という空間・時間・文化を接点に、どこかでだれかとなにかを「共にしてきた」がゆえの「問い」や「思い」。それは、他者と共にある自己の在り方を支える根源の一つでもあるからだろう（アイデンティティ）。……「絆」と呼ばれる〝つながり〟の原点はこのようなところにあるような気がする。

3　郷土の未来を創るということ―過去と現在との対話、そして応答―

ところで、郷土は単に自分のルーツを探り、懐かしく思い、愛着を感じるという受動的なものに過ぎないのだろうか。例えば、どうして人々は地域の祭りに汗をかき体験を重ねるのだろうか。地域の復興と再生になぜ努力を惜しまないのだろうか。

それは、人々が伝統や文化を築き創り上げてきた先人と語らい、その苦労を聞き取り身体をもって理解することを通して、その場が過去と現在が融合する〝場〟に変容するからであろう。過去と現在を媒介にした絶え間ない形成作用の中に、人々の営みはあると言ってもいい。そこには、先人への尊敬と感謝の念、地域への誇り、そしてそれに応えようとする人々の思いや願いなどがある。さらに夢や希望がそれに接続される。郷土の未来はこうして創られていくのではないだろうか。

言い換えれば、それはそれぞれの郷土固有の価値（よさ、すばらしさ）を新たに発見しようとする営みでもある。生態系との係わりで「種の多様性」が求められるように、グローバル化の流れにおいてはなおさら、それぞれの地域において自然や風土に即した独特の文化や伝統に対する価値の多様性がしっかり根付いていてこそ、一人一人の生き方を豊かに指し示す〝羅針盤〟が形成されていくのだと思う。

苦難を乗り越えるのは決して簡単ではない。外部から何が言えよう。ただただ言い澱んでしまう。それでも、「生きぬく・いのち」と「つながる思い」を礎に、郷土に「共にあった」先人たちとの対話、また「共にある」人々との語らい、さらに「新しく集う」人々との出会いを通して、「開かれた郷土」に対する誇りと愛情、そして夢や希望がきっと一つ一つ紡がれ、実を結んでいくのではないだろうか。

―― 本書の構成について ――

本書は、児童生徒に、郷土という視点から、人と人との絆の大切さについて考えさせることをねらいとして作成しました。郷土は人間の自己形成に大きく関わるとともに生涯にわたって精神的な支えとなるものです。郷土への愛情は人と人との関わりを通して深まり、思いやりの心や感謝の心などを育んでいきます。郷土に対する誇りと愛情をもち、周りの人と手を取り合い、夢に向かってたくましく生きていく児童生徒を育成したいという思いを込めた道徳教育資料集です。

第Ⅰ章は、小・中・高等学校の読み物資料です。いずれも、震災後のエピソードをもとに教材として開発したものです。全体を通して読むことも考慮し、題材をバランスよく並べてあります。学年順や内容項目ごとには配列しておりません。

対象学年については、弾力的に活用していただきたいと考え、小学校は、小学一・二年生（低学年）、小学三・四年生（中学年）、小学五・六年生（高学年）、中学校は、中学一・二年生、中学二・三年生としました。

なお、本文中の漢字の表記については、それぞれの下の学年を基準とし、未習の漢字は初出にルビをふっています。

第Ⅱ章は、読み物資料の活用例です。資料分析や授業構想の際に活用ください。資料は、全編福島県独自に作成したものです。東日本大震災に関連した資料については、今なお深刻な状況の児童生徒がいること、被災した児童生徒、被災した児童生徒を受け入れている学校等、震災の影響が広範囲に及んでいることを考慮して「五　指導上の留意点及び配慮事項（高等学校については、四）」を設けました。

第Ⅲ章は、教材を開発し活用するための実践事例集です。教材を授業に活用するまでの手順や留意点を中心に、実際に取り組んだ実践を振り返りながら報告しております。各学校で、教材を開発する際の参考になることと思います。

巻末には、平成二十六年度「ふくしま子ども宣言」作文コンクール及び「モラル・エッセイ」コンテストの優秀作品を収録しました。授業の導入や終末に紹介する以外にも、読み聞かせ等、幅広く活用していただくことを期待しています。

第Ⅰ集「生きぬく・いのち」、第Ⅱ集「敬愛・つながる思い」、そして、第Ⅲ集「郷土愛・ふくしまの未来へ」の全三集が、学校、家庭、地域で広く読まれ、児童生徒だけでなく多くの人々を勇気づけ、励ますことを願っております。

目次

第Ⅰ章 読み物資料

1 小学校編

(1) ぼくのカブトン……10
(2) たいこの音……14
(3) あいづの三なき……18
(4) こどもの日……22
(5) ひまわり……26
(6) アイナふくしま……30

2 中学校編

(1) 海へ……36
(2) あこがれの消防団……40
(3) When in Rome, do as the Romans do. ……44
(4) 墓印（はかじるし）……48
(5) 命のおにぎり……52
(6) 水道部隊の軌跡……56

3 高等学校編

(1) 野馬追に懸ける思い……68
(2) ふりこ……74
(3) 十代のしめくくり……80
(4) がんばっぺな……86
(7) それでも僕は桃を買う……62

第Ⅱ章 読み物資料の活用例

1 小学校編

(1) ぼくのカブトン……94
(2) たいこの音……95
(3) あいづの三なき……96
(4) こどもの日……97
(5) ひまわり……98

(6) アイナふくしま……99

2 中学校編

(1) 海へ……100
(2) あこがれの消防団……101
(3) When in Rome, do as the Romans do.……102
(4) 墓印（はかじるし）……103
(5) 命のおにぎり……104
(6) 水道部隊の軌跡……105
(7) それでも僕は桃を買う……106

3 高等学校編

(1) 野馬追に懸ける思い……107
(2) ふりこ……108
(3) 十代のしめくくり……109
(4) がんばっぺな……110

第Ⅲ章 実践事例集

1 小学校編

地域や児童の思いを資料に込めて……112
～資料「あんぽ柿の復活」の作成を通して～

2 中学校編

異校種間との連携……119
～小・中学校交流活動
読み聞かせによる
「おはなし会」を通して育む道徳教育～

3 高等学校編

ふくしまの復興のあゆみとこれから……134
～データ資料をもとに
復興と自分との関わりを考えさせる道徳教育～

「ふくしま子ども宣言」作文コンクール作品集……142
「モラル・エッセイ」コンテスト作品集……145
「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表……154
作成委員・参考文献等……156

資料一覧

校種	対象	資　料　名	内容項目	資料ページ	活用例ページ
小学校	1・2年	ぼくのカブトン	3－(2)　自然愛・動植物愛護	10	94
	3・4年	たいこの音	1－(2)　勤勉努力	14	95
	1・2年	あいづの三なき	2－(2)　思いやり・親切	18	96
	3・4年	こどもの日	4－(5)　郷土愛	22	97
	5・6年	ひまわり	2－(5)　尊敬・感謝	26	98
	5・6年	アイナふくしま	4－(7)　郷土愛	30	99
中学校	1・2年	海へ	4－(6)　家族愛	36	100
	2・3年	あこがれの消防団	1－(2)　強い意志・希望	40	101
	1・2年	When in Rome, do as the Romans do.	1－(2)　希望・勇気 強い意志	44	102
	2・3年	墓印（はかじるし）	4－(6)　家族愛	48	103
	2・3年	命のおにぎり	2－(2)　人間愛・思いやり	52	104
	2・3年	水道部隊の軌跡	4－(5)　勤労・社会への奉仕・公共の福祉	56	105
	2・3年	それでも僕は桃を買う	4－(3)　公正・公平	62	106
高等学校		野馬追に懸ける思い	4－(8)　郷土愛	68	107
		ふりこ	3－(3)　生きる喜び	74	108
		十代のしめくくり	3－(3)　生きる喜び	80	109
		がんばっぺな	4－(6)　家族愛	86	110

第Ⅰ章

読み物資料

1

小学校編

ぼくのカブトン

ある日、おにいちゃんと いっしょに『常葉町カブトムシ自然観察園』に いくことになった。ぼくは こわくて、もじもじ しているのに、おにいちゃんは、

「カブトムシって かっこ いいんだぞ。」

といって カブトムシに むちゅうに なっていた。

ぼくが 立って いるところに 園の おじさんが やってきて、にぎった りょう手を さし出した。右手を ひらくと、かわった すがたの カブトムシの シール。

「これはね、この 観察園の キャラクター。名まえは、『カブトン』。王さま みたいだろう。」

と、いった。

そして、こんどは、左手を ひらいた。

「うわあああ、カブトムシ。」

ぼくは、おもわず おじさんから はなれて しまった。

田村市常葉町『カブトムシ自然観察園』入り口

おじさんは、わらいながら　いった。

「よく　見て　ごらん。カブトムシの　からだは、だれも　みがいて　いないのに　ぴっかぴか。この　大きな　つのは、てきとの　たたかいにつかうんだ。」

そう　いって、虫めがねと　いっしょに　ぼくの　目の　まえに　カブトムシを　さし出した。

ゆっくり　虫めがねを　のぞいてみた。

（ひかっている　せなか。　つよそうな　つの。ほんとうに　王さま　みたいに　どうどうと　してる。）

おじさんは、カブトムシの　ことを　いろいろ　おしえて　くれた。つので　じぶんの　たいじゅうより　おもい　てきを　なげ　とばせること、木の　しるが　大すきで　虫などは　たべないこと、一年しか　生きられず、なつの　おわりには　しんで　しまうこと、カブトムシの　いる　もりの　土には　えいようが　いっぱい　あることなど、はじめて　しること　ばかり　だった。

観察園のキャラクター　カブトン

そして、おじさんは、
「この町には、カブトムシの　そだつ　ばしょが
たくさん　あって、たくさんの　人が　おせわを
して　いるんだよ。　げんしりょく　はつでんしょ
の　じこの　ときは、ほうしゃのうで　よごれて
いない　おちばを　あつめたり、土を　とりかえた
りして　くろう　したんだ。　カブトムシに　げん
きに　そだって　ほしかった　からね。」
と、おしえて　くれた。

（常葉町には、カブトムシの　おせわを　がんばって
いる　人が、いるんだ……。）
なんだか　ぼくは、カブトムシに　さわって
みたく　なって　こんどは、じぶんから　手を
出した。おじさんは、カブトムシを　そっと　のせて　くれた。
人さしゆびで　ぴかぴかの　せなかを　ゆっくり　なでた。　目が　ひかってた。
つのに　さわると　さきが　とがってた。　てきを　もちあげるのに　ちょうど　いい。

びょうきの　よう虫が　いないか　しらべます。

（そういえば、おにいちゃんも　かっこいいと　いってたな。　ぼくの　しらない　ひみつが　まだまだありそうだ。）

今、ぼくは、うちで　カブトムシを　かって　いる。『カブトン』ていう　名まえを　つけて、そだてて　いるんだ。

「はねの　出しかたと　しまいかたも　わかったぞ。　カブトンの　ひみつ、もっと　さがすぞ。」

（「教材作成委員会」作成）

たいこの音

「もうすぐ、おはやしの練習が始まるんだよ。」

と、なかよしのさちこちゃんはうれしそう。「おはやし」とは、①白河ちょうちん祭りのときに、屋②台や山車の上でたいこの演そうをすること。

「ねえ、よしこちゃん。今年は、いっしょにおはやしをやってみようよ。」

さちこちゃんにさそわれたので、わたしは、しかたなく参加することにした。

おしえてくれるのは、本町でお祭りのおはやし係をしている大竹さんだ。

「地しんがあった年はお祭りができなくて、とてもざんねんだったけど、みんなでがんばって、次の年から、何とか、続けられるようになったんだ。」

大竹さんが、うれしそうに話してくれた。

「まずは、みんなでたたいてみるか。」

はじめての体けんだ。どきどきしながらたいこをたたいてみた。バチがたいこの皮の上をはねて、「ポン」と気持ちのよい音をひびかせた。こんな感じで音が出るんだ。

大竹さんは、

「音を出すのはかんたんだけど、みんなで合わせるのはむずかしいぞ。最後までがんばれよ。」

と声をかけてくれた。こうして、おはやしの練習が始まった。

① 白河市にある鹿嶋神社のお祭りのこと。二年に一度おこなわれ、三百五十年続いている。おみこしやちょうちんの行列、屋台や山車の引きまわしなどがおこなわれる。

② お祭りのとき、子どもたちが引いて動かす、車輪のついた出し物のこと。花や人形、ちょうこくなどでかざられている。町によって、屋台か山車のどちらかでよぶ。

曲をおぼえるまでは、たいこをたたかせてもらえない。早くたいこをたたきたくて、わたしは、バチでざぶとんをたたいて、むちゅうで練習をした。

数週間がすぎ、曲をおぼえたわたしは、たいこをたたけるようになった。心がうきうきした。ふしを歌いながらたたくと、なんとなくじょうずになったような気がした。

「今日から、みんなで合わせるぞ。」

楽しみにしていた合同練習が始まった。わたしは、みんなのはくりょくのある音や速さにびっくりさせられた。リズムを合わせるのがむずかしくてついていけない。何回やってもうまくいかず、すぐおくれてしまう。自分だけがおくれるからはずかしい。まちがったことがみんなにわからないようにと思うと、音はだんだん小さくなっていった。

わたしがうまく合わせられないせいで、演そうはとちゅうで何度もとめられた。練習のときの大竹さんは、とてもきびしい。

「リズムがばらばらだ。まわりの音をしっかり聞きなさい。」

つらい練習が続いた。手のまめがいたくてバチをおとすことが多くなった。うでがしびれてバチをふるのもつらい。

ひたいに汗をにじませながら生き生きと練習する友だちの姿がまぶしい。わたしだけがとりのこされているようで、さびしい気持ちになる。さちこちゃんが、「じょうずになってきたよ。」とはげましてくれるけれど、よけいつらい気持ちになる。練習が終わって帰るときは、くやしくて、くち

びるをぐっとかんでがまんしても、目からなみだが落ちてきた。

「おはやしなんか、やらなければよかった。」

やめようかな、と思っていたとき、後ろから大竹さんの声がした。

「練習は大変かい。たいこの音は、たたく人の気持ちがあらわれるんだ。おれもいい音だってほめられるまで、時間がかかったなあ。」

わたしは、はっとした。みんなとリズムを合わせようとばかりして、音なんて気にしていなかった。今のわたしのたいこは、どんな音がしているんだろう。わたしは、自分のバチを見つめた。

わたしは家でも練習を始めた。ふしを口ずさみながら練習をしていると、お父さんがそばに来て言った。

「昔、おはやしが聞こえてくると、みんなよろこんで家から外に出てきたもんだよ。たいこの音を聞くと自分の町がほこらしくなるからね。屋台や山車が町内ごとにちがうように、おはやしのリズムも音も町内ごとにちがうんだよ。お前が町のたいこをたたくなんて楽しみだなあ。」

お父さんにそう言われて、うれしくなった。

わたしは、町を代表してたたくんだ。そう思うと、今まで以上に練習をしなければと思った。

毎日休まずに練習を続けると、自分でもじょうずになっていくのがわかる。できなかったことが、いつの間にかできるようになっていく。みんなの音にわたしの音が重なる。せいいっぱいバチをふりおろして音を出す。かけ声を合わせてたたいたときのたいこの音は、はくりょくがある。みんなの気持ちが一つになるのが、たいこの音でわかる。

「たいこの音が、変わってきたよ。自信がついたんじゃないか。あきらめずに、よくがんばったね。」

と、にこにこしながら大竹さんがほめてくれた。

今日も練習が始まる。わたしはたいこの前に正座をすると、大きく息をすって、しっかりと前を向いた。わたしのたいこは、どんな音を奏でるだろう。

（「教材作成委員会」作成）

あいづの三なき

えみは　二年生の　とき、しんさいの　ため、おかあさんと　いっしょに、南相馬から　会津の　しんせきのいえに　ひなん　しました。そのいえの　となりには、ひとりぐらしの　よしこばあちゃんが　すんで　いました。一年たって　南相馬に　もどった　ある日、よしこばあちゃん　から　たくはいびんが　とどきました。

「えみ、よしこばあちゃんから　にもつが　とどいているよ。」

はこの　中には　①しみもちと　②おき上がりこぼうしが　四つ　そして、メモが　入って　いました。

えみちゃん、かぜひいて　ないかい。よしこばあちゃんだよ。ばあちゃんは　はるに　なって、まいにち　はたけ　しごとに　出ているよ。また、まっくろに　なって、えみちゃんに　か

① もちを水にひたしてこおらせてほしたほぞん食。

② あいづのえんにちなどで売られるみんげいひん。たおしてもおき上がることからえんぎがよいといわれる。家ぞくの人数より一つ多く買うとよいと言われている。

りんとみたいって　いわれる　かな。

わたしは、あかるくて　はたらきものの　よしこばあちゃん　らしいな、とおもって　わらって　しまいました。

ばあちゃんは、

「えみちゃん、ばあちゃんと　さんぽに　いこうか。」

といって、いろいろな　ところに　つれて　行って　くれました。うすももいろの　山ざくら、どこまでも　つづく　なの花ばたけ、ばあちゃんと　いっしょに　きれいな　はなを　見ていると、たのしい　きもちに　なりました。いっしょに　どろだらけに　なって、じゃがいも　ほりも　しました。ばあちゃんの　つくった　じゃがいもは　とっても　おいしかったです。

そういえば　こんなことも　ありました。

大きな　かえるを　みて、ないてしまったとき、

「こわく　なくなる　おまじないを　おしえて　あげようかね。まねして　ごらん。」

「③さすけね。　ねっか　さすけね。」

ばあちゃんが　にっこりと　わらいました。まねして　みると　いつのまにか　なみだが　とまって　いました。

よしこばあちゃんは

③会津地方の方言
「だいじょうぶ。まったく　だいじょうぶ。」

「まごが　できた　みたいで　うれしいなあ。」
といって、学校に　行くときは、まいあさ、手をふって
見おくって　くれました。ほんとうの　ばあちゃん　み
たいでした。

会津って　いいところだなあと　おもうように　なっ
たころ、南相馬に　もどることに　なりました。おわか
れの日　よしこばあちゃんには、あえませんでした。「お
わかれの　日は、ないちゃうから　見おくりには　行か
ないよ。」と　ばあちゃんは　いっていた　そうです。

おかあさんが　しんせきの　おばさんに　きいた　は
なしだと、わたしが　南相馬に　もどって　から、よし
こばあちゃんは　いつも　わたしの　はなしを　してい
る　そうです。よしこばあちゃんの　ことを　おもいだ
すと　目から　なみだが　こぼれました。わたしは
いっしょうけんめい　へんじの　えと　てがみを　かき
ました。

おばあちゃん。おてがみ　ありがとうございい

ました。わたしは　げんきです。わたしは　三年生になりました。わたしの　なき虫も　よしこばあちゃんの　おまじないの　おかげで　少しずつ　なおってきました。えみが　よしこばあちゃんと　いっしょに　なの花ばたけに行ったときの　えを　かきました。おばあちゃんの　いえの　ちゃのまに　かざってください。なつ休みには　あいに　いきます。

わたしが　かいたえと　てがみを　おかあさんに　見せると、おかあさんが　こんなことを　いいました。

「会津に　すむと、ゆきが　おおくて　つらくて　なき、人に　やさしくされて　うれしくて　なき、はなれる　ときに　わかれが　かなしくて　なく。これを　あいづの　三なきと　言うのよ。えみには　むずかしい　かな。」

わたしは　よしこばあちゃんの　ことを　おもい出して　いいました。

「ううん。わたし　なんとなく　わかるわ。」

（「教材作成委員会」作成）

こどもの日

毎年五月五日こどもの日に、地域の人たちが子どもたちのすこやかな成長を祈るお祭りが「天神様のお下がり」だ。①南相馬市で百年以上も続いている。

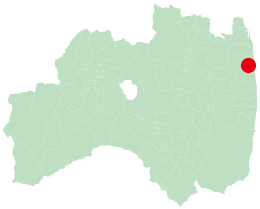
子どもたちが大きなはたを持ち、おみこしをかついで、丘の上にある天神様におまいりにいく。むかしはおまいりをした後、海まで下がっていたので「お浜下り」とも言われていたそうだ。ぼくも小さいころから近所の友だちといっしょに天神様までおまいりに行っていた。

平成二十三年三月十一日、ぼくの住んでいる地いきは、大きな地しんとともに、とても大きな津波におそわれた。波は、たくさんの家をのみこんだ。次の日には、原子力発電所の事故が起きた。ぼくも町の人たちも、みんな遠くへひなんしていった。

あれから三年がたち、町の人が少しずつもどりはじめたころ、ひなんをしてはなればなれの人たちを集めて「天神様のお下がり」をふっかつさせようという話がもちあがった。

その話がでてから、南相馬市の仮設住宅に住んでいるおじいちゃんは、時間を見つけては、天

写真：『原町市史』第９巻特別編Ⅱ民俗より転載



① 原町区下江井地区

神様までの道の草かりをするようになった。

「これなら、だいじょうぶだ。祭りができるぞ。」

と言うおじいちゃんに、

「こんな時におまつりなんてしていいの。」

とぼくは答えた。

「毎年楽しみにしてだべ。なんだ、よろこぶがと思ったのに……。」

おじいちゃんがさびしそうに言った。仮設住宅に住んでいるおじいちゃんにひさしぶりにあったのに、うれしい気持ちはしぼんでいった。

ぼくは、ひなん先のいわき市から、久しぶりに南相馬市にもどって自分の家のかたづけを手伝っていた。おじいちゃんも来ていた。

「おいっ、これ見てみろ。なつかしい写真が出てきたぞ。」

とつぜんおじいちゃんが言った。

「えっ、これおじいちゃん。」

すぐに家族が集まってきた。

「あっ、となりの啓三さんも写ってる。」

体の何倍もある大きなはたを重そうにかかえて先頭を歩くおじいちゃんの姿が写っていた。その

後ろには、少し小さなはたをもつ啓三さんが続いている。

「昔は、道が悪くてな。重いおみこしやはたをもって山道を歩くのは大変だったんだ。だけど、天神様は子どもの学問の神様だからな。子どもだけで力を合わせておまいりするのがならわしだったんだ。そうそう、みこしの中に、代々子ども会の頭をつとめた子どものおふだを入れるんだ、じいちゃんのも入ってんだぞ。」

おじいちゃんは、なつかしそうに目を細めた。

そう言うと、おじいちゃんはまた草かりにでかけた。

三年ぶりのお祭りふっかつの日がやってきた。ひなん先から十二人の友だちが集まった。ぼくもその中の一人だ。地域の人たちも入れて、約四十人の大行列となった。

白しょうぞく[②]を着て、えぼし[③]をかぶって、みこしをかついだ。今年は、ぼくが一番年上なので子ども会の頭だ。

はじめて参加した健太が声をかけてきた。

「ああ、重い。このおみこし重すぎるよ。」

「大切なみこしなんだからがんばれよ。天神様はおれたちの神様なんだからな。」

そう言って、ぼくは、みこしを持つ手に力をこめた。前の祭りより軽く感じた。

ぼくたち二人は丘の上を見上げた。頂上まで、もう少しだ。今まで頭になった人は、これを伝え

② 白い衣服のこと。

③ 日本の伝統的な男性用かぶりものの一種。

続けてきたんだ。

一番大きなはたを先頭に、みこし、たいこ、さいせんばこと、おじいちゃんが草かりをしてくれた道を上って行く。三年ぶりのたいこの音がひびきわたる。

「ドンドンカッカ、ドンドンカッカ」

丘の上から見る海はきらきら光っていた。

（「教材作成委員会」作成）

ひまわり

「健ちゃん、図書室に本がたくさん入ったんだって。昼休みに見に行こうよ。」

本が大好きなぼくは、仲良しの健太くんを誘った。東日本大震災以降、さまざまな救援物資に交じって、全国からたくさんの本が、学校に送られてきていた。

「うん……。本もうれしいけれど、ぼくはちがうものもよかったな。」

健太くんの答えに、ぼくは言葉をつまらせた。

「本じゃないもの……。健ちゃんは、どんなものがいいの。」

聞き返すと、健太くんが言った。

「となりの学校には、サッカー選手が来て、サッカー教室を開いたらしいよ。いとこの学校には、歌手が来て、歌のプレゼントをしてくれたんだって。」

「えっ、本当。いいなあ。」

ぼくたちは、震災後、被災地を訪れる有名人のことで話が盛り上がり、いつしか図書室に行くことを忘れてしまっていた。

五月のある日、全校集会の時のことだ。校長

先生がおっしゃった。

「福井県鯖江市にある立待小学校のお友だちが、みなさんを元気づけるために、ひまわりの種を送ってくれました。イラストをかいた手作りの袋に種を入れて、たくさん届けてくれました。自分の背丈よりも大きなひまわりから種を収穫する時には、指先が紫色に変わるまで頑張ったそうです。みんなを応援するためにつくった歌も贈られてきました。さっそく、みんなで聞きたいと思います。」

ひまわり

福井県鯖江市立立待小学校
３年生のみんな

少しでも　だれかの　力に　なりたい
ひまわりの花を　さかせたい
小さな種が　つながって　いって
たくさんの　小さな　芽を　出したよ

風がふいても　曲がっても
雨が降っても　立っている
太陽に　向かって　のびてゆく
黄色い　大きな　ひまわりの花

秋になったら　種が　とれたよ
みんなの　気持ちが　とどいたよ
心の中にも　さいた　ひまわり
いつまでも　ずっと　さき続けるよ

風がふいても　曲がっても
雨が降っても　立っている
太陽に　向かって　のびてゆく
黄色い　大きな　ひまわりの花

みんなが　助け合えば　心もつながる
そんな　日本が　大好きだ
100人の　人が集まれば
100こ以上の　愛が　集まるよ

風がふいても　曲がっても
雨が降っても　立っている
太陽に　向かって　のびてゆく
黄色い　大きな　ひまわりの花

心の中の　ひまわりの花

やさしいメロディーとともに元気のよい歌声が、体育館中にひびきわたった。ぼくは、胸の中に、何かあたたかいものがこみ上げてくるのを感じた。

『風がふいても曲がっても　雨が降っても立っている　太陽に向かってのびていく　黄色い大きなひまわりの花』

すてきな歌詞が、ぼくの耳にいつまでも残った。

『風がふいても曲がっても　雨が降っても立っている　太陽に向かってのびていく黄色い大きなひまわりの花……。』

家に帰ってからも、ぼくの頭の中には、あのメロディーが流れていた。口ずさんでいると、お母さんが笑顔で話しかけてきた。

「あら純也。すてきな歌ね。」

ぼくは、ひまわりの種と歌のことを話した。

「まあ、福井から。ずいぶん遠くから送られてきたのね。純也たちのことを応援してくれる人が、日本中にいるってうれしいことね。それに歌詞がすてきよね。だって、ひまわりがまるで純也みたいだもの。」

「えっ、ぼくがひまわり……。」

ぼくは、思わず聞き返した。

「地震の後、たくさんつらいことがあったでしょ。それでも前を向いて頑張っている純也を見ていると、お母さんたちも元気になれたの。すてきな歌をつくってくれた福井の友だちに、お母さんからも『ありがとう』が言いたいわね。」

ぼくははっとした。

「ぼくが、ひまわり……。」

次の日から、交代でひまわりに水やりをすることにした。ぼくは、ひまわりみたいだと言われたことがうれしくて、この歌を歌いながら、毎日水をやり続けた。

夏、ひまわりは、今まで見たことがないくらい大きな花を咲かせた。

「先生、見て。すごいよ。このひまわりは、ぼくより背が高いよ。」

花壇に集まった一年生が、ひまわりを見て大はしゃぎしていた。

太陽に向かってまっすぐ伸びる大輪のひまわりは、ぼくたちを見てほほえんでいるようだった。

（「教材作成委員会」作成）

アイナふくしま

「さやか、どうした。動きが合ってないぞ。」

「なんだかやる気が感じられないな。」

地区で、八十年ぶりに三匹獅子舞を復活させるため、小学生の踊り手を募集しているという話をさやかが聞いたのは、昨年の今頃だった。「地域を活気づけ、震災を乗り越えたい」という願いが込められているということも耳にした。さやかは、募集ポスターの迫力ある獅子舞の写真にひかれ、すぐに参加を決めた。

習いはじめはよかった。基本の動きもすぐ覚え、先生からよくほめられたし、獅子頭を初めて手にしたときは、ワクワクした。でも、週二回、夜七時から一時間半の練習は、思っていたよりたいへんだった。しばらくすると、「参加しなければよかった。」などと思いながら家に帰ることが多くなった。

浮かない顔で家に帰ると、新聞を広げていた父が、

「去年、さやかたちの学校に来て、フラダンスを教えてくださった工藤さんの話が載っているよ。」

と言って新聞を見せてくれた。

「アイナへの思い込め」

震災と原発事故で経験したことや被害にあったふるさとへの思いを、ダンサーみんなが言葉に出し合って生まれたフラダンスが、「アイナふくしま」だ。工藤さんは、震災から三年たった今も、「ア

「アイナ」はハワイの言葉で「ふるさと」という意味。

上記の新聞記事は、2014年5月に朝日新聞に連載された「フラガールの半世紀」と、スパリゾートハワイアンズ・ダンシングチームの工藤むつみさんへの取材をもとに作成されている。

イナふくしま」をステージで踊るたびに、「震災と原発事故の記憶を忘れまい」と誓う。

三年前の震災直後のことだった。「地元に元気をと思って、これまでステージに立ってきた。」「私は避難所を回って踊りたい。」湧き出る思いを胸に、いわき市内の避難所訪問をスタートに、全国各地と韓国（ソウル）の百二十五か所で、計二百四十七公演を行った。

公演を始めて間もない七月。忘れられない出来事があった。東京ドームのナイターの試合前、観客にいわき産のトマトを配った。放射性物質は検査済みなのに、受け取る人は少なく、手の甲で払いのける人もいた。悲しかった。工藤さんの自宅周辺には農家が多く、トウモロコシやトマト、ナシの畑があったが、原発事故後、畑には雑草が高く生い茂り、ナシの木は切られていた。

「事故は終わっていない。まだ苦しんでいる人がいる。私はステージに立ち続けます。みんなの元気と笑顔を取り戻したい。」

さやかは、やさしく手を取ってフラダンスを教えてくれた工藤さんの笑顔を思い出しながら、新聞を読んだ。そして、あの震災の時のことも思い出した。

□アイナふくしま□

生きている限り
なんども　なんどでも
人は立ち上がれる
強くなれる　必ず
決して忘れない
あきらめない心
笑顔で踏み出す
新しい一歩
ふと隣に目をやれば
同じ気持ち抱いた仲間
繋いだ手　離さないで
輝く未来はきっとある
アイナふくしま
ここにしかない　この場所で
アイナふくしま
笑顔咲かせよう　もういちど

今　心から　笑える幸せ
かみしめて
今を大切に　今を生きよう
きっと乗り越えられる
どんな高い壁も　みんなで
アイナふくしま
ここにしかない　この場所で
アイナふくしま
笑顔咲かせよう　もういちど

アイナふくしま
ここから　明日へ　未来へ
アイナふくしま
ここから　明日へ　未来へ

こわかった地震のこと。たくさんの家が流されておそろしかった津波のこと。父を家に残し母と弟の三人で過ごした避難生活のこと。そして家に戻ってからの放射線量を気にする不安な日々のこと。

うれしかったこともある。それは、学校がはじまり、友達と再会できた時のこと。いろいろな方々が励ましのメッセージを届けてくださったり、学校に来てくださったりしたこと。そして、家にも学校にも、震災前と同じように、あるいはそれ以上に、明るい笑顔や元気な声があふれるようになったこと。一つ一つ思い出しながら、それらは決して忘れてはいけないことのように思えた。

父は、新聞をたたみながら言った。

「獅子舞の先生が、子どもたちが本気になって練習している姿を見ていると、未来は明るい、元気が出てくるとおっしゃっていた。祭りを見に来た人たちも、きっと同じように感じるのではないか。踊りは違っても、踊る人の気持ちが見る人に伝わるということは同じじゃないかな。」

工藤さんは、「アイナふくしま」を踊りながら、客席に向かって語りかける。そしてその思いが、たくさんの人に伝わっていく。

三匹獅子を踊る人の気持ちが、見ている人に伝わるとは考えもしなかった。さやかは、自分の獅子舞が先生から何度も注意されてきた理由がわかった気がした。

「みんなに支えられ、元気になってきた私たち。地域の人たちが楽しみにしている獅子祭りで、今度は私の元気を伝えたい……。ふるさとに、思いを込めて。」

三匹獅子舞を奉納（ほうのう）する宵（よい）祭り、そして本祭りは、あと十日にせまっていた。

（「教材作成委員会」作成）

2

中学校編

海へ

あの日、私は小学校にいて、みんなと一緒にうら山にいちもくさんに駆け上がった。父は祖母と姉を乗せて、必死で車を走らせた。それにもかかわらず、大津波は父の車をすっぽりと飲み込んでしまったという。

祖母と姉は遺骨となって避難先の仮設住宅に戻ってきた。海辺にあったお墓は流されてしまったので、新しいお墓を建てるまでは、祖母と姉の遺骨が二つ並んで父と私の生活を見守ってくれている。私はうれしい時つらい時、いつも二人に話しかけて過ごしてきた。幼い頃に母を亡くした私にとってかけがえのない存在だった。

「私の分までお線香あげてきてね。」

一時帰宅して、お墓参りに行くという父に声をかけて送り出した。警戒区域に私の家はある。

帰宅した父は、つぶやいた。

「いやぁ、みんな流されてたよ。テレビで見たのと一緒だ。あの日から何にも変わってねぇ……。」

父のため息まじりの言葉に相づちを打ちながら、もう帰られないのかな……ぼんやりと考える。

「何もかもなくなってたよ。だがな、手作りの慰霊碑が一つあって、そこで線香あげたんだ。そこには「力水」が一本おいてあってな、いやあ、なつかしかったなあ。だれかが供えてくれたんだな。」

出初式や安波祭[②]でふるまう地元の酒を、船方たちは『力水』と呼んで大切にしてきた。

「仲間と漁の話をしてたら、うれしくなってな。全部なくなったけれど、海のにおいはするしよ。なんだか、

① 大漁だった漁船に漁業組合から贈られた地元の酒。

② 昔から受け継がれている海の安寧を願う祭事。

また海に出てえなあって思ったんだ。美咲。父ちゃん、いつかまた漁に出て、③請戸のうまい魚を食わしてやるからな。」

「……そんなのいらない。」

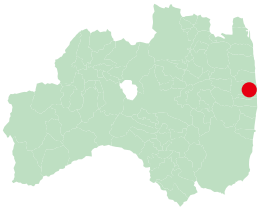
父と言葉を交わさない日が続いた。

震災の起きたとき、家族の安否もわからないまま、友達の家族と避難することになった。早く家族に会いたい、それだけを願っていた。やっと父と再会できたのは一週間後のことだった。父は私を見るなり、ぎゅっと抱きしめて大きな声を上げて泣いた。しかし、祖母と姉はあの日の荒れ狂う海にさらわれてしまった。私はあれから海なんて一度も見ていないし、見たいとも思わない。それなのに、なぜ父はまた海にでたいというのか、私たちの大切な家族を奪ったあの海に……。

私は父の気持ちがまったく理解できなかった。

そんな私の気持ちをよそに、父はまた昔の仲間と電話で話をしている。気になって聞き耳を立ててしまう。どうやら父は船を探しているらしい。私は、父に反旗をひるがえすかのように、わざとふすまをバチンと閉めて居間を出た。

その晩、父の漁師仲間の源太さんが訪ねてきた。私は隣の部屋でそっと耳を澄ます。



③浪江町請戸

「『力水』が手に入ったから、供えてやって。」

父はこの心遣いをとっても喜び、祖母と姉の遺骨の前に丁寧に供えた。

「漁から手ぶらで帰ると、『魚捕るまで家に帰ってくるなよ』って、ばあちゃんによく怒られたもんだ。でもな、大漁でこの酒を持って帰ると、ばあちゃんは上機嫌でな。」

父のはずむような声が響く中、源太さんがぼそっとつぶやいた。

「今ごろは、スズキやイナダが捕れるじきだなあ。でも、もう船はないしなあ……。」

「実はな、今、船を探してるんだ。」

また、あの話だ。

「俺だって漁には出たいけどな、あの日のこと思い出すとなあ……。」

源太さんの声は沈んでいた。

「やっぱり海に出ないと寂しくてならねえんだ。こうやっていると、『何やってんだ。早く漁に出て、魚捕ってこい』ってばあちゃんの声が聞こえてくるようでよ。俺はいつか漁に出て、港に大漁旗をなびかせたいんだ。うまい魚をうんと捕って、港のみんなに食べさせてやりたいんだ。」

父は力強く言い切った。

夜が明けないうちから毎日漁に出ていた父。ふと父と過ごした

請戸の生活がよみがえってきた。威勢のいいかけ声が響き合う港のにぎわい。正月、色とりどりの大漁旗に胸躍る出初式。安波祭で奉納した田植踊り④。食卓には、いつも父が捕ってきた魚料理があった。あのころの家族みんなの笑顔が次々と浮かんでくる。あの日から父の思いに寄りそうことができなかったけど、父にとっての海ってなんだろう。

源太さんが帰って、また仮設住宅に静けさが戻った。私にできることは父の力水になることかもしれない。私は大きく息を吸ってからふすまを開けた。

（「教材作成委員会」作成）

④　安波祭の時、小学生が豊作を祈るために奉納する踊り。

あこがれの消防団

「健太、火の用心行くぞ。」

幼い頃、僕は、近所の消防団員によく誘われた。喜んでポンプ車に乗り込み出かけた。時々、鐘を鳴らすことができるのが何よりの楽しみだった。カランカラン、カランカラン。気分がとてもいい。

「お兄ちゃん、何で消防団やってんの。」

「何でかなあ。」

その時、若い消防団員は特別な理由は言わなかった。でも僕にとって消防団はあこがれの存在であり、ヒーローであることに変わりなかった。

『大きくなったら消防団に入る。』

と小学校の作文に書いた。

そんな憧れに影を落とす出来事が起こった。東日本大震災だった。ニュースでは連日のように津波に襲われた沿岸部の様子が流され、そこには、自衛隊員や警察官、消防士と共に活躍する消防団員の姿があった。救出活動や捜索活動に懸命に取り組む様子に胸が痛んだ。

大津波警報[①]発令直後、消防団は避難を呼びかけるため危険をおして沿岸部を巡回した。それにもかかわらず沿岸部の人々の中には、逃げおくれて命を落した人たちもいたことに、無念の涙を流す消防団員の様子を

① 大きな津波が予想される場合に気象庁から発表される警報。

見て、僕はいたたまれなくなった。

「あの時、避難をするようもっと強く呼びかけていたら……。」「無理にでも避難させていたら……。」と後悔の思いを語り涙する消防団員もいるという。僕の体から力が抜けていった。（消防団ってこんな思いをする仕事なのか……）

その年の七月二十九日。ふたたび自然の脅威を見せつけられることとなった。②記録的な集中豪雨が僕の町をおそった。一時間に一一〇ミリの記録的な雨量。家屋の全壊・半壊は一四二棟、浸水家屋は一四九棟。孤立した住民は九つの集落で四三八人。町の被害額は数億円となった。また、電気や水道といったライフラインの全ての復旧には数週間を要した。そして、唯一の鉄道路線の鉄橋が流され、③「只見――会津川口」間が不通となった。

「早く本家に逃げろ。」

ずぶぬれで帰ってきた父の叫び声が聞こえたが、雨音にかき消された。バキバキッ、ゴロゴロッ。雷のような音。山が動いている。父の背後には土砂の塊が押し寄せていた。土砂の塊は、またたく間に隣の家のビニールハウスに襲いかかった。森の一部はけずりとられ、なぎ倒された大木が道をふさいだ。

本家で不安な一夜を過ごした翌朝、家のある川の向こう岸には信じられない光景が広がっていた。

「誰か、いませんか。」

消防団員は泥まみれになりながら、うもれた家屋に向かって叫んでいた。

その数日後、雨があがって、ようやく家の中の土砂出し作業が開始された。毎日のように家族が囲んだ茶の間のテーブルなど、家具のなにもかもが泥だらけの無残な姿だった。泥をかき出していくと仏壇にあげて

②「平成23年7月新潟・福島豪雨」新潟県中越地方、下越地方、福島県会津地方の三地域で発生した集中豪雨。

③

あった僕の通知表まで中にうまっていた。終わりの見えない作業が始まった。沈黙の続く作業、スコップを持つ手はこわばり、ときおり中断する重苦しさの中、何度も投げだしてしまいたいという思いにかられた。僕たちの家族は、朝からのきつい作業で疲れ、憔悴しきっていた。

その日の午後、消防団が手伝いに駆けつけてくれた。

「大変だっただろう。後は俺たちに任せて休んでくれ。」

「済まねぇなあ。」

父が礼を言うと、

「④さすけねぇ。さすけねぇ。」

力強くスコップを持つと土砂を片付けはじめた。家財道具を水で洗い出す。畳を外に干す。泥や瓦礫をかき出しては運び出す消防団の姿が震災の映像で見た、あの時の消防団の姿と重なった。全く同じだった。今現実に目の前にある。

（これが消防団か……）

先が見えないと思っていた作業が、次々に進んで、僕たちの家族にようやく光が見えてきた。

数日の間、朝から晩まで、彼らは僕らと一緒に作業を続けた。

「ぼうず無理するなよ、つかれたべ。」

顔を合わせると、いつも声をかけてくれた。そのたびに心があたたかくなる。そして、同時に消防団の姿にあこがれた。

④ どうってことないよ（差し支えない）

消防団は職業ではなく、みんなそれぞれ別の職業についている。だれかに強制されたわけでもなく、自らが望んで集まっている集団である。自分の生活をなげうって、こうして僕たちの家族を助けてくれていることを父から聞いた。

ようやく、家の中の泥は取り除かれ、家の周りにあった十メートル以上あろうかと思っていた土砂もついにはなくなった。

あれから三年、僕は中学三年生になった。今、普通の生活を送れるのもあの人たちの助けがあったからだ。あの数週間の困難を消防団の人たちと乗り越えた経験は、僕にとって一生忘れられないできごとになっていた。

今年も豪雨災害に見舞われた地域の様子がニュースで報じられている。そこには懸命に働く消防団員の姿が映し出された。あの時の消防団の姿と重なり僕の気持ちは熱くなった。あの困難な状況の中、笑顔で作業をやり遂げ、「さすけねぇ」と言って僕たちを安心させてくれたのは、消防団の人たちだった。

いつか僕もその一員になれたらと強く思う。

（「教材作成委員会」作成）

When in Rome, do as the Romans do.

アメリカで生まれ育った僕が日本に来たのは、大学を卒業してすぐのことだった。日本の伝統、特に武道に興味をもった僕は、大学で日本文化を専攻し日本語教師になろうと決めた。日本に行くと決めたときは、両親から猛反対を受けた。飛行機の事故にあうのではないか、病気になっても誰も助けてくれないのではないかとか、心配する母を、僕は必死に説得した。必ず日本の文化を学びアメリカで日本語の教師になるという夢を実現するために。

八年前、僕は、福島県の小さな町にALT①として派遣された。そこで友達となったライアンが、日本の生活についていろいろと教えてくれた。

「僕は、三年かかってやっと日本の生活に慣れてきたよ。」

髪も目も肌の色も違うライアンにとって、言葉が通じなければ、コミュニケーションをとるのも難しい、よほど苦労したのだろう。

でも僕は違った。自分から町の人たちに話しかけ積極的に友達をつくった。剣道や弓道、居合道などにもチャレンジした。野菜がとれたと言ってはおすそわけをもらい、イベントがあれば必ず誘ってくれた。町の人たちと親しくなるのに時間はかからなかった。日本人の温かさにふれた僕は、後輩のALTが悩んでいると、いつもこう言って励ました。

「ここは日本さ。『When in Rome, do as the Romans do.（郷に入りては郷に従え②）』自分から入っていかないとだめだよ。」

① 学校に配属された外国語教育助手の外国人。

② 新たにその土地に住もうとする人はその土地の風俗・習慣に従うべきだという意味。

その後、五年が経ち、僕は日本でやりたいと思っていたことが次々と実現し、その喜びに満足していた。地元の道場で学んだ剣道や弓道、居合道の腕も上がってきた。そんな僕の心を大きく揺るがす出来事が起きた。三月十一日の東日本大震災である。

その日から、大きな余震におびえる生活が続いた。その上、原子力発電所の事故の影響で流通が滞り、スーパーマーケットやコンビニエンスストアの店先からは食品が消えた。ガソリンがないので遠くまで食料の調達に行くこともできなかった。（ああ、今夜は何も食べずに寝るしかないか……。いつになったら元の生活が戻ってくるのか。）

母国の両親からは毎日のように電話が来ていた。飛行機嫌いの母は一度も日本に来たことはない。遠く日本で起こった大地震のニュースを両親はどんな思いで聞いていたのだろうか。

「今すぐ帰ってきなさい。みんなどれだけあなたを心配していると思っているの。」

電話口で母は叫んだが、僕は何も答えられなかった。

僕はもうこの町には住めないのではないかと真剣に考えた。日暮れとともに、しんしんと冷えるアパートの一室で、僕は一人で過ごす孤独に耐えきれず、外へ出た。町はひっそりと静まり返っていた。当てもなく歩いていると、震災前からよく行っていた定食屋に灯りがともっているのに気付いた。僕はすがるように店の戸を開けた。

「いらっしゃい。大丈夫だったかい。」

店のおばちゃんの以前と変わらぬ明るい声が響いた。店内には、いつものように常連の客が迎えてくれた。

「いつまで営業できるか分からないけどね。」

おばちゃんはそう言って、目の前に炊きたてのご飯と大根の煮物、白菜の漬物を出してくれた。常連の吉田さんが言った。

「米と味噌なら持ってくるぞ。」

隣の席に座っていた役場の佐藤さんからも声をかけられた。
「ここに住めなくなったら、一緒に親戚の家に避難しましょう。」
「ありがとうございます。」
「こんな時こそ、みんなで助け合わないとね。お互いさまなんだから。」
おばちゃんがからからと笑う。僕は、この町の人の温かさを肌で感じた。

僕は悩んでいた。母親は、よほど心配しているのだろう。ひっきりなしに電話がかかってくる。友達の多くが帰国していった。ここにこのままいても、僕は仕事を続けることができないだろう。これで、僕の夢も終わってしまうのか。

決心がつかず迷っているころ、あゆみと出会った。僕が勤める学校に震災のために転校してきた女の子だ。彼女はいつも悲しそうな表情をしていた。故郷の友だちと離れ、さらに父親と離ればなれになり母親と二人で暮らすあゆみが、家族と離れて日本で暮らしている自分自身と重なり、僕は声をかけた。
「僕も家族と離れて暮らしているんだ。もう五年も帰ってない。」
あゆみは、僕をまっすぐに見つめて言った。
「先生も同じなんですね。寂しくないんですか。」
このとき僕の頭の中に、夢や希望を持って日本に来た日のことや剣道や弓道、居合道に夢中になった日々が浮かんできた。
あゆみに自分の夢や夢中になれるものがあることの喜び、真剣になって武道を教えてくれる人たちについて話をした。そして、災害にあっても笑顔で励まし合い、僕を支えてくれる人たちが、この町にいることも。
「不安を恐れてはいけないよ。『When in Rome, do as the Romans do.』、日本では『郷に入りては郷に従え』という意味だよ。自分から声をかけてごらん。」
遠慮がちにあゆみが近づいてきた。

「私にも、友だち出来るかな。」
「僕は君の最初の友だちだよ。」
不安そうなあゆみの肩をポンとたたいた。
「先生、ありがとう。私、がんばっていけそうな気がします。」
あゆみの表情が少し明るくなった。
「なあに、お互いさまだよ。君のおかげで僕の心が決まった。」

僕はその夜、両親に国際電話をかけた。
「ごめんなさい。僕はまだ帰らない。」
父は落ち着いた声で僕に言った。
「お前の気持ちは分かったよ。日本がそれだけ好きなんだね。そしておまえがやるべきことが日本にあるんだね。」

あれから三年。僕は今もこの町で、明るい子どもたちの笑顔に囲まれている。

（「教材作成委員会」作成）

墓印（はかじるし）

「早く起きなさい。今日はお墓参りだからね。」
母の声で目が覚めた。八月十三日は、お盆のお墓参りの日だ。
「僕、行かない。眠いし、寝ぼけた顔では、ご先祖様に顔向けできないよ。」
「なにを言ってんの。早くお花持って行くわよ。」
と、母が言った。祖父も、追い打ちをかけてくる。
「今お前があるのは、ご先祖様のおかげなんだぞ。長男なんだから早く支度しろ。」
長男だからなんて、今の時代全く古くさい。だいいち僕はこの村で一生を過ごすなんて考えたこともない。
僕は、お供えの花を持って、眠い目をこすりながらみんなの一番後についていった。

僕の家は奥会津（おくあいづ）の山村に代々続く農家だ。ここは、日本有数の豪（ごう）雪地帯で多いときは雪が三メートル近く積もることもある。
坂を登ってお墓に着いた。その時、祖父と父が急に立ち止まった。墓石の近くの枯れた四メートルほどの細い立木を、驚いたように見ているのだ。
そして父は僕に、
「家に帰って、ばあちゃんにナタを借りてきてくれ。」
と言った。僕は、父の怒ったような顔つきに驚いて、急いで家にもどった。

「こんな、縁起でもねぇ。」

父がナタを振るい、枯れ木は根本から切られ、お墓の後ろの林に捨てられた。

僕は縁起が悪いという言葉が気になってならなかった。

家に戻って、祖父にあれはなんだったのか聞くと、祖父は一言一言をかみしめるように語り始めた。

この村にはなあ、墓印という風習があってな、さっきの枯れ木みたいに、お墓に杉の細木を立てたんだ。昔は冬の除雪が十分でなかったからな、冬を越えられなさそうな病人や年寄りのいる家では、雪が積もる前に印の棒を立てたもんだ。もしものことがあった時、お墓の場所が分かるようにするためだ。冬になると何本かはお墓に立ってたもんだ。

昔は土葬だったから冬の墓穴掘りは大変だった。まず雪でなんにもわからなくなってしまって、埋める場所を探すことがとっても難儀だった。そして土が出てくるまで半日は雪掘りだ。その後、凍った堅い土を掘り始めたんだ。葬式をやるには村中で協力してもらわないと、とてもじゃねぇが、できなかった。冬の葬式は家族にとっても村の人たちにとっても大変なことだったんだな。墓印は村中に近々葬式があるぞっていう、

御触れの意味もあったのかも知れねえなあ。

実はな、俺も母親の墓印を立てたんだ。二十年も前の話よ。お前の曾ばあちゃんのだ。

曾ばあちゃんは、今でいう脳梗塞①だったと思うんだが、右の手足がうまく動かなくて長患いしてた。

それがだんだん御飯も食べられず、ほとんど寝たきりになってしまったんだ。

ある日、枕元に俺を呼んで、「今年の冬は墓印を立ててくれ。」って言ったんだ。

俺は、「まだ大丈夫だから。」って断ったが、曾ばあちゃんはどうしてもってきかなくてな。

困っている俺に曾ばあちゃんは、こう言ったんだ。

「私を安心してじいさんのところに行かせておくれ。おまえが墓印を立ててくれるのが一番の親孝行なんだからね。」

なにかと引き延ばしてはいたが、雪が降り始めたから仕方なく細木を背負ってお墓に行った。墓印を立ててはみたんだが、なんだか親の死を目前にしてるようで、こんな辛くて悲しいことはなかったな。

今年の冬はまだ連れて行かないで下さいって、何度も墓印に拝んだよ。

家に帰って曾ばあちゃんに報告したらな、「すまなかったねえ。これで、みんなに迷惑かけないですむよ」って言われたんだ。こっちがすまねえ思いでいっぱいなのにな。曾ばあちゃんは、自分のことより残される家族のことを一番に考えてたってことなんだな。

昔、この村は米も十分とれず、今のように生活にゆとりはなかったけど、命や家族をずっと大切に考えていたんだよなあ。

① 脳に酸素と栄養を供給している動脈が細くなったり詰まったりして、その先に血液が流れにくくなる疾患。

祖父は語り終え、ちょっと目頭を押さえた。その後、気を取り直すようにお茶を一口飲んだ。僕にとって祖父の話は衝撃（しょうげき）だった。

祖父はどんな気持ちで墓印を立てたのだろうか。正直言って、僕には十分理解できない話だった。

僕はまだ肉親の死というものに直面したことがない。だけど、この村に生きる人間として忘れてはならない大事なものを、教わったような気がした。

送り盆の日、僕は先頭でお墓に向かった。今日は目的があった。曾ばあちゃんがいつ亡くなったのか、僕はこの家の何代目に当たるのか、墓誌②（ぼし）を見て確かめてみようと思ったからだ。

墓印は豪雪（ごうせつ）に見舞（みま）われるこの村ならではの風習だったという。

（「教材作成委員会」作成）

② 墓石に刻まれた死者の経歴。

命のおにぎり

「おい、見てみろ。あの日のおにぎり、これじゃないか。」

父に言われて、新聞をのぞき込んだ。一緒に読みながら、僕は、あの雪の日のできごとを思い出していた。

大粒の雪は、一向に止む気配はない。車は、いつの間にか渋滞に巻き込まれていた。

今日は祖母の誕生日だ。入院して一人でさびしがっている祖母をお祝いするため、ケーキを持って父と出かけた帰りだった。車の中で、しばらくは、父と祖母の話をしていたが、車はなかなか動かない。このまま家ににたどりつけないのではないかという不安にかられる。父は、さっきからラジオのニュースに聞き入っている。大雪警報が出されたようだ。

病院を出てから二時間が経過していた。ガソリンは心配ない、三年前の東日本大震災の時に苦労した経験から、いざというときのため、ガソリンをいつもいっぱいにしていた。車には毛布、カイロ、飲料水まで、非常用品を積んでおく習慣もついていた。しかし、食料だけは

積んでいなかった。出がけに母からおにぎりを持っていくよう声をかけられたが、すぐに帰るからと断ったことが悔やまれた。

雪は、いっそう激しさを増していった。すでに夜の十時をすぎていた。眠くなってきたが、おなかがすいていてすぐ目が覚めてしまう。パン一切れ、チョコレート一粒だけでもいいから口に入れたい。何も食べられず、我慢することが、こんなにつらいとは……。

僕たちはそのまま車の中で朝を迎えた。

トントントン。その時、窓ガラスをたたく音が聞こえた。窓を開けると、発泡スチロールをかかえ雪だらけになった小柄なおじいさんが二人立っていた。吐く息が白い。

「こんにちは、すごい雪ですねえ。おなかすいたでしょう。おにぎり作ったんで食べてください。」

「えっ、私たちにですか。」

「ええ、みなさんへの恩返しで作ったんです。大変でしょうが、がんばってください。雪も、いつかは止みますから……。」

おじいさんは大きなおにぎりを僕と父に一つずつ渡してくれた。

「ありがとうございます。本当に助かります。」

父は、何度も頭を下げていた。

おにぎりは、ほんのり温かかった。僕たちは、一口一口かみしめるように食べた。これまで食べた中で一番おいしいおにぎりだった。二人で顔を見合わせると笑みがこぼれた。

でも、恩返しって何なんだろう。こんなに寒い雪の中、見も知らぬ僕たちのために……。僕は、不思議で

ならなかった。

新聞を読み終えて、僕は言った。

「あの時のおにぎり、これだったんだね」

「どおりでおいしかったわけだ」

父と顔を見合わせた。あの日のおにぎりの味が思い出された。

（「教材作成委員会」作成）

水道部隊の軌跡

当時、私は、いわき市の南部にある水道局事務所に勤務していた。

三月十一日　十四時四十六分、東日本大震災発生

突然激しい揺れが襲い、いたるところで断水が発生した。

「事務所より二号車、応答願います。大丈夫でしたか。」

「こちら二号車、異状なしです。」

無線の声は興奮ぎみだった。職員は全員無事だった。しかし、電話はつながらず、市内の様子がどうなっているかはまったく知ることができなかった。後から聞いたことだが、市内はほぼすべての地域で漏水①が発生し、ライフライン②の一つである水道が壊滅状態となっていたのだ。私たちは、この時から果てしない戦いへ挑むこととなった。

「浄水場③より事務所、どうぞ。」

「はい、こちら事務所、どうぞ。」

「何とか取水④はできるようになりましたので、間もなく送水可能です。」

「了解。準備ができるまでそのまま待機してください。」

担当地区が被災し、ほぼすべての家が断水状態だった。まさにゼロからのスタートとなった。所長である私

上水道のしくみ

① 水道管が破損し水もれが発生すること。

② 電気、ガス、上下水道、電話、交通、通信などの日常生活を支えるためのシステム。

③ 河川や地下から取り込んだ水などを浄化・消毒し、上水道へ供給するための水道施設。

④ P五六下図参照。川や井戸から水を取り込むこと。

は、今後の復旧作業の検討を求められた。

「現在、たくさんの漏水している水道管があるはずです。それを修理しながら給水地域を広げていくしかないですね。」

次長がそういうと、技術員の酒井（さかい）さんが口をはさんだ。

「ちょっと待ってください。すべての漏水を直していたら、先へすすめません。」

「迷っているひまはない。とりあえず、漏水のある水道管は断水して水を送ることを優先させよう。」

一方、復旧工事と同時に地域住民のために飲み水を供給することも急がなければならなかった。市内の水道局には非常用の給水車を何台か備えていたが、それだけではとても足りなかった。

「所長、他県から応援の給水車が三日以内に到着するそうです。」

「それは、ありがたい。給水を待っている住民が大勢いる。それまではなんとかがんばろう。」

自分たちだけでできるのか自信はなかったが、今はそう自分に言い聞かせるしかなかった。

浄水場送水管漏水の修理

三月十二日　地区住民への給水開始

給水車が巡回（じゅんかい）し、水を届けはじめた。どこへ行ってもすぐに長い列ができた。

電話も復旧し、静まりかえっていた事務所に問い合わせが殺到（⑤さっとう）した。「いつ水道が出るのか。」「どこに行

⑤ 多数の人や物が一度にどっと押しよせること。

水道局での応急給水

けば水がもらえるのか。」電話は鳴り止まなかった。

「できるだけ早く水がでるように作業していますのでもう少しお待ちください。」

「給水車は近くの中学校へ行きますので、そちらで水をもらってください。」

息つく間もなく次の電話が鳴った。非常事態に技術者として蓄積してきた経験や知識のすべてがガラガラと崩れていく思いがした。

三月十三日　緊急事態発生

現状に追い打ちをかけた。

「所長、たいへんです。原子力発電所で爆発が起きたそうです。」

「爆発だって……、被害状況は……。」

職員にも動揺が走った。放射能汚染の不安から市外へ避難する工事業者もでてきた。

「えっ、中止ですか。はい、しかたがありません。連絡を待ちます。」

「所長、どうかしましたか。」

「原子力発電所の事故により、他県からの応援部隊の派遣は中止だそうだ。」

「そんな……。われわれだけでは無理です。工事業者もほとんどいないですよ。」

「すまない……。」
「修理資材を積んだトラックが、県境の手前でストップしているそうです。」
「ガソリンがなくて、給水車が動けません。」
悪い知らせがこれでもかと続いた。
（限界か……。）

職員は不安を抱えながらも一日も早い復旧のために現場に出ていた。
落ち込んでいる暇などない。私たちにはやるべきことがある。
私は黙々と復旧作業を行う職員のために、食べものを集めようと奔走⑥した。
「友達の家から水をもらってきたわよ。ごはんを炊いておにぎり作るからね。」
妻も応援してくれた。
「ああ、そうしてくれ。助かるよ。」
さらに開いている弁当屋をさがしたり、農家の友人に頼みこんでお米をもらったり、いつしか職員の食事を確保するのが私の大切な仕事になっていった。
そんな矢先、仙台にいる息子とはじめて連絡がついた。震災から四日後のことだった。全身の力がぬけるのを感じた。

三月二十一日、応援の給水車到着

多くの方の応援があり、作業が劇的にはかどった。これならいける。明るい兆しに全職員が、さらに士気を高めて自分の任務に取り組んだ。

⑥ 物事がうまくいくようにあちこちかけまわること。

四月十一日　震災から一ヶ月経過

避難していた工事業者がもどり、復旧工事の現場は少しずつ活気づいてきた。

「今日でもう一ヶ月だ。復旧まで三ヶ月かかると思ってたが、みんなのおかげで早く進んだ。ごくろうさま。」

「がんばった甲斐がありましたよ。所長。」

技術員の酒井さんが言うと、他の職員からも笑顔がこぼれた。

帰宅しようとしたそのとき、地鳴りとともに激しい揺れに襲われた。震度六弱の余震だった。全域復旧まであともう少しというところで、また、ふりだしにもどった。

「すまない……。出動だ。」

「まかせてください。」

返事が事務所内からかえってきた。さっきまで和んでいた空気が一瞬にして緊張に変わった。

四月二十六日　沿岸地区の給水作業開始

全国からの給水応援

「水だ。水が出たぞ。」
「こっちもでたよ。」
「顔が洗えるね。」
「ご飯もたけるよ。」
そんな声があちこちで聞かれた。
事務所には、問い合わせだけでなく応援や励ましのメールも次々と届いた。

『住民の笑顔のために、がんばってください。
世界一の水道部隊にエールをおくります。』

（原作　日本水道新聞連載「三・一一水道部隊の軌跡」金成恭一　「教材作成委員会」改編）

それでも僕は桃を買う

夏休みのある日、僕は、家族といっしょに旅行することになり、一路、新潟を目ざして車に乗っていた。

朝早く家を出発し、東北自動車道から磐越自動車道に入り、サービスエリアで休憩をとった。サービスエリアの売店にはたくさんのお土産が売られていた。その中に、福島県特産の桃が並んでいた。その桃を見て、無邪気な子どもが母親に「桃食べたい。」とせがんでいた。しかし、その子どもの母親は「だめ。」と子どもに言い聞かせようとする。子どもも引かず「なんで。」と反論する。すると、母親は「だって、この桃、福島産だよ。放射性物質っていう良くない物がついてるかもしれないからね。」と説きふせたのだ。しぶしぶ諦めた子どもの姿を見ながら、僕は、心の中に何かひっかかりを感じていた。

車に戻り、走り始めた車の中で、僕は両親にさっきの出来事を話した。父は「やっぱり放射性物質がついていないとは言い切れないからな。」と言い、母も「確かに心配ではあるね。」と言った。これまでの自分を振り返ってみると、僕も同じような

ことをしていたことを思い出した。僕の住んでいる地域のスーパーマーケットでも、「福島産」と表記されていると、どうしても避けてしまうことがあった。しっかり検査を受けて市場にでていると分かっていても、なんとなく不安だったからだ。サービスエリアの出来事にひっかかりを感じてはいたが、僕はそのことを忘れようと思った。

しかし、僕の頭から、「だって福島産だよ」という言葉が離れることはなかった。なぜ、そんなにも、その言葉が気になるのか、僕は、旅行中、ずっと考え続けていた。そして、思い当たった。僕が小学五年生の時に友達から言われた、あの言葉と同じ、嫌な響きを感じたからだ。

小学五年生の時、僕は仲のよかった友達と大げんかした。理由はささいなことだったが、言い合いはとまらなくなり、とうとう互いに相手を罵倒するようになった。その時、最後に友達が僕にこう言ったのだ。

「黙れ。中国人。」

僕は中国生まれの日本育ちだ。日本に来てからずっと、自分が中国国籍であることを表に出して生活してきた。そのことに対して、友達の誰も触れることはなく、僕も中国国籍であることを気に留めることはなかった。

しかし、あの時、その友達の言葉は、鋭利な刃物となって僕の心に突き刺さった。そして、自分は他のみんなと違うんだと切なくなった。仲の良かった友達が、心の中では僕を差別していたんだと感じ、悔しくてしかたがなかったのだ。幸い、友達とは仲直りすることができたが、しばらく、あの友達の放った言葉は、僕の胸をひっかき続け、嫌な響きとなって耳の奥に残っていた。

その嫌な響きと同じものを、「だって福島産だよ」という言葉に僕は感じたのだ。僕の場合は、中国という国のことを知りもしないのにばかにされ、福島の桃は、放射性物質のことをあまり知らないのに、危ない

と決めつけられ、自分と桃が重なって見えたのだ。風評被害という言葉は知っていたが、この時、僕は、福島の桃は、被害ではなく、「差別されているのだ」とはっきりと感じた。

だから、僕は、桃を買うことにした。僕は差別される側の気持ちを知っている。それなのに、その僕が、知らず知らずのうちに、他の人と同じように福島県産の桃に偏見をもち、差別していた。それは、桃だけにとどまらず、福島の人々を差別していることにもなるのだと気づき、これではいけないと思ったからだ。

新潟からの帰り道、僕は、磐越自動車道のサービスエリアで、桃を買った。それは、もう偏見をもたない、差別などしないという、小さいけれど大きな僕の決意でもあった。

二十一世紀の今、日本そして世界中のあちこちで、いまだに多くの偏見や差別が残っている。生まれた地域や肌の色、病気、そして、福島原子力発電所のように事故に関係するものなど様々だ。それらの偏見や差別の根本にあるのは、何なのだろう。僕は、警戒心ではないかと思う。よく分からないから、見えないから怖く疎ましく、自分から遠ざけようとする。その気持ちが、偏見や差別を生むのだ。

では、どうすれば、私達は警戒心をもたず、この世界から、偏見や差別をなくすことができるのだろうか。その鍵は、二つあると僕は考える。一つは、他の人のことをよく知ろうとする姿勢。もう一つは、他の人の気持ちを思いやる想像力。この二つが、未知のものへの警戒心を取り去っ

てくれる。

偏見や差別を、この世界からなくすことは本当に難しいかもしれない。けれども、二つの国の良さを知っている僕は、相手を知ろうとする姿勢と思いやる想像力をもち、周囲の人に接していこうと思う。いつかきっと、お互いを慈しみ合う世界になることを信じて。

（「第三十三回全国中学生人権作文コンテスト」生徒作文）

3

高等学校編

野馬追に懸ける思い

福島県には地域に根差した多くの祭りや行事がある。福島市のわらじ祭り、二本松市の提灯祭り、会津地方の大俵引きなど、地域の人々の思いに支えられ、数百年の時を超え受け継がれている。

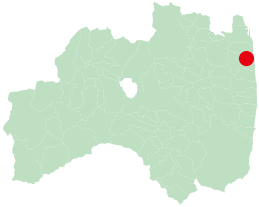
相馬地方にも古来より受け継がれている伝統行事がある。それが相馬野馬追[①]だ。相馬氏の祖である平将門が、原野に放した野馬を捕える軍事訓練と捕えた馬を神前に奉納したことを由来としている行事で、一千有余年の歴史を持つ。相馬地方の平和と安寧を祈る神事であり、現在は国の重要無形民俗文化財となっている。野馬追が行われる初夏、町はまるで戦国時代にタイムスリップしたかのようだ。相馬野馬追が近づくと「夏が来た」と地域の人々は口をそろえる。

僕は、そんな南相馬市の中学生、駆だ。僕たち相馬地方の人々は、農耕で使う機会がなくなった今でも馬を愛し、家族同様に大切にしている。我が家はじいちゃん、父ちゃん、そして僕の親子三代で相馬野馬追に参加していて、もちろん家では馬を三頭飼っている。

じいちゃんは野馬追に出場し始めて六十年の大ベテラン。春になると、道具の手入れや馬の調子を見て、夏の出陣に向けた準備を念入りに行う。それを見ると父ちゃんも

神旗争奪戦に備える騎馬武者たち

① 相馬野馬追は7月最終土～月曜日に行われている行事。初日は出陣式、宵乗り競馬、二日目はお行列、甲冑競馬、神旗争奪戦、三日目は野馬懸が行われる。



僕も、夏の足音が聞こえてきた気がしていた。

「おい、駆、朝だぞ、起きろ。」

朝は四時に起き、馬の世話をする。それが我が家の習慣だ。

「野馬追でがんばってもらわないとな。」

と意気込む勇壮な武士のような父ちゃんの横顔を見て、いくらなんでも毎日四時は辛いよなあ、と思いつつ、眠い目をこすりながら手伝いをする自分がいた。家の習慣だと自分に言い聞かせ、馬小屋の掃除、給餌（きゅうじ）を終え、乗馬練習に汗を流してから学校へ向かう。友達は昨日見たテレビやゲームの話で盛り上がっている。僕にはゆっくりテレビを見ている余裕はない。適当に相槌（あいづち）を打ち、いかにも見ていたかのように話を合わせる。友達の生活がうらやましい。

そんな僕には、親友の剛士（たけし）がいる。剛士の家も小さいころから馬を飼っていて、クラスで唯一（ゆいいつ）野馬追の話ができる友達だ。いろいろと相談し合えていつも心強い。

「僕の父ちゃん、朝早く起きて手伝えって言うから辛くてさあ。」

「そうだよねぇ、うちの父ちゃんも同じこと言うよ。でも野馬追のためだからしょうがないよねえ。楽しみだなあ野馬追。本当に最高の祭りだよね。」

そう話をする剛士の顔はいつもキラキラしている。

「おめでとう、駆。春からは高校生だなあ。体も大きくなるし、装束（しょうぞく）②を仕立て直さにゃならんなあ。」

じいちゃんは中学校の卒業式から帰ってきた僕にそう話しかけてくれた。

「……、うん。」

② 野馬追いで使う鎧兜や着物など。

その日の午後、東日本大震災が起きた。今までに経験したこともない大きな揺れに柱がめきめきと音を立てた。家具が倒れ、棚の物はすべてが床にちらばった。沿岸部では、巨大な津波が防風林（ぼうふうりん）や家を飲み込み、田んぼの真ん中にはいくつもの漁船が打ちあがっていた。この世の終わりのようだった。僕の家は、津波の被害はなかったものの、その後の原子力発電所の事故の影響を受けた。発電所から二十五キロの距離にあったため、緊急時避難準備区域③に指定され家族で避難することになったのだ。我が家で飼っていた馬は、父ちゃんの知り合いが経営している岩手県の牧場で預かってもらうことになった。剛士は、自宅が放射線量の高い計画的避難区域④に指定され、南相馬を離れて神奈川県の学校へと転校していった。

テレビのニュースが流れた。

『今年の相馬野馬追は、会場の南相馬市原町区の雲雀ヶ原（ひばりがはら）祭場地が福島第一原発から三十キロ圏内の緊急時避難準備区域に指定されているため、メーン行事の甲冑競馬（かっちゅうけいば）⑤と神旗争奪戦（しんきそうだつせん）⑥の実施の見送りを正式に決定しました。』

「俺たち、今年の野馬追は出られねえのか、こんなに続いた祭りで、こんなこと初めてだ。」

テレビを見ていたじいちゃんがそうつぶやいた。父ちゃんはとなりで悔しそうに涙を浮かべた。

静かな雲雀ヶ原祭場地の夏が来た。

震災以降、朝早起きして馬の世話をすることもなくなった。馬の世話をするのがあんなに辛かったのに、

静かなメーン会場の雲雀ヶ原祭場

③ 政府が住民に対していつでも屋内退避や避難が行えるように準備をしておくことを求めた区域。

④ 政府が住民に対して区域の指定から、約一か月の間に避難のため立ち退くことを求めた地域。

⑤ 甲冑をつけて行う競馬。

⑥ 高く打ち上げられた旗（御神旗）を勇壮に奪い合う行事。

急になんだかぽっかりと心に穴が開いたようなさみしい気持ちになった。家族が集まると決まって牧場に預けた馬の話になった。牧場の人には慣れたかな、えさはきちんと食べているかな、気候が変わって体調を崩していないかななど、馬のことが気になってしかたない。馬がうちの家族の一員だったと言うことを改めて感じた毎日だった。

九月に緊急時避難準備区域が解除になり、僕たち家族は南相馬の自宅に帰ってきた。そして、馬たちも岩手県の牧場から帰ってきた。馬運車（ばうんしゃ）からは我が家で飼っていた三頭の他に、もう一頭、馬が降りてきた。四頭目の馬、それはまさしく剛士が大切に育ててきた馬だった。半年ぶりに見る馬の目は、美しく透き通っていた。

「元気でよかった。」

父ちゃんはそう馬を抱き寄せて首をさすり、一生懸命頬（ほお）を撫（な）でた。

「父ちゃん、僕、馬の世話頑張（がんば）るよ。」

翌年の夏、野馬追が例年通りの形[⑦]で実施されることが決まった。そのことを剛士に伝えると、夏休みに入って避難先から練習のために戻ってきた。乗馬練習や給餌を一緒にする中で、お互いの高校のこと、部活のこと、そして野馬追のことを夢中になって話し合った。

野馬追の日が来た。汗だくになりながら鎧（よろい）を身にまとい、馬の背に乗った。もちろん、じいちゃん、父ちゃんと並んでだ。

「いざ出陣！」

⑦ 原発二十キロ圏内である小高区の行事は一部行われないものがあった。

法螺貝の合図で馬を進める。

行列が行く沿道には、たくさんの地元の人や観光客の姿があった。馬の背から見る郷里の景色はこんなにも広く、活気に溢れ、そして美しかったのか、改めて感じる瞬間だった。

雲雀ヶ原までの道中、剛士が語りかけてきた。

「駆が馬の世話を引き受けてくれたお蔭で、俺もこうやって参加することができたんだよ、ありがとな。」

僕は恥ずかしくなり、返事をすることはできなかったが、剛士の気持ちに応えようとにっこり笑った。

背中に付けた旗指物が風になびき、馬の蹄が響き渡る。

「雲雀ヶ原に向け進軍中！」

そう軍者⑧が叫び、馬が嘶くと、

「震災に負けず頑張れ！」

「野馬追、応援しとるぞ！」

とたくさんの拍手や歓声が飛び交った。

馬の背にまたがり、以前のように多くの地元の人たちと行進できることのうれしさと同時に重みを感じていた。

雲雀ヶ原祭場地にはさらにたくさんの人の姿があった。甲冑競馬と神旗争奪戦は例年通りに行われて相馬の地に活気がよみがえった。これだけたくさんの馬が一堂に会する祭りは全国他にない。まさに、現代によ

整然とした騎馬武者の行列

⑧ 軍師、副軍師を補佐し、上司の命を受け実務を担当する役。

みがえった戦国絵巻そのものだ。

夏が近づいてきた。僕は今年、社会人になった。出勤前の馬の世話と練習は欠かせない。朝早くから町には蹄（ひづめ）の音が軽快にこだましている。

「精が出るね、駆くん。」

と近所の人も声をかけてくれる。

今年もこの季節が来たか、と地域の人たちも喜んでいる。

「僕がこの町の、この伝統を守り抜いていく。あの震災があっても途絶えることなく守り抜いてきた野馬追とその誇りを僕が未来へ引き継いでいこう。」

そう心に誓い、握った手綱（たづな）に力を込めた。

（「教材作成委員会」作成）

ふりこ

二〇一一年三月十四日

私はかじかむ手に息を吹きかけ、何度も携帯電話の待ち受け画面の我が子の顔を見つめていた。八月に生まれたばかりの我が子。自分はどうすべきなのだろうか、思いはふりこのように揺れていた。

息子の名は陽太（ようた）といった。生後七ヶ月に達し、ようやくハイハイができるようになった。いつも愛くるしい笑顔を振りまいてくれる。私と妻にとってかけがえのない太陽のような存在だった。

老人介護施設で働いていた私は、東日本大震災後、先の見えない混乱の中で多くの利用者を連れて、中通りにある体育館に避難してきていた。他の避難者との間にパーテーションもない広い体育館。多くの人々のざわめく声が、絶望にも似た空気とともに充満していた。板張りにシートを敷いただけの空間にいると、もうすぐ四月だというのに寒さが足下（あしもと）を伝って体の芯（しん）まで入り込んでくる。寒さと睡魔で思考が働かない。もう三日間、ほとんど不眠不休の状態で働き続けていた。

施設の利用者は、食事の世話からおむつの交換まで、手を貸さなければ自分ではできない重度の要介護認定①者がほとんどであった。三十名ほどの職員が随行②（ずいこう）し、お年寄りの世話をしていたが、介護機器がないため、おむつ交換一つとっても、大変な労力が求められる。ストレスで、奇声を発したり、徘徊③（はいかい）するお年寄りもいた。夜通し見守らなければならず、身体的にも精神的にも負担が増していった。しかし、いつまで続くか分からないこの避難生活の中でも、職員たちは、精一杯自分の任務に取り組んでいた。

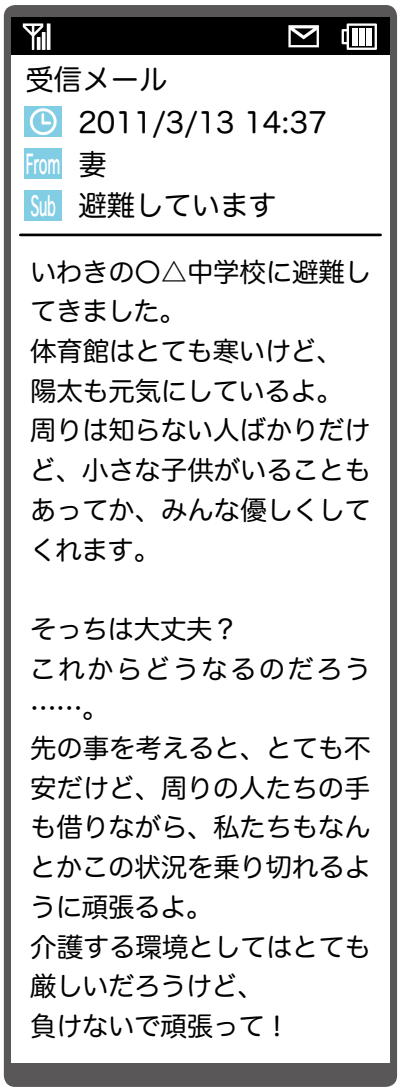
やっと妻からメールが届いた。この混乱のさなか、十分な安否確認ができずに心配していたが、無事にいわき市に避難したという。

① 寝たきりや痴呆等で、常時介護を必要とする状態になった場合に、介護サービスが受けられるよう、市町村で認めた者のこと。

② 人のお供として、付いていくこと。

③ どこともなく歩き回ること。ふらつくこと。

かつて同じ職場で働いていた妻は、私の置かれている状況を察してか、私を安心させるようなメールを送ってきた。しかし、気丈(④きじょう)に振る舞っていても、きっと大変な思いをしているのだろう。そう思うといても立ってもいられず、今すぐにでも家族のもとに駆けつけたいという思いがわき上がってくる。しかし他の職員も皆、目に見えない放射能に恐れを抱きながら、家族のもとに駆けつけたいという思いと仕事への使命感との間で葛藤(⑤かっとう)し、苦しんでいる。自分だけがここを離れるわけにはいかない。私は歯を食いしばり、強くこぶしを握りしめた。



三月十七日

震災からほぼ一週間が経過した。徐々に全国から支援の手が届き始め、不足していた物資も足りるようにはなってきた。しかし、職員の心身にかかるストレスは減るどころか、増す一方だった。中には限界を超え、人目を気にすることなく泣いたり、物思いにふけったりする者が出始めた。いつまでこのような状況が続くのか。先の見えない暗闇(くらやみ)の中を手探りで歩く時間が無限に続くような気がした。そんな中、一人また一人と家族のもとへ帰る職員が増えてきた。私は決してその人たちを責めることはできなかった。なぜなら、皆苦しみ、悩み抜いた末、出した結論なのである。そして、その多くの職員が、後ろ髪を引かれる思いや罪悪感を抱いたままで、職場を離れていったことも確かなのである。

④ 非常の際にも動転せず、平常心を保つこと。

⑤ 二つのものの間で心が揺れ動くこと。

依然として、行き場のない多くの弱者が目の前に残されている事実には変わりがない。頭の片端には幼い乳飲み子と妻の顔がちらついたが、私はぐっとこらえ、その姿を脳裏からかき消した。

三月十八日

今日も一人、職場を離れ、家族のもとに帰って行く職員が出た。日に日に職員が減り、一人にかかる負担はますます増していった。家族に会いたい。そんな思いが強くなってくる。そう思い始めると、いつもなら全く気にならない排泄物の匂いまでもが神経にさわり、見るのもいやになってきた。

受信メール
2011/3/18 8:15
From 妻
Sub Re:

いつもは元気な陽太も自由に動き回れないからか、
昨日の夜からぐずって泣いてばかりだよ……。
周りの人の迷惑になるから、昨日からひたすらおんぶして外を歩き回ってる。
全く満足に眠れず、気がおかしくなりそう。

受信メール
2011/3/18 13:12
From 妻
Sub 熱を出してしまいました

陽太が熱を出しちゃいました……。
39度もの高熱で、すごく辛そうです。
今やっと寝てくれたけど、私一人じゃすごく不安です。
こんな状況で、子供の看病なんて無理だよ。
なんかもう疲れた……。
限界だよ……。
いつまでこんな状況が続くの？
いつになったら、迎えに来てくれるの？

妻から届くメールにも弱気な文面が目立つようになってきた。私は片手に携帯を握りしめ、ただその場に立ち尽くすことしかできなかった。

三月十九日

日増しに、家族に会いたいという思いが強くなっていく。全てがどうでもよくなってきていた。私一人が頑張ったところで、この状況が変わることなどない。どうして自分だけが、この苦労をかぶる必要があるのだ。実際に、早々と持ち場を放棄（ほうき）した人もいるではないか。もう使命も責任も放棄して、家族のもとへ帰ろう。そして妻と陽太と一緒に過ごそう。その方がよっぽどいいに決まってる！

その時である。いつもにこにこと笑い、周りに愛想（あいそ）をふりまいてくれる施設でも人気者のおばあちゃんが、私の手を握り、ぼそっとつぶやいたのだ。

「めんどうみでぐれで、ありがどな。」

その瞬間、はっと我に返った。自分はなんてことを考えてしまったのだろう。目の前に私を頼りにしているたくさんのお年寄りがいるのに……。なんて自分は弱いのだろう。なんて薄情（はくじょう）なのだろう。自分は何のためにこの仕事に就いたのだろう。自分が情けなくなった。

小さな頃からおじいちゃん子だった。共働きで、ほとんど家を空けている両親の代わりに、自分の面倒を見てくれたのが祖父だった。祖父と一緒の布団で眠るのが大好きだった。祖父と手をつないで近所を散歩しながら、学校でのいろんな出来事を話すのも日課だった。自分の生活は、幼い頃から祖

父が中心だったのだ。祖父が自分に注いでくれた限りない愛情に感謝し、いつしか恩返しがしたいと思っていた。その思いが介護の道へと自分を向かわせたのだった。仕事を始めて七年になろうとしていたが、今では天職[6]だとさえ思うほど毎日が楽しく、充実していた。仕事を通して、自らの存在意義を感じることも多くあったではないか。ふっと原点に思いが戻り、自らを振り返った。

私は、こうつぶやいていた。

「大丈夫。俺はここにいっからな。」

私は寒さで冷たくなったおばあちゃんのしわくちゃな手を包み込み、そっとさすった。窓から春の訪れを告げる暖かな春の光が降り注ぎ始めていた。

五月八日

東北の地にもようやく春が訪れた。初夏を感じさせる暖かな日だった。妻と陽太は、先月のうちに、遠方より迎えに来た両親とともに郷里へと帰省していた。

全ての利用者の受け入れ先も決まり、施設は一時解体の運びとなった。ともに過ごしてきたお年寄りとの別れに、悲しみで胸が張り裂けそうだった。これからの生活が、幸せで満ちあふれたものになるように、祈らざるを得なかった。ともに戦ってきた職員との別れの時も迫っていた。これまでの苦労をねぎらいながら、固い握手を交わした。涙で前が見えなかった。いつか施設を再び元の場所で開所しようと誓い合い、皆、それぞれの場所へと帰って行った。無我夢中の一ヶ月だったが、なぜか私の中には、最後まで自分の責任を果たせたという不思議な清々しさもあった。

真っ先に、妻と陽太のもとへと駆けつけた。

妻は、何も言わず、笑顔で私を迎え入れてくれた。そして涙ぐむ声でただ一言、

⑥ 天から命ぜられた職。そこから、その人に最も合った職業ということ。

「おかえりなさい。」

そうつぶやいた。私は妻の目をまっすぐに見つめ、はっきりとこう言った。

「苦労をかけたね。本当にありがとう。」

妻は、手で顔を覆いながら、ただ黙ってうなずいた。

陽太は、いつの間にか伝い歩きができるようになっていた。陽太を抱き上げ、その柔らかな髪に触れた瞬間、頬を涙が伝った。次から次へととめどなく涙があふれて止まらなくなった。これまでの時間が走馬燈⑦のように頭を巡り、様々な思いが次から次へとあふれでてきて、ぬぐってもぬぐっても涙が止まらなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あれから四年が経った今、私は避難先で家族とともに生活し、やはり介護の仕事を続けている。たくさんのお年寄りの笑顔に囲まれ、とても充実した毎日を送っている。

あの時、お年寄りを残して職場を離れたいという思いを抱いた罪悪感は今でも消えない。私の心の中にしこりのように残っている。これからもずっと消えないだろう。でも、この一件を通して気付いたことこそが、私にとっての本当の幸せなのかもしれないと、今は思うのである。

（「教材作成委員会」作成）

⑦ 回転するにつれて、内側に貼った切り抜きの絵の影が、外枠に貼った紙や布に回りながら映って見えるようにしかけた灯籠のこと。「走馬燈のように」といった形で用い、次から次へと様々な映像が脳裏に現れては過ぎ去っていく様子を比喩する。

十代のしめくくり

人の波にもまれながら東京駅の改札を出る。行き交う人々の足取りが速い、都会の空気に圧倒（あっとう）される。明日は大学入学試験だ。これまで自分は精一杯がんばってきた。力強く足を前に踏み出した。

あの日は突然やってきた。高校一年生だった私は体育館で卓球部の活動に励んでいた。ものすごい揺れに恐怖が走ったことと、顧問の先生の「台の下に入りなさい。」の叫ぶような声だけが今も脳裏（のうり）に残っている。その後のことは、正直あまり思い出したくない。家を失い、学校を失い、そして友人達とも離ればなれになってしまった。

避難先を転々（てんてん）とし、中通りの高校に転入することになった。制服を失った私は、あの時のジャージ姿で新しい級友にあいさつをしていた。見慣れない制服。新しい教科書。違った先生。当たり前のことだか、学校が変われば、何もかもが変わってしまう。

心機一転（しんきいってん）と自分に言い聞かせても、思い出すのは前の学校のことばかり。一年生も終わりに近づき、楽しい毎日だった。まさに高校生活を謳歌していた。二年生に進級したら、いよいよ進路の準備も本気で始めなければ、と思っていた。自分としては、漠然と学校の先生になりたい、と考えるだけで、それに向けての進学準備はまだまだこれから、という状況だった。そんな、楽しく、のんびりとした日々も、すっかり夢のような事になってしまった。

ふと、周囲のひそひそ話が気になるようになった。なかなか新しい環境に溶け込むことができなかった私

は、きっとそれを自分の噂話だと思い込み、一層級友と距離を置くようになった。そうして、少しずつ学校を休む日が増えていった。私の母も、震災以降、自分の娘に苦労をかけてしまったと感じているらしく、「具合が悪かったら、無理しなくていいよ。」と声をかけてくれる。次第に学校から足が遠のいていった。

自宅で休んでいても、何をするというわけではない。母も私に気兼ねして、登校を勧めることもない。お互いに「このままではいけない。」と感じているはずなのに、何となくそれを言い出せない雰囲気があった。そんな私たちに、新しい学校の担任の田中先生は、こまめに連絡をくれた。私の体の具合を心配してくれたり、家族のようすを尋ねたりしてくれた。無理に登校を勧める言葉はなかった。田中先生が、あえてそこにふれないでいるのが私たちには十分分かっていた。私のことを気遣い、何度も連絡をくれた。

休みが二週間続いて、私は少しずつ焦りはじめてきた。母も同じだったと思う。私に「田中先生、毎日心配してくれているから、ちょっと先生の顔を見に行ってみたら。」と声をかけてきた。わたしは、「親孝行のつもりで行ってこようかな。」と、照れ隠しに答えて、学校へ足を運んだ。学校の門を入るときは、胸がどきどきした。

田中先生は、登校した私を笑顔で迎えてくれた。すぐに教室に入るのは大変だろうと、違う部屋で話すことになった。先生は、私からいろいろ聞きたかったのだと思ったけど、自分自身のことを話してくれた。先生は中学生の時、①宮城県沖地震を経験したこと。そのとき、足の不自由な祖母と二人きりで自宅にいて、そ

① 一九七八年六月十二日に発生したマグニチュード七・四の地震。最大震度は仙台市などで震度五。死者二十八名、負傷者一千名余りの被害があった。

の祖母を背負って家の外に出ようとしたこと。近所の人たちが、中学生の自分をたくさん励ましてくれたこと、等々。先生は、わたしに気遣いながら、少しずつ話題を広げてくれた。そして、宮城県出身の先生が、なぜ福島県の高校で先生をしているのか、ということまで話が進んだ。震災以降、自分の将来に関わる話をする機会のなかった自分にとって、久しぶりに明るい話をすることができた。そうして、しばらくは先生の授業の空いている時間に合わせて登校することになった。

そうして登校し始めてから一週間ほどした頃、田中先生と一緒に学校の図書館に行った。授業でグループごとの調べ学習をしているので、私にも参加してほしい、とのことである。久しぶりに同じクラスの生徒に会うのは、とても抵抗があった。その反面、今の自分の「何とかしなければ」という不安を和らげるチャンスかもしれない、という思いもあった。

ちょうど放課後の時間で、そこには同じクラスの幸枝（さちえ）がいた。今思うと、先生が考えてくれていたのだと思うが、もちろん、そんなことは、先生も幸枝もおくびにも出さなかった。

先生は、私と幸枝にこう話した。

「今、授業でグループごとの調べ学習をしているの。よければ、あなたにも参加してほしい。幸枝さんのグループに入ってくれるかな。」

「幸枝さんがいいなら……。」

と私。そうして、私と幸枝は図書館で席を並べて調べ学習をすることになった。調べ学習の内容は、現代社会の「よりよく生きることを求めて～哲学と人間～『よく生きる』とは」という課題であった。過去

の偉人・哲学者の生き方について、それらの先人の残した言葉から調べていく、というものだ。幸枝は多くの書物を広げ、何かをしきりに書き留めていた。私は、図書館ということもあり、さて、どう話しかけたらよいかと考えていた。すると、

「これ、読んでみなよ。」

とてもぶっきらぼうな言い方で幸枝から渡された本は、昔のすぐれた思想家や学者の『名言集』だった。そこには、その時代に生きた人々が、日々の出来事とどう向かい合って、どのように数々の困難を乗り越えてきたのかが、言葉に表れていた。その中に、こんな言葉があった。

―人間が生きることは、常に、どんな状況でも、意味がある。―

オーストリアの心理学者　フランクル[2]

ほんの数ヶ月前なら、特に気に留めなかったと思う。その言葉に感銘（かんめい）を受けている自分自身が意外な感じがした。先人の様々な名言に触れ、幸枝と「よりよく生きる」とはどんなことなのかを真剣に語り合った。とにかく、この調べ学習がきっかけで、私は少しずつ学校に足を向けることができるようになった。

田中先生には、時々じっくり話をする時間を作っていただいた。いつも先生は「～しなければならない。」「～してはだめだ。」というような話ではなく、穏やかな表情で私と話してくれた。ある日、先生との話のなかで、先生が教師を志望したきっかけの話があった。

② ヴィクトル・フランクル（一九〇五～一九九七）
オーストリアの精神医学者、心理学者。代表的著作に「夜と霧」がある。

田中先生は、高校時代、国語とくに現代国語（今の「現代文」）が苦手だった。漢字の読み書きと語句の意味さえ分かれば、あとはあんまり勉強しても変わらないと思っていた。ところが三年生の時に国語が新しい先生になり、文章の的確な読み取り方を学んだとのこと。ただぼんやりと文章を読んでいた先生にとって、それは大きな驚きだったらしい。その後その国語の先生と親しくなり、学校の先生という職業に興味をもつようになった。今でもその先生とは交流が続いているとのことである。

この話を田中先生とした頃から、私は将来の進路について少しずつ本気で考えるようになっていた。前の学校で漠然と考えていたことが、次第に身近な目標になりつつあった。担任の田中先生は、高校のその国語の先生に出会って、今の仕事に就いている。私は、その田中先生に出会って、影響を受けて、自分の将来の職業について考えるようになり、具体的な準備を始めるようになったのである。

それから半年後、三年生に進級。クラス替えはなく、幸枝とも同じクラスのままであった。

あるとき、幸枝と話していると、私が転入したばかりの頃の話題になった。幸枝によれば

「あの時、震災にあって転入してきたあなたのことを、みんな心配していたのよ。どう話しかけていいか、みんな悩んでいたみたい。そうこうしているうち、学校を休んで来なくなっちゃうし。そんな時、担任の田中先生が、あなたを助けるために何とかしようってみんなに話をしてくれたの――。」

そうだったのか。

あの時の幸枝のぶっきらぼうさも、変に私に気を遣わせないための演技だったらしい。一年かかってようやく、私に対する周囲の気配りに気付くことができた――。

さあ、明日は受験だ。全力を尽くそう。今まで受けたたくさんの優しさに感謝し、自分の目標に向かって努力することが、今の自分にできる最善のことだ。

（「教材作成委員会」作成）

「がんばっぺな」

大地震が起きてから数日して、僕の高校進学が決まった。喜びよりも不安な気持ちの方が大きかった。

震災後、避難のために家族がばらばらに暮らすようになった人は多いと思う。しかし、僕の場合は違った。避難してきた祖父母が僕の家で同居することになったのだ。

祖父母との最初の同居は、原子力発電所近くから避難してきた知人の鈴木さん一家に、祖父宅を貸すためであった。その間に、祖父の人柄を知る出来事があった。

震災直後で様々な物資が不足している中、その鈴木さんから祖父に、「明日から仕事に行くことになったが、ガソリンがなくて、移動できない。」と連絡が入った。すぐに、祖父と父と僕はガソリンを購入するためにガソリンスタンドに向かい、車の列に数時間並んだ。僕たちの順番になり、僕は祖父と携帯用①のタンクを持って車から降り、祖父が店員にタンクにガソリンを入れて欲しいとお願いをした。

「車でない人は、あちらの列に並んでください。」

「そんな。何時間も並んでいたんだから、お願いします。」

祖父は必死に店員に頼んだ。

「あちらに並んでいる人たちもいますので……。」

「今避難してこっちにいるんだけど、このガソリンを遠くで待っている人がいるんだ。頼みます。」

困った様子の店員に、それでも、祖父はかぶっていた帽子を脱ぎ、何度も頭を下げてお願いをした。

僕は、向こうに並んでいる人たちの視線が気になり、祖父の行為を恥ずかしく感じた。困っていた店員が

① 携行缶と呼ばれる。一時的なガソリンの携行に便利な容器。

店長に相談しに行ってくれた。その間に僕は、祖父の頭の上に少し積もった雪を払いながら言った。

「じいちゃん、僕があの列に並ぶから、あきらめようよ。」

「今からあの列に並んだら、また何時間もかかっぺな。早く届けてやりたいんだけどな。」

少し疲れた表情で祖父が言った。僕たちの様子を心配してか、車にガソリンを入れ終えた父が走って来た。

そこへ、店長がやって来た。

「避難されて来てるんですか。大変ですね。申し訳ありませんが、半分の量でよければ、お入れしますよ。」

「いいです、いいです。それだけでも助かります。」

祖父の表情はパッと明るくなり、何度も頭を下げていた。五ℓのガソリンが入った軽いタンクを手にして

「良がったな。これだけあれば、鈴木さんたちも家まで帰れっぺ。」

と人のために喜んでいた祖父の姿が、今も忘れられない。

そして、祖父は往復約二時間ほどかけて、鈴木さんにガソリンを届けた。鈴木さん一家は自宅へ戻ることになり、その数日後に、祖父母たちも自宅へと戻って行った。

祖父母との二度目の同居は、一度目から一カ月半が過ぎた頃だった。祖父母の家がある地域は、放射線量

が高いため、避難地域に指定されたのだ。

「これからは、長くお世話になります。いろいろご迷惑おかけしますが、よろしく頼みます。」

と祖父母は、僕ら家族に丁寧に挨拶をし、再び僕たちの同居が始まった。僕は高校生になってから、自宅から学校まで自転車通学をしていたので、雨の日や朝早くの登校時などには祖父の車で送迎してもらった。

その年の夏休みのある日、僕は祖父母と一緒に祖父母宅の草むしりに行った。祖父母宅が近付くと、

「この辺りの景色を見ると安心するなぁ。放射能はここまで来ないと聞いていたのに、悔しいな。」

と祖父が言った。見渡すとあたり一面、田畑だったところに草が生い茂っていた。家に着いた時にも、

「五年か十年かしたら、ここに戻って来れっぺがら、それまで、家の手入れくらいは、やらねえどな。」

と祖父がつぶやいていた。僕はこの時、初めて祖父の複雑な思いを知った。

それから、一時間ほど僕は祖父と一緒に草むしりをし、祖母は家の中の掃除を行った。昼には、きれいになった庭を眺めながら用意してきたおにぎりを三人で食べた。祖母が握ってくれた普通の梅干し入りのおにぎりが、最高においしく感じた。

草が生い茂った田畑の様子

秋の彼岸前には、祖父母宅の近くにある先祖代々の墓掃除を初めて手伝った。墓参りでは、避難している人たちが、久しぶりの再会を喜んでいる姿があちらこちらで見られた。墓のそばに咲いている彼岸花を見つけると祖父は、

「こうやって、墓参りに来たり、自宅に入ったりできんだから、おれたちは幸せだなぁ。」

と祖母に話していた。

同居生活が一年過ぎると、お互いに気疲れや不自由さもあったが、それぞれに生活のリズムができてきた。祖父母たちは近所の人とも仲良くなり、近所に畑を借りて、二人で野菜作りを始めていた。一方、僕は高校二年生になってすぐに、部活動内の人間関係で嫌なことがあり退部してしまった。他にも、教室代わりである体育館での授業に集中できず、成績が下がるばかりでイライラした生活を送っていた。

「おい、悠太。部活がないなら、畑でも手伝わないか。」

「ああ、でも、テストが近いから、今日は無理だな……。」

手伝う時間はあるのに、畑仕事を年寄りの仕事のように思っていた僕は、祖父からの誘いは勉強を理由にして断ってばかりいた。実際は、勉強をすることはなく、ただ家にいることもできずに遊びに出掛けることが多かった。採れた野菜を手にして喜んでいる祖父母たちを複雑な思いで見ていた。

僕は高校三年生になり、進路について悩んでいた。大震災後から大学で勉強して建築士になりたいと考えていたが、勉強もせず日々過ごしている僕に大学受験は無理だと思い始めた。夏休みの三者面談を目前にして、僕は別な進路を口にした。そばで聞いていた祖父が、

「悠太。あきらめんのは、まだ早いぞ。」

と、僕に言った。とっさに僕は、

「じいちゃんに何が分かんだよ。いろいろおせっかいなんだよ。」

と言ってしまった。

次の日、祖父に顔を合わせるのを避けて、いつもより早く家を出た。帰宅した時には、祖父の姿はなく代わりに父がいた。そして父から、祖父は今朝体調が悪くなり病院に行ったこと、そして癌（がん）が見つかり、そのまま検査入院することになったことを知らされた。あんなに優しい祖父が病気になるなんて……。僕は前日に祖父に言った言葉を後悔し、祖父が言った「あきらめんのは、まだ早いぞ。」という言葉を思い出した。僕は大学生になった姿を祖父に見せたいと強く思った。

七月下旬に、祖父は癌の手術を受けた。無事手術を終え、病室に戻って来た祖父は、

「みんな待っていたのか。ありがとうな。」

とみんなに笑顔を見せた。そして、僕を見て言った。

「悠太。じいちゃんは病気なんかに負けないぞ。」

「じいちゃん。ごめんよ。おれ、大学を受けるよ。」

祖父は笑顔を浮かべ、僕に手を差し出して言った。

「がんばっぺな」

「うん。がんばっぺな。」

しばらくの間、僕たちは手を握ったままでいた。

退院後、祖父が治療の副作用による痛みに耐え、天気の良い日には、散歩する姿が見られた。祖父が頑張っている姿を見るたび、『僕も大学受験に負けないぞ。』と、目標に向かって勉強に励んだ。

センター試験の日、祖父は体調を崩して入院中だったが、僕は祖父を心配しながらも、『がんばっぺな』と、受験会場へと向かった。

（「教材作成委員会」作成）

第Ⅱ章

読み物資料の活用例

ぼくのカブトン

3―(2)　自然愛・動植物愛護（小学一・二年）

一　ねらい

身近にいる昆虫に苦手意識をもっていた主人公の心情の変化や新たにとった行動について考えさせることを通して、生き物の不思議や愛おしさを感じ取って大事に育てようとする態度を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

小学校低学年の時期は、自然の中で遊び、動植物を飼育栽培する体験等を通して、それらに対するやさしい心を養うことが求められる。

本資料は、苦手意識のあった生き物でも、新たな発見から神秘的であることに気づいたり、親しみを感じたりし、身近な生き物を大事に守り育てようとする主人公の心情の変化を著している。実在のキャラクターを登場させて児童の興味・関心を高め、また、写真等も、事象の説明で活用できるものとした。

(2)　資料の概要

葉たばこ生産が盛んな（盛んだった）常葉町。広大なたばこ畑で使用する山林の腐葉土の中に、カブトムシの卵が多くあり、多量の幼虫が捕獲できる環境があったため、幼虫の飼育や成虫を観察できる施設の建設が進められた。本資料は、カブトムシが苦手な主人公が、観察園で改めて目にしたカブトムシから不思議さを発見し、飼育者から教えてもらった話に感動し、カブトムシの持つ雰囲気がキャラクターによく反映されていることにも気づき、カブトムシに愛着が持てるようになったという内容である。

(3)　資料を通して伝えたいこと

昆虫の人気者「カブトムシ」は、心を引きつけるような魅力と不思議さをもっている生き物であることをぜひ、子どもたちに気づいてほしい。また、誰もがカブトムシを手にすることができる環境を整えてくれたのは、生育に携わる人々の工夫と愛情があったことにも気づかせ、自分たちも身近な自然環境と動植物に、関心や愛着をもつことが大切であることを伝えたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・「わたしたちの道徳」（百二～百九頁）を活用し、これまで育てた生き物について話し合う。

○おじさんから、手のひらのカブトムシを見るように虫めがねをさし出されたとき、ぼくは、どんな気持ちだったでしょう。

◎おじさんのお話を聞いた後、ぼくは、どんな気持ちからカブトムシにさわるために、自分から手を出したのでしょう。

○どんなことを考えて、ぼくは、『カブトン』という名前をつけてひみつをさがしたくなったのでしょう。

・他の昆虫や、生き物の不思議さ・すばらしさに気づいたことはなかったか話し合う。

四　「わたしたちの道徳」（小学校一・二年）との関連

「いのちに　ふれて」（八十八頁～）の中から、「(2)生きものにやさしく」（百二～百九頁）を活用し、これまで飼育・栽培してきた動植物をどんな気もちで世話をしたか振り返させ、「愛玩する気持ち」や「やさしさ」があったことを想起させる。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○「郷土愛」とあわせて、「身近な生き物を大切にする心」に迫りたい。

○原発事故による影響について簡単に触れているが、児童からの質問があった際は、除染に二年かかったこと、幼虫の飼育床を腐葉からきのこの菌床に変更したことなど、苦労や工夫があったことを補説する。

たいこの音

1――(2)　勤勉努力（小学校三・四年）

一　ねらい

お囃子指導者の励ましを受け、前向きに努力する主人公の思いについて考えさせることを通して、やろうと決めたことを、目標をもってくじけずにやり遂げようとする気持ちを育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

小学校中学年の時期は、行動範囲が広くなり、興味関心の対象も多くなる。この時期に、自分の意思で目標を立て、失敗や困難にくじけずに粘り強くやり遂げる気持ちをもたせることが大切になる。また、今よりも向上したいと願って、努力することにより得られた喜びの体験を数多く実感させることも意義あることである。

本資料は、あまり関心のなかった地域のお祭りに、ふとしたきっかけで参加することになった主人公が、失敗や困難を乗り越えていく過程を描く。前向きに努力を続ける主人公の姿に共感させながら、自らの目標への取り組みについて深く考えさせたい。

(2)　資料の概要

「白河提灯祭り」は、白河市に四世紀もの間、伝統文化として守り続けられてきた祭礼である。主人公の女の子が友達に誘われて、「お囃子」の練習に参加することになる。初体験で出した太鼓の音が快く響いて楽しさを感じ、うれしさや期待感で心が躍るが、練習が進むにつれて挫折感を味わう。

くじけそうになったとき、お囃子指導者の一言で自分を見つめ直し前向きに努力を続けていこうと決意する。

(3)　資料を通して伝えたいこと

困難を避けて楽な方向をめざそうとするのではなく、自分で決めたことには、ねばり強くやり遂げようとする精神が、これからの人生においては必要になる。自分のやりたいことや好きなことを見つけ出す意思決定をする力にも気付かせたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・なかなか上手くできないことについて話し合う。

○わたしは、どんな気持ちでお囃子をやろうと決めたのでしょう。

◎「たいこの音は、たたく人の気持ちがあらわれるんだ。」と言われた時、わたしはどんなことを考えたでしょう。

○太鼓の前に正座し、しっかりと前を向いたわたしは、どんなことを考えていたのでしょう。

・自分が今、がんばっていることについて考える。

四　「わたしたちの道徳」（小学校三・四年）との関連

「やろうと決めたことは最後まで」（二十二～二十九頁）を活用し、「今よりもよくなりたい」という心を大切にすることについて考えさせる。また、自分が今、挑戦していることに着目し、目標や目標を立てた理由、努力しているときの気持ちなどを確認させる。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○導入の段階では、「自分が好きなことは何か」について考えさせてもよい。

○わたしの気持ちを立ち止まって考えさせるために、資料を前段と後段に分けて扱うのもよい。（前段「わたしは、自分のバチを見つめた。」まで）

○関連する内容項目として、「郷土愛」や「家族愛」も考えられる。展開の過程で、それらに触れた発言も大事に扱いたい。

あいづの三なき

2――(2)　思いやり・親切（小学一・二年）

一　ねらい

えみのよしこばあちゃんへの思いについて考えさせることを通して、身近にいる人に対する思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

人間関係が希薄になりがちな現代社会において、相手の気持ちを推し量ることは、温かい人間関係を築くために欠かせないことである。お互いが相手のことを思いやり、具体的に親切な行為をすることでよりよい人間関係が築かれる。

小学校低学年の児童は「親切にされた経験」が数多くあり、そのうれしさをどの児童もわかっている。だれかを思いやり、どうしても何かをしてあげたいと思ったことがある児童も多い。この気持ちを大切にし、相手の立場を考えて、手を差し伸べる思いやりを持たせたい。

本資料では、親切にしてくれたよしこばあちゃんに主人公がどんな気持ちで絵や手紙をかいたのかを考えさせる。主人公が相手を思いやる気持ちに自分を重ね合わせ、温かい心の交流について考えを深めさせたい。

(2)　資料の概要

震災後、主人公と母親は、南相馬から会津の山間部にある母親の親戚の家に避難した。同級生と離れ、住み慣れない会津でくらすことになった主人公は、不安でさびしい思いを抱えていた。母の実家は山間部にあるため、近所にいっしょに遊べる友達もいなかった。隣の家に住むよしこばあちゃんは主人公を温かく見守り、野山を見せたりするなど主人公の境遇を考えて親切にしてくれた。南相馬にもどった主人公によしこばあちゃんのやさしい気持ちが込められた宅配便がとどく。よしこばあちゃんを思い浮かべて涙する主人公に、母親は会津の三泣きの話をする。

(3)　資料を通して伝えたいこと

震災後、被災のため転居、転校した児童がいる。慣れない環境におかれ不安の中で親切にされた経験から人の温かさに触れ、相手を思いやることの価値を強く感じた児童も多い。

本資料を通し、温かい心の交流から相手を思いやる気持ちと、進んで親切にしようとする気持ちを高めたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・これまで親切にしてもらった経験を発表する。
○会津に転校してきたばかりのとき、えみさんはどんな気持ちだったろう。
○えみさんはよしこばあちゃんにつれられてさんぽに出かけたとき、どんな気持ちになっただろう。
◎えみさんはどんな気持ちで絵や手紙をかいたのだろう。
・これまでに親切にしたことであいてが喜び、自分もうれしかった経験を話し合う。
※会津の三泣きの意味について考える。（児童の実態に応じて）

四　「わたしたちの道徳」（小学校一・二年）との関連

「あたたかい心で親切に」（六十六～七十三頁）を活用して、温かい心で人に親切にして、助け合って生きることに視点を広げる。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○高齢者との交流した体験と関連づけて考えさせたい。
○会津以外の地域の児童には、会津の風土について補足して説明したい。
○会津の三泣きについては諸説があるが、会津の人の温かさに泣くこと、会津を離れるときに泣くことは共通している。
○震災に関連した資料であることや、多様な家族構成や家族状況があることを踏まえ、児童一人一人の実態に応じて十分な配慮を行うようにする。

こどもの日

4――(5)　郷土愛（小学三・四年）

一　ねらい

震災で途絶えてしまったお祭りを大切にしていこうとする主人公の思いについて話し合わせることを通して、地域の人々が大切にしてきた伝統と地域のつながりを知り、自分の郷土を大切にしようとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

小学校中学年の時期は、自分の住む地域についての関心が芽生え、地域ならではの伝統行事に参加したり、その歴史的背景を理解したりする力も発達してくる。

本資料は、実際にあったエピソードをもとにしている。震災後、避難を余儀なくされた住民が、三年の時を経て、地域のお祭りを復活させようと立ち上がる。お祭りへの参加を決めるまでの主人公の複雑な気持ちを考えさせることで、地域の伝統を守る大切さについて考えさせたい。

(2)　資料の概要

「天神様のお下がり」は、南相馬市に明治時代から伝わる伝統行事である。子ども達の健やかな成長を祈り、地域をあげてお祭りを行ってきた。しかし、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により住民は避難を余儀なくされ、このお祭りは三年間途絶えてしまう。しかし、地域を愛する住民がお祭りを復活させようと立ち上がる。一方、避難先から参加することになった主人公の思いは複雑であった。そんな中、久しぶりの我が家で見つけた「天神様のお下がり」の写真と、祖父が語ったお祭りの意味に主人公は心を動かされる。お祭りに参加した主人公は、晴れ晴れした気持ちでみこしをかついでいく。

(3)　資料を通して伝えたいこと

地域を守る住民の地域愛と、後世に伝統を伝えたいという強い思い。子ども達への深い愛情があったからこそ、伝統を絶やさずに続けてくることができた。郷土の良さを伝える一人として郷土を愛する心を育てたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・自分の住む地域のお祭りや行事について知っていることを話し合う。
○お祭りに参加するぼくの気が進まないのは、なぜだろう。
◎おじいちゃんのさびしげな表情を見ていたぼくは、どんなことを思っただろう。
○丘の上の天神様を見上げた時、ぼくはどんなことを考えたのだろう。
・地域の伝統を守るために、自分にできることは何かを考える。

四　「わたしたちの道徳」（小学校三・四年）との関連

「きょう土を愛する心をもって」（百五十八～百六十三頁）を活用し、自分のふるさとの人々、生活、自然や文化のよさについて視野を広げる。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○放射線教育と関連付けながら、原子力発電所の事故による避難区域については、地域の実態に合わせた説明を加えるよう配慮する。
○郷土を離れ、今なお避難生活を続けている住民がいるという現実と、故郷の伝統を様々なかたちで継承しようと努力を重ねている人々の存在にも気づかせるようにする。

六　補足資料

・ＤＶＤ「南相馬の子供の祭り」　企画・著作　南相馬市博物館

ひまわり

2―(5)　尊敬・感謝（小学校五・六年）

一　ねらい

支援をする人々の思いにふれて変化していく主人公の心情について考えさせることを通して、自分の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それに応えようとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

小学校高学年の児童は、日常生活の中で多くの人々とのかかわりがあることには気付いている。しかし、周りの人に「支えてもらうことが当たり前」のように感じていることが多く、感謝の気持ちを伝えたり、自ら進んで働きかけることは少ない。

本資料では、自分を支え励ましてくれる他者の存在に気付いたことで、自分にできることは何か考え行動に移していく主人公の姿が描かれている。主人公の思いに共感させ、支えてくれる人々の思いに応えていくために、自分にできることは何かを考えるきっかけとしたい。

(2)　資料の概要

本資料の主人公は、救援物資に交じって送られてくる本を喜んでいるものの、支援をする人々の思いにまで気付いていなかった。しかし「ひまわり」の歌に込められた思いにふれ，母の言葉を聞くことで、感謝の気持ちをもって、自分にできることを考えるようになっていく。主人公の心情の変化を共感的に捉えさせることで、自分の生活を支えてくれる多くの人々の思いに、目を向けさせたい。

(3)　資料を通して伝えたいこと

人は一人では生きていくことはできない。自分の生活は多くの人々の支援や協力の上で成り立っており、自分もまた支え合いや助け合いの輪の一員である。人は、他者に支えられていると気付くとき、感謝の思いを表したり、自分も誰かの支えになろうと行動したりできるようになることを伝えたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・誰かにしてもらってうれしいと感じたことについて考え、発表する。
○健太と盛り上がって話していたぼくは、何を考えていたのだろうか。
◎母の話を聞いてはっとしたぼくは、どんなことを考えたのだろうか。
○大輪のひまわりを眺めているぼくは、どんなことを考えているのだろう。
・自分の生活を支えてくれている人は誰か。その人たちに対して、今までどんな気持ちで接していたかを振り返る。

四　「私たちの道徳」（小学校五・六年）との関連

「支え合いや助け合いに感謝して」（八十八～九十五頁）を活用し、自分たちの生活を支えてくれている人々の思いについて考えさせるようにする。そして、それらの人々の思いに応えるために、自分はどうしていけばよいのか具体的に考えることができるようにしたい。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○導入の段階では、県内各地で栽培されているひまわり畑の写真資料を活用し、資料への興味・関心を高めることもできる。
○展開の段階では、インターネットを活用して、「ひまわり」の歌を聞かせることができる。（www.youtube.com/watch?v=3Tv89KiuEsE）実際の歌声にふれさせることで、主人公に自分を重ね合わせて、感謝の気持ちをもつことができるようにしたい。
○震災関連の資料であるため、事前に、児童一人一人の被災体験、感じ方・考え方を把握しておくようにする。特に、避難を余儀なくされた児童に対しては、十分な配慮を要する。

アイナふくしま

4――(7)　郷土愛（小学五・六年）

一　ねらい

郷土に元気と笑顔を取り戻したいと願う人たちの思いにふれたことにより変化していく主人公の心情について考えさせることを通して、郷土のために自分が今できることに向き合い、力を尽くしていこうとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

郷土の発展のために力を尽くしている方々の存在を知り、その思いや願いを理解することが、郷土に誇りをもち、ふるさとを愛する心を育むことにつながる。

本県では、震災によってふるさとが傷つき、元気をなくしてしまったことに正面から向き合い、今できることに懸命に取り組む人たちがいる。その思いや願いにふれることで、「自分も」という気持ちをもたせられるようにしたい。

(2)　資料の概要

地区の三匹獅子舞の練習に取り組み始めた主人公が、練習のたいへんさからやる気を失いかける。

そんな時、以前学校でフラダンスを教えてくれたダンサーが、震災直後からどんな思いでステージに立っていたのかを知り、現在も「アイナふくしま」を踊ることを通して「ふるさとに元気と笑顔を取り戻したい」という願いを客席に届け続けていることに気付く。

主人公は、このフラダンサーの行動と地域に活気を取り戻すために三匹獅子舞を復活させた獅子舞の先生の願いとを重ね合わせながら、「今度は自分が元気を伝えたい」という思いを強めていく。

(3)　資料を通して伝えたいこと

本資料では、震災で傷ついたふるさとの復興のために、自分のできることを続けている人たちの思いの尊さ、また、その思いを受け止め、「自分も」と継承することの大切さに気付かせたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・地域でお祭りが続いている理由を考える。

○浮かない顔で家に帰るさやかは、どんなことを考えていたのだろう。

○工藤さんのお話の中でさやかの心に残ったのはどこだろう。

◎本祭りがあと十日にせまったさやかは、どんなことを考えたのだろう。

・地域のお祭りや行事に積極的に参加している例について話し合う。

四　「私たちの道徳」（小学校五・六年）との関連

「郷土や国を愛する心を」（百六十四～百七十三頁）を活用し、ふるさとのよさを考えさせる。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○地域の伝統や文化を継承しようと努力している人たちのことを調べたり、ふるさとを活気付けようと力を合わせている人たちの話を聞いたりする活動を行っておくと、ねらいに迫りやすい。

六　補足資料

○フラダンサーの思いを理解できるようにするため、「アイナふくしま」の歌詞を資料下部に掲載した。

海へ

4―(6)　家族愛（中学一・二年）

一　ねらい

父の思いを理解できずにいた主人公の心情の変化を考えさせることにより、自分を守り育ててくれた親の深い愛情に気付き、家族の一員としてよりよい家庭生活を営もうとする態度を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

中学生の時期は、自我意識が強くなり、親の言動に反抗的になりがちである。そして、親は身近で当たり前の存在だからこそ、その有り難さやかけがえのなさについて日ごろから意識するのが難しい。

そこで、父の思いを理解できず反発する娘の気持ちに寄り添いながら父の思いをとらえることで、親の愛情の深さについて考えを深めさせたい。

(2)　資料の概要

震災による津波で家族を失い、原発事故に伴う避難生活の中で生きる父と娘のやりとりで構成されている。祖母と姉の命を奪った故郷の海に、また漁師として船を出そうとする父に反発の気持ちを抱く娘が、父と漁師仲間の会話から父の本当の思いに気付くまでの資料である。

(3)　資料を通して伝えたいこと

資料の中の娘の気持ちに寄り添い、心の変化をとらえていくことで、親の子どもに対する深い愛情に気付かせ、日常生活における自分と親とのかかわりについて振り返らせたい。家族の一員としての自覚をもって積極的に協力していくことが自分の課題であると気付かせる一助になると考える。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・最近、親に反発してしまったときはどんなときか、日常生活を想起させる。

○私はどうして「父が再び漁師になること」を素直に賛成できなかったのだろう。

◎私は父にとっての海とはどんなものだと考えたのだろう。

○「大きく息を吸ってふすまを開けた」私はどんな行動をとったのだろう。

・日常生活を振り返り、自分にとって親はどんな存在かを考え、家族の一員として自分にできることを話し合う。

四　「私たちの道徳」（中学校）との関連

「家族の一員としての自覚を」（百八十～百九十三頁）を活用し、自己の家族に対する思いをイメージさせたり、自分が家族の一員としてできることを考えさせたりする。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○震災でつらい思いや身近な人を亡くした経験がある生徒もいる。資料の中では、津波で祖母と姉を亡くした内容が表現されているため、実態に応じて十分な配慮をする必要がある。

あこがれの消防団

1――(2)　強い意志・希望（中学二・三年）

一　ねらい

主人公の消防団にあこがれる心情について考えることを通して、困難に直面し挫折しても、それを乗り越え、希望と勇気を持ってやりぬこうとする態度を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

中学生の時期は、障害や困難に直面すると簡単に挫折し物事をあきらめてしまい、理想どおりにいかない現実に苦しむことがある。

本資料は、災害の復旧活動を通し、見失いかけた将来の希望を、再び取り戻す主人公の姿を描いている。主人公の気持ちの動きを中心に考えさせたい。

(2)　資料の概要

消防団に憧れを抱いていた主人公が、東日本大震災で消防団の悲劇を目の当たりにし挫折を味わう。同じ年に豪雨災害にみまわれ、主人公の自宅が土砂災害にあい、その復旧作業で地元消防団が活躍する。その活動や会話の中から消防団への憧れを取り戻し、再び消防団への参加に希望を持つようになっていく。

(3)　資料を通して伝えたいこと

生きていく中で、気持ちを動かすきっかけとなるできごとや言葉に出会うことがある。その際に何を感じ、何を思うかで、その後の生き方を左右することもある。身近にある小さなきっかけに気づき、勇気と希望にあふれた人生を送ることの素晴らしさを伝えたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・将来の夢や希望について話し合う。

○主人公が震災時、消防団の映像を見て、体から力が抜けていったのはなぜだろう。

○主人公が豪雨災害時、消防団の姿を目の前で見て、何を感じたのだろう。

◎消防団の一員になれたらと強く思ったのは、なぜだろう。

・今までに、自分の生活や生き方に影響を与えたできごとや言葉を思い出してみよう。

四　「私たちの道徳」（中学校）との関連

「目標をめざしやりぬく強い意志を」（十六～二十一頁）を活用し、自分の目標やそれを目標とする理由、目標を実現するためにこれから取り組みたいことを考えさせる。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○地震や原発事故以外にも、「被災」の例は数多くあり、近年の豪雨災害等の紹介も必要に応じて行う。

○地域素材であることを考慮し、自分の住む地域の活動や、災害時の対応なども知らせたい。

六　補足資料

希望や勇気を得た教師の逸話、偉人、アスリートの名言などを、必要に応じて用いる。

When in Rome, do as the Romans do.

1――(2)　希望・勇気・強い意志（中学一・二年）

一　ねらい

震災の影響から、帰国するか、日本に残るか悩みながらも決断する主人公の心情を考えることを通して、夢や希望を持ち、勇気をもってやり抜く強い意志を持とうとする態度を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

自己の夢の前に大きく立ちはだかる現実。生徒たちの将来にもありうることである。そんな時どのように判断し、何を決断していくか。本資料が生み出す葛藤場面は、生徒たちに様々な価値判断を迫ることになり、思い悩む主人公の姿に共感させながら、自分を支えてくれる存在に気づかせ、強い意志を持つことの大切さについて深く考えさせたい。

(2)　資料の概要

日本の文化や伝統に興味を持ち、ＡＬＴとして勤務していた主人公に原発事故の影響を心配した家族から帰国を願う電話が来る。帰国を決断する友達のＡＬＴも少なくない中、帰国するべきか、日本に残るべきか思い悩む。しかし、自分には日本の文化をもっと深く学びたいという思いがあり、それを支えてくれる人たちもいる。そして、ついに決断をする。

(3)　資料を通して伝えたいこと

決断を迫られたとき、苦悩しながらも自己決定する強さがほしい。どんな結論でも、そこに自己の責任や希望を持てる答えならば、きっと後悔はないと思わせたい。また、自分を支える人々との絆や地域への感謝の心も養いたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・原発事故によって多くの人たちが避難生活を余儀なくされている様子を新聞記事をもとに想起する。
○僕が日本に来た目的は何だろうか。
○僕を悩ませたのは何だろうか。
◎僕は帰国するかどうか迷っているが、あなただったらどうするだろう。
・自分が大きな決断を迫られたとき大切にしたいことは何か、自分の思いを書く。

四　「私たちの道徳」（中学校）との関連

「目標を目指し、やり抜く強い意志を」（十六～二十一頁）を活用し、夢や目標を持つことの大切さと、困難に負けない強い意志の必要性を考えさせる。

五　指導上の留意点および配慮事項

○資料の導入部では、主人公のＡＬＴが日本での生活に大きな夢と希望を持っている様子をとらえさせたい。
○展開では、夢と現実の間で葛藤する姿から、自分だったらどんな結論を出すか、話し合わせる。資料を前半と後半に分けるとよい。この時、一つの価値観に絞り込むような言葉かけは控える。
○理想通りにいかない現実と向き合い、それを乗り越えたり、よりよい選択をしたりする心の強さだけでなく、周りの人に支えられている感謝の心、温かさについての発言を大切に扱いたい。

墓印（はかじるし）

4――(6)　家族愛（中学二・三年）

一　ねらい

主人公や家族の墓印に対する心情について考えることを通して、父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚を持って充実した家庭生活を築こうとする態度を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

中学生の時期は自我意識が強くなり、ともすれば自分が自分だけで存在していると考えがちである。父母に反抗的になったり伝統に否定的な傾向を示したりする。このような傾向を考えるとき、家族や地域社会、先人たちによって自分が支えられて生きていることに気づき、それらの人々への敬愛と感謝の念を深めることは大変重要である。

ここではお盆の墓参りで偶然に、墓印を立てたという地域の古い風習に触れることになった主人公が、祖父の回想によって、家族の絆や肉親の死と向き合うことの意味、過去から受け継がれてきた自己の生命のつながりに気づいていく変容を共感的に考えさせたい。

(2)　資料の概要

奥会津の山村に住む中学二年生である「僕」は面倒がってお盆の墓参りに行きたくなかった。渋々付いていったお墓で偶然枯れ木を目にするがそれは二十年以上前に途絶えた墓印という習わしに酷似していた。縁起が悪いということでその枯れ木は即撤去されるが、曾祖母の墓印を立てたという祖父の回想から「僕」は肉親の生と死に向き合ってきた祖父の心情に思いを馳せることになる。

墓印に託されたそれぞれの思いや願いを感じる中で「僕」は家族や村の中で命を全うしてきた曾祖母の姿に気づき、伝統や命のつながりを意識するようになる。

(3)　資料を通して伝えたいこと

苛酷な自然の中、農業という人手を食う生業で生活してきたからこそあった奥会津の風習を紹介し、自らの死期を知らせる墓印を息子に立ててもらう母親、それを立てる息子の辛さの中から親子の愛情を考えさせたい。

また、主人公である僕の行動の変容を通して自分と家族との関わり、家族の中での自分の立場の自覚、父母に孝行を尽くす事の大切さなどを気づかせたい。さらに、効率と便利さ、個人の自由が偏重される現代社会とは対極にあるが、実は忘れてはいけない人間が人間らしく生きて死んでいくとはどういう事なのか、私たちが取り戻さなければならない物がこの奥会津の習わしの中にあるということを伝えたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

○曾祖母の「すまなかったねえ」に込められた思いを想像して書きなさい。

○祖父のすまない思いとは具体的になんでしょうか。

◎この村に生きる人間として忘れてはならない大事なものとは何だろうか。

・墓印を立てる昔の習わしについてどう思うか、グループ等で話し合う。

四　「私たちの道徳」（中学校）との関連

「家族の一員としての自覚を」（百八十～百八十五頁）を活用し、家族の一員として生きること、過去から引き継がれてきた自分の命、家族への献身的な愛について考えさせるようにする。

五　指導上の留意点および配慮事項

○3――(1)「生命尊重」、4――(8)「郷土愛」、と重なる要素があるので、実態に応じて発問の視点を変えるなどして指導する必要がある。

命のおにぎり

2―(2)　人間愛・思いやり（中学二・三年）

一　ねらい

仮設住宅のおじいさんにおにぎりをもらった主人公の心情を考えることを通して、人は誰かを支え、誰かに支えられていることを知り、身の回りの人を思いやり、行動しようとする態度を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

中学生は他者からの思いやりや親切に気付き、理解し、感謝の気持ちを自覚することができる。しかし、思春期特有の「照れ」「恥ずかしさ」もあり、感謝を素直に表現できず、自分から親切な行動を取ることができないことも多い。

本資料は主人公が震災被災者の方からの支援を受け、他者からの思いやりに感動する。被災者の方がどのような思いでおにぎりを作り、困難な状況で差し入れを行っていたのか、その過程を学習者にも追体験させることで道徳的実践意欲を育みたい。

(2)　資料の概要

東日本を襲った雪害により、主人公の少年とその父も国道での渋滞に巻き込まれる。

そんな折、仮設住宅住民の方からおにぎりの差し入れを受ける。後日、父親と新聞記事を読み、人は誰かを支え、同時に支えられていることを自覚する。

(3)　資料を通して伝えたいこと

「こころ」はだれにも見えないけれど「こころづかい」は見える
「思い」は見えないけれど「思いやり」はだれにでも見える
宮沢章二『行為の意味』

このようなテレビCMが、震災直後繰り返し放送され、共感した視聴者（児童生徒）も多かったことと考えられる。

それから四年が経った今、当時小学生であった児童も中学生となり、体力も行動力も向上した。しかし、小学生の時は何気なく行えた親切な行動も、中学生になって気恥ずかしさも増し、かえって実行する機会が減ってしまった生徒もいることだろう。

主人公の中学生男子は、支えられていると思い込んでいた震災被災者が「支える側」として困難な状況下で人助けをしている状況を、その目で見て実際に自分も支援を受け感激する。「思い」を「行動」に発展させるきっかけは何であるのか、学習する生徒それぞれに考えさせたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・小学生時に人に親切にした経験について話し合い、発表する。
（事前アンケートを指導者が読み上げる形でも可）
○これまでに食べて最も美味しかったものは何か、またその理由は何か。
○震災の時の家族や近所の人との助け合いは、どのようなものがあっただろうか。
（生徒の被災の状況によっては配慮が必要）
◎仮設住宅の方々は、どんな気持ちで差し入れを行ったのだろうか。
○雪害渋滞では、どんな助け合いができるだろうか。
・「思い」と「思いやり」の違いについて考える。

四　「私たちの道徳」（中学校）との関連

「温かい人間愛の精神と思いやりの心を」（五十四～五十九頁）と関連させ、相手の立場を理解し、互いに支え合って生きていくことの大切さに気付かせたい。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○親切や思いやりの経験は発表しづらいため、書かせるなど状況に応じた工夫が必要である。
○生徒が状況を理解しやすいよう、ロールプレイなどを積極的に取り入れるとよい。
○震災で困ったことについて話し合う際には、生徒の被災状況の事前把握が必至で十分な配慮が必要である。

水道部隊の軌跡

4――(5)　勤労・社会への奉仕・公共の福祉（中学二・三年）

一　ねらい

震災時の水道部隊の活躍を目にした主人公の心情について考えることを通して、勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努めようとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

中学生の時期になると、進路や職業について興味や関心を持つようになるが、自分の生活の維持や幸福を追求するためであり、社会的な役割や使命を果たそうとする考えからではないことが多い。

本資料では、日常生活に欠かせない水道の仕事に従事する主人公が、次々と起こる想定外の困難な状況の中で、自分の仕事に命がけで臨む一人の人間としての生き方が描かれている。主人公の姿を通して、勤労の尊さや意義について考えさせるとともに、個人の立場を越えて社会全体の利益のために尽くそうとする態度を育てたい。

(2)　資料の概要

震災時、市水道局の事務所長を務めていた主人公は、大規模な断水と原子力発電所事故というこれまで経験したことのない困難な状況に遭遇する。風評被害のため物資や応援が滞る中、仲間の職員とともに全力で水道復旧にあたる。復旧後、市民から届く励ましや感謝のメールに自分たちの仕事へのやりがいや喜びを改めて感じる。

(3)　資料を通して伝えたいこと

「人は何のために働くのか」を深く考えさせ、働くことの尊さと意義を本当の意味で理解させたい。世のため人のために働くことが喜びであり、充実感・達成感に満ちた人生を送るために働くことに気づかせたい。人は社会に必要とされ、他人から認められてこそよりよく生きることができることを伝えたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・職場体験活動のことを思い出し、楽しかったことや辛かったことを話し合う。

○すべての地域で断水しているとわかったとき、主人公の私はどんな気持ちだっただろうか。

○苦情や問い合わせが殺到している状況をみて私はどのような気持ちだっただろうか。

◎震災の上に風評被害が重なり、最悪の状況下で主人公の私があきらめずに仕事を続けることができたのはなぜだろうか。

・これまでの生活を振り返り、辛くても頑張りぬいた仕事や役割について考える。

四　「私たちの道徳」（中学校）との関連

「勤労や奉仕を通して社会に貢献する」（百七十二～百七十九頁）と関連させ、働くことが人々の幸福や地域・国の発展につながる大切な社会との関わりであることに気付かせたい。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○振り返りの場面では、誰かの役に立ったときの充実感や人から感謝された時の嬉しさ等、辛くても働く意義がたくさんあることに気づかせ、働くことの素晴らしさを実感させたい。

それでも僕は桃を買う

4―(3)　公正・公平（中学二・三年）

一　ねらい

福島の桃をもとに差別のない世界の実現を訴える主人公の心情を考えることを通して、身近な差別や偏見に気付き、正義を重んじ公正で公平な社会を作り上げていこうとする態度を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

中学生の時期は、社会の在り方について目を向けはじめ、現実の社会がもつ矛盾や課題に気付き、理想を求める気持ちや正義感が強くなってくる。その反面、周囲の目を意識し、多くの意見や考えに左右されたり、自己中心的な行動をとったりしてしまう傾向もある。本資料をもとに、「見て見ぬふりをする」「避けて通る」という消極的な立場ではなく、正義がとおる公平で公正な明るい社会の実現に向けて積極的に努力していくことの大切さを指導したい。

(2)　資料の概要

本資料は、全国人権作文コンテストで内閣総理大臣賞となった中学三年生の作文である。

中国生まれで日本育ちの筆者は、夏休みの家族旅行の際、福島県の磐越自動車道のサービスエリアで福島産という理由で桃を買おうとしない親子に出会う。そのことをきっかけに自分も「黙れ。中国人。」という言葉を投げつけられ差別された経験を思い出す。筆者は「他の人をよく知ろうとする姿勢」「他の人の気持ちを思いやる想像力」が偏見や差別をなくす鍵だと考える。いつかきっと互いを慈しみ合う世界になることを信じて、福島の桃を買った。

(3)　資料を通して伝えたいこと

筆者の体験が書かれている作文をもとに、身近にも差別や偏見が存在していることに気付かせるとともに、自分ができることを考えさせ、一人一人が偏見や差別のない社会を作り上げていこうとする思いを膨らませたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・日常生活の中で、どんな差別や偏見があるのかを話し合う。

○サービスエリアで「だって、この桃、福島産だよ。放射性物質っていう良くない物がついてるかもしれないからね。」という言葉を聞いた筆者は、どんな気持ちだったでしょうか。

○仲のよかった友達と大げんかした時「黙れ。中国人。」と言われた筆者は、どんな気持ちだったでしょうか。

○筆者が、大きな決意をもって桃を買ったことについて、あなたはどう思いますか。

◎この世界から、偏見や差別をなくすために、あなたはどんなことができると思いますか。

・今日の授業を振り返って、感じたこと、考えたこと、心に残ったことをまとめる。

・教師の体験談を聞く。

四　「私たちの道徳」（中学校）との関連

「正義を重んじ公正・公平な社会を」（百六十～百六十五頁）を活用し、差別のない社会を実現するために、どうしていけばよいのかを考えていく。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○人権教育の視点も加えて指導したい。放射能に関する差別についても事例を取り上げ、差別や偏見のない社会を作っていくことの大切さに触れたい。

野馬追に懸ける思い

4―(8)　郷土愛（高校生）

一　ねらい

野馬追の再開に喜ぶ主人公の心情を考えることを通して、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人達に尊敬と感謝の念を深めるとともに、地域の歴史と文化について考え、郷土の発展に努めようとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

高校生の時期には、学習や進路選択・思春期の葛藤など様々なものがあるが、自分自身に対して目を向ける事柄が多くなる。高校を卒業し、社会に出るための一歩として地域社会とのつながりをどのようにしていくべきか考える必要がある。

相馬地方の伝統行事「相馬野馬追」が、どのような思いで受け継がれてきたかをとらえさせることで、地域文化の素晴らしさや郷土愛について考えさせたい。

(2)　資料の概要

相馬地方に伝わる伝統行事「相馬野馬追」に親子三代で参加する家族がいる。早朝から馬の管理を手伝うが、反抗期を迎え、主人公は素直に手伝えずにいた。ちょうどその時、東日本大震災が発生し、その年の野馬追は規模が縮小され参加できなかった。その中で伝統行事を守ることの大切さを改めて感じ、相馬野馬追の伝承に向け努力し、成長していく。

(3)　資料を通して伝えたいこと

地域の伝統行事は、地域の風土や文化とともに発展し、多くの人の努力があり今日に至っていることを感じさせる。また、震災により一時途絶えてしまいそうになった地域の行事をどのように守ってゆくかを考えさせることで、自分たちの住む地域の伝統行事の大切さを認識させ、伝承の仕方を考えさせたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・地域の行事がどのようにして生まれ、現在まで継承されてきたかを考える。

○初めは嫌がっていた馬の世話を主人公が積極的に行うようになったのはなぜだろうか。

○友人の「ありがとな」の言葉を聞いて、主人公はどのように思ったか。

◎主人公が行列に参加して感じた「うれしさと重み」とはどのようなものだろうか。

・地域のつながりが希薄になりつつあるといわれる現代での問題点と、それらを取り戻すための方策を考える。

四　指導上の留意点及び配慮事項

○現在も震災の影響により仮設住宅での生活や避難が続いている生徒がいるため、十分に配慮する。

ふりこ

3―(3)　生きる喜び（高校生）

一　ねらい

困難な状況に出合っても、自らと向き合い、自分の中にある弱さや醜さを克服しようとする主人公の心情を考えることを通して、他者とのつながりを持ちながら、人間として強く生きていこうとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

高校生の時期は、進路選択を控えて、自らの生き方や人生の方向性について、深く考えるようになる。

人間として生き方に迷うことは多くあるが、逃げ出したくなるような困難な状況に出くわしても、人間にはそれを克服する強さがあるということを感じ取らせたい。また、時としてその強さを支えるのは人と人とのつながりであるということも実感させたい。さらに、答えの出しにくいモラルジレンマ的な問いかけをすることで、生徒たちの持っている価値観に揺さぶりをかけ、自分の生き方に対して、考えを深めさせるきっかけとしたい。

(2)　資料の概要

この資料は、ある老人介護施設で働く主人公が、東日本大震災で被災し、施設の利用者を連れて避難生活を続ける中で、様々に思い悩んだその心の軌跡を記録したものである。主人公は過酷な状況の中、勤労奉仕と家族愛との間で心が揺れ動く。しかし、自らの心と向き合い、また他者と関わる中で、改めて自分にとっての本当の幸せを見いだしていく。

(3)　資料を通して伝えたいこと

生きていく過程の中で、時折、人は厳しい選択を迫られる。そして、その厳しい現実から逃避したくなる心を持つのも、また一つの現実である。しかし、悩み苦しみながらも、自分と向き合うことで、新たな価値の構築につなげていくことも、人生においては大切なことであると言える。そして、その困難な状況下において、「人の力」こそが、折れそうになる心を支えてくれるものになることに気付くことも重要である。この資料を通して、私たちは自らと対峙し、そして他者との関わりを通して、自分にとっての本当の幸せの存在に気づいていくことができるのだということに思いを至らせたい。また、使命感を持って仕事に取り組む主人公の姿を通して、働くということの意味や重み、苦労、そしてそこから得られる喜びや達成感などを擬似的に体験させることで、職業観、勤労観を育む一助としたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・資料を読んで感想を持つ。

○困難な状況下において、主人公が最後まで頑張ることができたのはなぜだろうか。

○辛い思いをしても、なぜ主人公は同じ仕事を続けているのか。

◎主人公が流した涙には、どのような感情がこもっていたと考えられるか。

○主人公にとっての「本当の幸せ」とは何か。

○あなたが主人公の立場だったら、どのような行動を取るか。また、なぜそのように行動するか。

・「勤労奉仕と家族愛、どちらを優先すべきか」というテーマでディスカッションをする。

四　指導上の留意点及び配慮事項

○価値の押しつけにならぬように留意する。

○オープンエンドな問いかけをすることで、それぞれの結論よりも、そのような結論に至った過程や理由を重要視する。

○ディスカッションにおいては、一つの結論に導くことを目的とせず、安易な結論に落ち着きそうになった時には、それまでの議論の不備を指摘するなどして、さらに議論を深めるよう努める。

十代のしめくくり

3――(3)　生きる喜び（高校生）

一　ねらい

進路に悩む主人公の心情について考えることを通して、自らの高校生活を振り返らせ、困難な状況にあっても、人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きる喜びを見出そうとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

小学校から中学校を経て高校生の時期は、自己の生き方を考えたり、自己の特質を見つめたりする一方で、現実的な進路決定を迫られる時期でもある。

本資料では、震災を経験した主人公が転校を余儀なくさせられ、新たな環境で自己喪失しかけながらも、自分の進路を見出す姿に焦点をあて、「生きる喜び」について考えさせたい。

(2)　資料の概要

主人公は、大震災のあと、自分のふるさとを離れ、新たな学校で、何事にも意欲を失いかけていた。過去のつながりが、震災のために無くなる事で、リセットされてしまった。それでも他者の働きかけにより、いろいろな発見をし、学びの中でも友人や教師とよりよい関係を見出し、自己の進路についても具体的に考えられるようになる。友人や教師、更には周囲の人たちの支えに気が付き、これからの自己が進むべき未来を考えさせる資料である。

(3)　資料を通して伝えたいこと

生徒は学校内の人間関係において様々な『不安』をかかえて生活している。その人間関係に関する不安は、震災後に限らず震災前にも現状として起こり得ることである。この資料では、突然転校を余儀なくされた主人公に着目し、どのように、生きる喜びを感じるようになったかを考えさせたい。また、中学校を経て高等学校に至るまで、更には社会人となってからもすべての時期に関連する自己実現について考えさせ、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活をおくる「他の人との関わり」の重要さを考えさせたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・震災後の自分の生活は、震災前と比べて、どのように変化したか話し合う。

○今までの学校生活で影響を受けた言葉にどんなものがあるだろう。

○「私」の将来の具体的な進路を決めるに際して、影響を受けたことは何だろう。

◎やる気をなくしていた「私」が、がんばろうと考えるようになったのはどうしてだろう。

○「私」が考える後悔しない生き方とは、どんな生き方だろう。

・学校生活を振り返り、困難な状況にあったときに自分はそれをどのように乗り越えてこられたかを話し合う。

四　指導上の留意点及び配慮事項

○震災で転校した生徒も多いため、震災後の生活については、個々の生徒の実態に応じて十分な配慮をする。

がんばっぺな

4―(6)　家族愛（高校生）

一　ねらい

進路について悩む主人公の心情について考えることを通して、困難な状況にある時、互いに励まし合い、家族の信頼関係と深い絆を大切にしようとする態度を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

高校生の時期は、自分の進路や生き方について常に葛藤している。その中で、家族との関わり方も変化していくものである。

本資料では、震災後に祖父母と同居するようになってから、より互いを知るようになり、主人公と祖父母に信頼関係が芽生える。しかし、自分の学校生活が思うように行かないと、祖父に対して素直になれず、反発する時期もある。だが、祖父の病気をきっかけに、自分を気にかけてくれる家族の存在に気付き、目標をあきらめずに、進路実現に向けて努力し続ける。そのような主人公の心の変容に共感し、家族が互いに思い合うことの大切さや感謝の気持ちを考えさせる。

また、祖父母たちからは、避難中であっても自宅（祖父母宅）の管理を続ける姿から故郷を愛する思いや、野菜作りを始めたり、困難に負けずに前向きに生きていこうとする姿勢をも感じ取ることができる。

(2)　資料の概要

震災後、主人公（一五歳男子）家族が避難してきた祖父母と同居することになった。主人公が高校進学から大学受験するまでの三年間を震災後の祖父母との同居生活と合わせて振り返る。特に、祖父との関わり合いから信頼関係が生まれるが、関わり合いを煩わしく思ったことを反省し、祖父と「がんばっぺな」と握手を交わしたことを思い出す。

(3)　資料を通して伝えたいこと

ガソリン購入の出来事からは、主人公の祖父の人柄だけでなく、震災直後は、家族はもちろん、人々が互いに助け合って生活していたことを伝えたい。そして、夏休み中の祖父宅の手入れを機会に、主人公が避難している祖父母の心中を知り、祖父母との絆が深められたことを気付かせたい。また、「がんばっぺな」には、あきらめずに、一緒に頑張ろうと励ます思いと同時に、自分を前向きにさせる思いがあることを感じて欲しい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・生活の中で、家族がいて良かったなと実感する場面を話し合う。

○ガソリンを購入する出来事を通して、主人公の祖父はどのような人柄だと思われるか。

○主人公が、「普通の梅干し入りのおにぎりが、最高においしく感じた」のはなぜだと思うか。

○主人公が「大学生になった姿を祖父に見せたいと強く思った」のはなぜだと思うか。

◎主人公が試験に向かう際に思った『がんばっぺな』には、どのような思いが込められていると思うか。

・家族に対して、反省することや感謝することなどを作文にする。

四　指導上の留意点及び配慮事項

○震災や病気で辛い思いや、身近な人を亡くした経験のある生徒がいる場合には、事前及び事後に個別の配慮が必要である。

第Ⅲ章

実践事例集

地域や児童の思いを資料に込めて

～資料「あんぽ柿の復活」の作成を通して～

（小学生）

一　実施のねらい

震災後生産を自粛していた伊達市の名産あんぽ柿作りの再開のニュース、そして、児童が東京で行われた「ふくしま大交流フェア」に行ってあんぽ柿を全国の人にアピールしたという新聞記事を読んだ。地域の復興や伝統を守るために児童自らが行動を起こしたということに感銘を受けた。そこで、児童の活動の様子や児童を突き動かした思いを読み物資料として教材化したいと考えた。そのためには、学校や地域の人に取材し、あんぽ柿に関する生の声を聞くことが必要である。また、児童の心を揺さぶる資料にするためには、実際に授業で活用し、その反省をもとに修正を加えて資料の質を高めていきたいと考えた。地域の素材をもとに作成したその土地ならではの読み物資料のもつ魅力を生かし、主人公の行動やその思いについて考えさせることを通して郷土への誇りと愛情を育みたいと考えた。

二　児童の実態

震災から復興に向けて歩み出している福島県にとって放射線の問題は深刻である。現在でも、避難生活を強いられたり風評被害に苦しんだりしている人々がいる。産まれ育ったふるさとを離れて避難生活を送っている人々もいる。そのような状況の今だからこそ郷土の大切さを実感している児童は多い。しかし、郷土に対する思いをもっていても郷土のために自分たちが何かをしようと考えてる児童は少ない。そのような中で、伊達市には地域の伝統を守っていこうという思いを行動に移した児童がいた。これは福島県民の将来にとって心強いことである。そのような児童の活動に込められた思いを教材化し、広く福島の子どもたちに伝え、ふるさとに誇りをもち、そのよさを大切に守っていこうとする力を育てたいと考えた。

三　読み物資料作成の手順と資料改善のための実践

㈠　資料作成の手順

① 新聞記事、インターネットなどから情報を収集する。

② どの内容項目が適しているかを検討する。

③ 学校や地域の方々に取材する。

取材内容

〈学校〉「ふくしま大交流フェア」に参加するまでの経緯
あんぽ柿に対する児童の思い
地域に対する児童の願い、活動を支えている思い
「ふくしま大交流フェア」参加の様子

〈地域〉あんぽ柿の出荷停止時の状況や農家の願い
児童との交流の様子
除染の苦労、あんぽ柿作り再開の様子と喜び
あんぽ柿作り継続の願い

④ 取材内容を整理し、資料の骨格を決める。
○郷土愛の視点から資料や取材内容を取捨選択する。
○話者の視点を決定する。
○中心場面を決める。
○中心場面の前後で必要な内容、登場人物の心情等を書き出す。

⑤ 対象学年に応じた文章量を検討する。
○全文を読んで軽重をつけ文章量の適切化を図る。

⑥　全体を通して資料として適当であるかを検討する。
○授業を想定し、発問や予想される反応から内容を検討する。
○小学校学習指導要領解説・道徳編の「第5章第4節3　魅力的な教材の開発や活用」に照らして全体を読み、道徳の資料として適しているか判断し、修正する。
○資料の理解を助けるために必要な写真や場面絵などを検討する。

(二)　資料改善のための実践

①　授業を五十沢地区に公開し、地域の方の意見、児童の反応、参観教師の意見から資料を修正する。
②　改善した資料で公開授業を実践し、児童の反応、参観教師の意見から資料を修正する。

四　完成した資料

（百十六ページ参照）

五　資料の活用例

（百十八ページ参照）

六　実践記録

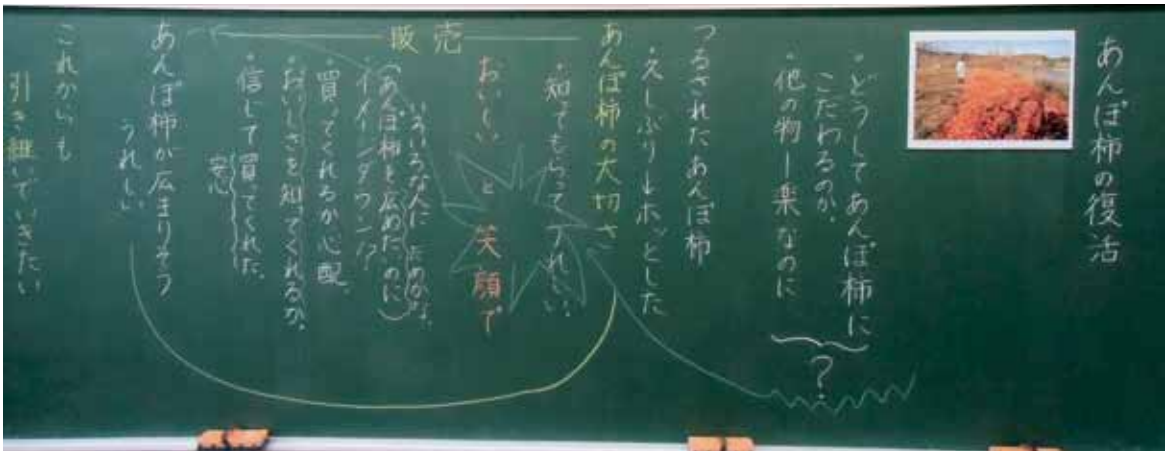
(一)　一回目の授業実践（伊達市立五十沢小学校　第六学年）

○保護者や地域の方、五十沢小学校の先生方に授業と事後研究会に参加してもらう。
○授業での児童の反応
・児童は自分の体験を想起しながら主人公に共感し、あんぽ柿作りに対する思いを話すことができた。
・「あんぽ柿を広めたいのに、心配」「線量を検査していて安全であることを分かってほしい」「あんぽ柿が完売してよかった。」「あんぽ柿をたくさんの人に広めたい。」「これからも広めていきたい。」などの意見が出た。
・放射線を心配する意見が複数あった。切り返しの発問により、「あんぽ柿のよさ」や「どうして売りたいか」ということについて考えさせ、地域の伝統あるあんぽ柿作りを大切にしたいという思いに気付いていった。

○事後研究会での検討
・あんぽ柿作りについて農家の思いが伝わる内容になっていると地域の方から意見をもらった。
・あんぽ柿作りの細かな表現部分の記述について助言を受け、修正点が見付かる。
・切り返しの発問をしなくても価値に迫ることができる内容にする。そのために中心場面をもっと強調する。
・放射線に気持ちが向き過ぎないように、老人が「おいしさやなつかしさ」を感じるといった表現にする。
・児童の授業後の感想から一人一人が高い価値に気付き、あんぽ柿を大事にしたいという思いが伝わってきたので、次の授業実践で児童の感想を活用することにした。
・地域への授業公開と事後研究会により、地域の方がより学校へ協力的になり、郷土愛を大切にして児童を育てていきたいと強く願うよ

うになった。

(二) 二回目の授業実践（伊達市立保原小学校　第六学年）



○資料の改善によって児童がどのように考え価値に気付いて行ったかを検討するため、特に次の三点について実践した。

① 発問を最小限に絞る。（切り返しの発問をしない）

② 資料の範読直後に感想やみんなで話し合いたいことを質問することにより、資料から児童が受ける印象を確認する。

③ 自己を振り返って考えることができるよう、導入で「地域の有名な物」を尋ねる。「あんぽ柿」を自分の地域のよさに置き換えて考えられるようにする。

○授業の実際と児童の反応

・感想では、「おばあさんがあんぽ柿をなつかしく思ってくれて佳奈はうれしかったと思う。」「あんぽ柿のよさが伝わってよかった。」などが挙がった。

・みんなで話し合いたいところは、「売るのがいやになった佳奈がどうして大きな声で売ろうと思ったか。」「おばあさんの背中を見送った時どんな気持ちだったか。」が出たので児童は佳奈が価値に気付く場面に焦点を当てて話し合いたいと考えていることが分かった。

・自己の振り返りでは、地域の特産物のよさについて話し合ったり、祭りに参加して考えたこと、新たに考えたこと、地域のためにやってみたいことなどを友達と交流した。

・終末で五十沢小学校児童の感想を読み上げたところ、児童が真剣に聴く表情がうかがえた。

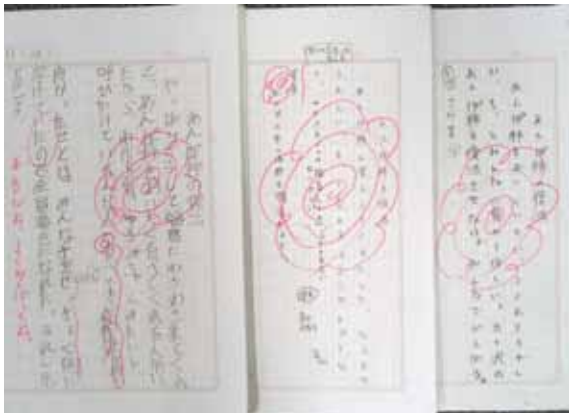
○中心発問では、老人の様子や会話文の修正により、「伝統あるあんぽ柿のよさを分かってほしい」とか、「風潮被害に負けずに、あんぽ柿を広めたい」という思いを中心に話し合いが進み、多様な価値観が出された。

○中心以外の場面を削り中心場面の様子を丁寧に表現したことで主人公の葛藤する気持ちに児童が共感し、じっくり話し合い、切り返しの発問をせずに高められた価値に気付くことができた。

七　考　察

○事実をもとにした資料は訴える力が強い。さらに、その事実を資料にするために実際に体験した地域の方と児童の様子や思いをその学校の教師から聴き取ることで、その時の思いや願いをもとにリアルな資料を作成することができる。

○授業実践を行い、児童の素直な反応をから資料の修正を行うと児童にとって分かりやすい資料になり、ねらいとする価値について考え、時間



中心発問での児童のノート、保原小

五十沢小児童の授業後の感想、終末で活用

をかけて話し合うことができることが分かった。

○実際にあった出来事、地域素材の資料だから、児童は、資料内容を身近なものと感じ、これまでの生活から価値について具体的に考え、自分の価値観と比較しながら主人公の気持ちを考えることができた。

○児童が地域資料と向き合うことで、児童の心に響く学習活動となった。したがって、価値の意識の継続化や実践意欲の高まりが期待できる。

○地域の方や保護者、学校の先生方に協力してもらうことにより、家庭や地域で地域を愛する子どもを育てようという思いがさらに強くなったように思う。

○地域の方や教師の様々な思いを受け止めると、取捨選択することが難しくなった。価値や資料の最も大事にしたいところ、ねらいを考えて冷静に判断する必要がある。（捨てる勇気）

○地域の方が写真を提供してくれた。衝撃的で訴える力があった。これが活用できたのも地域との連携があったからだ。

○地域の方や教師に授業を参観してもらい意見をもらうことで、資料の修正点が見えた。また、児童の反応から改善点が明らかになり、修正することで児童の生活や心に近い資料へと改善することができたと考える。

○二回目の授業実践から、「あんぽ柿」を自分の地域特有のものや伝統行事等に置き換えて考えさせれば、各地域でも伝統あるものについて自分がどうであったか、児童に自己を振り返らせることができることが分かった。（導入で地域の有名なものについて話し合っておくとよりスムーズに自己を振り返らせることができる。）

あんぽ柿の復活

わたしの住む五十沢地区は、あんぽ柿の名産地。冬の間中、両親はあんぽ小屋にこもり、夜遅くまで作業しているので、いつも弟と二人きり。でも、あの震災以降放射線の関係であんぽ柿は生産していない。柿がたくさん実っても全部捨てているのだ。夜、両親は抜けがらのようだけど、わたしはうれしい。家族そろってのんびりできるからだ。お父さん達は、いてつく寒さの中で毎日除染作業を繰り返している。そんな大変な思いをしてまで、どうしてあんぽ柿にこだわるのだろう。いつ出荷できるか分からないのだから、あんぽ柿の替わりに他の冬野菜を作ればいいのにと思う。

震災から三年目の今年、わたしが六年生になると、あんぽ柿が出荷できるようになった。すると両親はまた、あんぽ小屋で作業に精を出した。さみしいけれど、元気になっていく二人を見るのはうれしかった。

学校でも中断されていた「あんぽ祭り」が再開された。オレンジ色のあんぽ柿を食べると、とろっとして甘い。こんなにおいしかったっけ。忘れかけていた五十沢の味だった。優しい甘さがじわっと心にしみ込んだ。

それから間もなくして、わたしたちが、東京国際フォーラムの「ふくしま大交流フェア」に「あんぽ柿ＰＲキャラバン隊」として出場することになった。どうしたらたくさんの人にあんぽ柿のよさを分かってもらえるか、みんなで考え、キャラクターを決め、シールとかぶりものにした。ちらしやのぼりもたくさん作った。それから、全校生で発表の練習をする。休み時間も遊んでなんかいられないけど、何だかうれしい。お父さん達ってこんな気分なのかなと思った。

フォーラムには、地区の人達がたくさん応援に来てくれた。わたしたちは、練習通り発表し、拍手のシャワーをあびた。大成功だと思ったのに、販売の時間になると、わたしたちのブースに近づいて来る人は少ない。拍手をしてくれた人達はどこへ行ってしまったのだろうか。食べ物だから、みんな線量を気にしているのだ。すべてが検査に合格しているのに、とくやしさがふつふつとわいてきた。同級生の雪美ちゃんたちは、一生けん命呼びかけているけれど、わたしはそんな気になれない。みんなで準備した場面がいくつも浮かんできた。そして、そっと後ろへ下がり、声も出さずにみんなの様子をぼんやりながめていた。しばらくすると、つえをついたおばあさんがゆっくり近づいて来た。

「あら、あんぽ柿じゃないの。」

雪美ちゃんがあわてて、

「五十沢のあんぽ柿です。試食してみてください。」

「そう、ありがとう。」

おばあさんはゆっくりとあんぽ柿を口にした。言葉を待っているのに何も言わない。ただ、もぐもぐしているだけ。少し上を向いたかと思うと目をつぶった。涙が一筋おばあさんのほほを伝った。わたしはごくんとつばを飲んだ。それからようやく、

「ああ、なつかしい。」

遠い目をしておばあさんが言った。雪美ちゃんがぽかんとしていると、

「あら、ごめんなさい。わたし、生まれが福島なの。昔はよく食べたから、つい、なつかしくってね。」

「そうですか。わたしたちは、伊達市梁川町の五十沢に住んでいます。」
「ああ、そういえば、あの辺のあんぽ柿は昔から有名だったわね。」
「そうなんです。九十年も続いているんですよ。」
「一箱いただくわ。おじいさんにも食べさせてあげたいから。」
「ありがとうございます。」
「おいしかったわ、ふるさとを思い出させてくれて、ありがとう。」
その言葉で体の中のくやしさがみるみる溶けていった。あんぽ柿をなつかしく思ってくれる人がいる。そう思うと、温かいもので体中がいっぱいになった。あんぽ柿を受け取った

おばあさんは、向きを変えて、またつえをつきながらゆっくり歩き始めた。わたしは、見えなくなるまでずっと、その背中を見送った。そして、考えた。それから、ゆっくり深呼吸をし、前へ進んで、雪美ちゃんの肩をポンポンとたたいた。
「雪美ちゃん、よかったね。」
「あっ、佳奈ちゃん。あんぽ柿作り、これからもずっと続くよね。」
「うん、もちろんでしょ。五十沢のみんなでがんばるもの。」
そう言って、わたしは、体にぎゅっと力を入れた。そして、大きな声で呼びかけた。
「五十沢のあんぽ柿、いかがですか。おいしいですよ。」

あんぽ柿の復活

4―(7)　郷土愛（小学五・六年）

一　ねらい

主人公のあんぽ柿に対す心情の変化について考えることを通して、郷土のよさを知り、そのよさを守り広めていこうとする心情を育てる。

二　資料の特質

(1)　資料の生かし方

郷土の中で育った児童は、それが当たり前のように生活していたので、郷土のよさや伝統について意識して生活している児童は少ない。しかし、東日本大震災を経験し、郷土の伝統が途切れそうになったことから、郷土のよさや伝統について考える機会となった。

本資料は、主人公、佳奈が、あんぽ柿を味わうことでそのおいしさに気付き、ＰＲ活動をする。あんぽ柿を食べてふるさとをなつかしむおばあさんに出会って、あんぽ柿のよさを再確認し、たくさんの人に知ってもらおうと自ら声を出す。郷土を愛する心が育って行く佳奈の心情の変化に共感させたい。

(2)　資料の概要

放射線の影響で両親があんぽ柿を作らなくなったため、家族がそろう時間が増えたことを喜んでいた佳奈だが、両親はそうでない。苦労をしてもあんぽ柿作りにこだわる両親の考えがわからずにいる佳奈だった。三年ぶりにあんぽ柿を作る両親は元気になった。学校でも「あんぽ祭り」を実施し、あんぽ柿を食べた佳奈は、そのおいしさを知る。「あんぽ柿ＰＲキャラバン隊」となって活動するが、思うようにいかない様子に、ＰＲの意欲を失う。しかし、知らないおばあさんのあんぽ柿を懐かしむ様子から、あんぽ柿のよさを実感する。そして、郷土の伝統を守ることの大切さに気付き、たくさんの人に広めようとするという内容である。

(3)　資料を通して伝えたいこと

伝統を守り続けてきた人々の思いや願いに触れ、その中で育ったから今の自分がいることに気付き、そこに住む一員として、自分も郷土を愛し、伝統を守っていくことが、大切であることを伝えたい。

三　展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

・地域では、どんなものが有名か話し合う。
○佳奈は、あんぽ柿についてどんな気持ちをもっていたか。
○久しぶりにあんぽ柿を食べた佳奈はどんな気持ちになったか。
◎おばあさんを見えなくなるまで見送る佳奈は何を考えていたか。
○佳奈は、どうして大きな声で行き交う人に呼びかけたか。
・「福島っていいな」と思ったことについて話し合う。

四　「私たちの道徳」（小学五・六年）との関連

「郷土や国を愛する心を」（百六十四～百七十三）を活用して、自由に記録したり話し合ったりして、郷土のよさや伝統を守ることの大切さについて、さらに、考えさせる。

五　指導上の留意点及び配慮事項

○授業の導入において、地域の有名なものを挙げることにより、価値の方向付けを図る。
○「福島っていいな」の「福島」を各学校の地名に置き換えて話し合うと、身近で、より郷土に親しみが沸くと考える。
○佳奈のあんぽ柿に対する心情の変化をとらえ、共感することにより、本時のねらいに迫ることができるようにする。

異校種間との連携

～小・中学校交流活動 読み聞かせによる「おはなし会」を通して育む道徳教育～

（小・中学生）

一　実施のねらい

道徳教育の連続性、一貫性を考える観点から異校種間との連携の充実を図ることは、大変意義あることである。

本校でも、幼稚園や保育園での職場体験活動を行ったり、卒業生と語る会を行ったりする等、異校種間との連携を通して生徒の道徳性を育む活動を実践してきた。また、家庭科における保育参観や茶道教室、特別支援学級の子どもたちとの交流学習、心肺蘇生法講習会・薬物乱用教室・医師を招いて行う性教育等は、学校の教育活動全体を通して育む道徳教育の機会と捉えて行っている。しかし、こうした中で学校生活に適応していく一年生の姿には、それぞれの体験学習や活動に道徳的意義を見いだせる生徒と、体験や活動そのものを満足して終わる生徒が見受けられる。

そこで、小中一体・連携教育を行う本校の教育活動を生かして、小・中学校交流活動「おはなし会」の実践から個々の生活体験に道徳的意義に気づかせたり見いだせたりすることができる意図的な活動を行い、児童生徒の道徳性を育む一助としたいと考えた。

二　児童・生徒の実態

郡山市立明健中学校は、全校生徒約四百五十名の学校である。年間を通して、校区内の三つの小学校と本校が交流を行う小中一体・連携教育を行って八年目になる。

小中一体・連携教育の最大の効果は、三つの小学校の六年生が交流活動を通して一つの学年となって入学してくるため、新しい環境での所属感や人間関係が築きやすいところにある。また、中学校生活への不安の軽減と顔見知り程度のゆるやかなつながりが、他県や他市町村から入学してくる少数の生徒を排除することなく、新しい生活への適応を早めている。

中学校生活が本格的に始動し始める二学期以降は、個々の抱える問題が顕在化し始めるというケースが見られる。小中一体・連携教育では、生徒指導上の諸問題について情報を共有するだけでなく、中学校三年間までを見通した九年間の学びの中で、児童生徒の発達段階における道徳性を育むための手だてが急務であると感じている。

三　実践までの経緯

(1)　読み聞かせによる「おはなし会」の設置

図書委員会からの起案（別紙1）で、委員会活動の一つに「読み聞かせによる『おはなし会』」を位置づける。開催は、二週間に一度、お昼休みに来室した小中学生を対象に行う。小学一年生から中学三年生までという幅広い年代になるため、毎回、対象学年とテーマを決めて行うこととした。話し合いでは、低・中・高学年・中学生のローテーションとするが、対象学年以外の児童生徒の参加は自由とする。

(2)　読み聞かせのための本の選定

「おはなし会」で使用する本の選定は、国語科、委員会顧問、司書補と図書委員会が行う。ただし、活動が軌道に乗るまでは、国語科、委員会顧問、司書補が行い、読み聞かせに適した本の選定の仕方や朗読のお手本を示すことにする。

(3)　「おはなし会」の進め方

お昼休みの時間は、給食の後片づけや午後の授業の準備等、児童生徒

にとっても忙しい時間帯である。図書委員会の生徒や参加する児童生徒の負担にならないよう、開始時刻を厳守して10分間の活動とし、読み聞かせ行動案（別紙2）に基づき進めることにした。

「おはなし会」の告知板

第１回「おはなし会」
日本のお話と外国のお話
テーマは「家族愛」

(4) 「おはなし会」のねらい

おはなし会は、読み聞かせをするだけでなく、参加者に発言を求めながら双方向で進める会である。読み手が聞き手にインタビューしたり、全体に問題を投げかけたりしながら、二つのお話に共通するテーマ（主題）を全員で共有するという構成になっている。

① 第一回「日本のお話」と「外国のお話」を聞いて感想を持ち、二つのお話に共通する「家族愛」に気づかせたい。

② 第二回「今のお話」と「昔のお話」を聞いて感想を持ち、二つのお話に共通する「動物愛」に気づかせたい。

③ 第三回「小学生のお話」と「中学生のお話」を聞いて感想を持ち、二つのお話に共通する「音楽の力」に気づかせたい。

④ 第四回「人間の物語」と「動物の物語」を聞いて、二つのお話に共通する「いのち（生命）の尊さ」に気づかせたい。

⑤ 第五回「学校のお話」と「社会のお話」を聞いて、二つのお話に共通する「きまり」に気づかせたい。

(5) 「おはなし会」報告

① 第一回報告　平成二十六年十月十日㈮　低学年

◆「おむかえ」４――(3)家族愛
『ふくしま道徳教育資料集』Ⅱ（福島県教育委員会）より

◆「ブラッドレーの請求書」４――(3)家族愛
『わたしたちの道徳』３・４年（文部科学省）より

読後の小学生の反応は大きく、多くの児童の挙手があった。そのため、全員が参加できるように「主人公と同じ経験はあるか。主人公と同じ気持ちになったことはあるか。」等を追加しながら進めた。中学生に用意した「二つのお話に共通するテーマ」については挙手がなかったため小学生を指名したが、お話の感想に戻ってしまった。終了後に、中学生が「親子」や「家族」とつぶやいていたのが印象的だった。

・おむかえのおはなしで、女の子がおむかえにだれかこないかなぁとおもったけど、おねえちゃんがおむかえにきてくれてわたしもほっとしました。よんでくれてありがとうございました。（小学一年生）

・わたしは本でみました。るすばん1ドル、おふろそうじ1ドルだったけど、おかあさんがゆったことは、ぜんぶ0ドルなのでよかったです。わたしもおそうじをしたぶん0円にします。（小学二年生）

② 第二回報告　平成二十六年十月二十三日㈭　中学年

◆「おんぶしてくれ」４――(3)家族愛
『みんなでかんがえるどうとく』２年（日本標準）より

◆「森のしきしゃ」１――(4)明朗・誠実、反省
『みんなで考えるどうとく』３年（日本標準）より

交流が継続するように「おはなし会」終了時には、感想カードを配付して、後日「読書ボックス」に投函してもらうことにした。感想カードを投函した児童には、図書委員会が製作したしおりを届けて、聞く楽し

みや書く喜びが持続するように取り組んだ。

・おんぶしてくれで、さいごになかよしになれてよかったです。（小学一年生）

・もりのしきしゃのおはなしで、さいしょはどうぶつたちとなかよくなかったカラスがなかよくなれてよかったとおもいました。またおはなしをきかせてください。（小学一年生）

廊下に設置した「読書感想ボックス」

第２回「おはなし会」
今のお話と昔のお話
テーマは「動物愛」

③　第三回報告　平成二十六年十一月十三日㈭　高学年

◆「みんなの『ソーラン節』」（２――(3)信頼・友情、男女の協力）

『あすをみつめて』６年（日本文教出版）より

◆「きれいな音をとどけたい」（東日本大震災に係る生徒作文）

『未来を拓く心のブック』（郡山市教育委員会）より

今回から生徒が司会を務め、小学生に感想をインタビューしたり、中学生に発言を求めたりする役割を追加した。これにより、児童生徒の相互交流をめざす「おはなし会」の運営になった。

・きれいなおとをとどけたいは、ほんとうにきれいになったんだなってこころにつたわったきがしました。こんどもたのしいおはなしをまっています。（小学一年生）

・みなさんの言い方がききとりやすくてとてもおもしろかったです。大きな声でいえていてとてもすごかったです。さすが中学生ですね。とてもすごいと思いました。（小学二年生）

小学生にインタビューする司会の中学生

第３回「おはなし会」
小学生のお話と中学生のお話
テーマは「音楽」

④　第四回報告　平成二十六年十一月二十八日㈮　中学年

◆「ハムスターの赤ちゃん」３――(1)生命尊重

『わたしたちの道徳』１・２年（文部科学省）より

◆「一枚の写真から」（３――(1)生命尊重）

『ゆたかな心新しい道徳』５年（光文書院）より

積極的に発表したり発言したりする小学生の姿は、中学生にとって大きな刺激となった。また、名前を覚えて進んで交流しようとする小学生の姿や、低学年でも発表したり聞き合ったりする態度が身に付いていることに驚いていた。感想カードも交流活動の感想に加えて、お話の内容に関するものが増えてきた。

・ハムスターの赤ちゃんを聞いて、ハムスターをかいたくなりました。テーマの「いのち」に共通する本でした。とてもおもしろかったで

す。（小学二年生）

・一まいのしゃしんのおかあさんが木にぶつかったところがいたそうだなとおもいました。でも、あかちゃんがいきててよかったです。こんどのおはなしかいまってます。（小学一年生）

読み聞かせする中学生

第４回「おはなし会」
動物の赤ちゃんと人間の赤ちゃん
テーマは「いのち」

⑤　第五回報告　平成二十六年十二月十二日㈮　低学年

◆「かぎのかかった一りん車ごや」１――(4)明朗・誠実

『みんなでかんがえるどうとく』２年（日本標準）より

◆「きいろいベンチ」４――(1)規則尊重、公徳心

『わたしたちの道徳』１・２年（文部科学省）より

五回の交流活動を通して、低学年の参加が多かったこと、原稿を練習する時間がなく臨場感に欠けた等の課題が挙げられた。そこで、高学年に読み聞かせを行うための教材を開発することにした。

・かぎのかかった一りん車とかにきまりがあるのにまもっていなかったからダメだとおもいましたけど、さいごにちゃんとまもれてすごいなぁとおもった。（小学一年生）

・わたしは、きいろいベンチをよんでもらいました。ベンチに男の子がくつでベンチにのって、あとから女の子がすわってスカートがよごれてかわいそうでした。（小学二年生）

第５回「おはなし会」
学校のお話と社会のお話
テーマは「きまり」

「おはなし会」終了後
図書委員会ミーティング

四　読み聞かせのための教材作成

作成する物語は、同時期を過ごす発達段階の違う二人を双方向の視点から描く。主人公は、小学六年生の妹と中学三年生の姉とし、内容項目は、小学校第五学年及び第六学年にある１――(5)「真理・創意進取」から中学校１――(4)「真理愛・理想の実現」につながることを目的とした。

(1)　小学生の物語「忘れられない歌（妹編）」（別紙３）

小学六年生の和（妹）は、特設合唱部に所属して転校先でも生き生きと学校生活を送っていた。コンクールが近づいたある日、課題曲をどんなふうに歌ったらよいか悩んでいたところ、姉の歌声を思い出して、工夫して歌う喜びを実感する。

(2)　中学生の物語「続・忘れられない歌（姉編）」（別紙４）

中学三年生の佳奈（姉）は、転校を機に大好きな合唱をやめて美術部に入る。避難先から続けていた安波祭「田植え踊り」でも、謡うことを

ためらっていた佳奈だったが、しげさんの思いやしのじいの言葉、そして和が歌う合唱曲に励まされて、自分の心に気づいていく。

五　指導上の留意点

東日本大震災の資料であるため、事前に個別の配慮が必要かどうかの確認を行った。なお、補助資料として、震災前の安波祭田植え踊りの映像とともに、仮設住宅で復活した祭りの写真を使用した。

六　読み聞かせを活用した道徳授業（小学六年生）

平成二十七年一月二十一日㈬六校時（別紙５）

資料の範読に耳を傾ける６年生

感想カードに記入する６年生

中学校教師二名（Ｔ１・Ｔ２）が、小学六年生に二つの物語の読み聞かせを行い、読後に小学校教師二名（Ｔ３・Ｔ４）が、児童に発問した。妹編では、現在の自分の姿、姉編では、やがて中学生になる自分たちの姿が投影できるように発問構成した。「二つの資料に共通するテーマ」については、「音楽・ひと・ふるさと・思い」といったつぶやきが聞かれ、妹の合唱に対する思いが創意工夫を生み、姉のふるさとへの思いが自分の理想とする生き方につながることを共有した。

- 和ちゃんは、何とも言えない気持ちを友達と一緒に考えて答えを見つけられることができてすごくよかったなと思います。最後に姉の気持ちもちゃんと分かってあげられていい事だと思いました。
- 昔の楽しかったことを思い出すから歌えなかった佳奈さんが、和ちゃんの歌声をきいて、歌ってもいい、本気で歌ってみようと思えたのが、和ちゃんの「いっしょに歌いたい」という願いをかなえることにつながるといいなと思いました。田植え歌の謡いを本気でできるといいなと思います。
- 東日本大震災により失ったものや新たに得たものもあり、この物語を読んだことで私に新しい考えが生まれたと思いました。ふるさとを歌い感じたことは、いろいろな考えをうむのだと思ったことです。

補助資料を使っての説明

七　資　料

（別紙１）「おはなし会」交流活動計画
（別紙２）「おはなし会」行動案
（別紙３）忘れられない歌（妹編）
（別紙４）続・忘れられない歌（姉編）
（別紙５）読み聞かせを活用した道徳授業指導案
（別紙６）感想カード

（別紙１）

平成２６年度

読み聞かせによる「おはなし会」交流活動計画

図書委員会

１　ね ら い

教育目標「友愛　自他を愛し、思いやりをもって進んで他と協力する生徒」の育成のため、今年度の重点目標及び具体的施策から「●道徳の時間の充実、●小学生との交流による思いやりの心の涵養、●生徒会活動の活性化」等（平成２６年度グランドデザインより）の具現化を図る。

２　活動内容

図書委員会が生徒会活動の一つとして、お昼休みに来室した児童生徒を対象に「読み聞かせ」をする。

３　日　　時

（1）第1回　１０月１０日（金）お昼休み　図書室　B案（１２：５０～１３：１０）
（2）第2回　１０月２３日（木）お昼休み　図書室　B案（１２：５０～１３：１０）
（3）第3回　１１月１２日（水）お昼休み　図書室　B案（１２：５０～１３：１０）
（4）第4回　１１月２８日（金）お昼休み　図書室　B案（１２：５０～１３：１０）
（5）第5回　１２月１２日（金）お昼休み　図書室　B案（１２：５０～１３：１０）

４　方　　法

（1）月2回（隔週の予定）開催とし、小・中の学校行事と重ならないよう計画する。
（2）第１回については、＊＊＊＊（司書補）・＊＊＊＊（国語科）による読み聞かせを行い、図書委員に今後の活動のモデルを示す。**（＊現職教育の交流活動を兼ねる。）**
（3）第2回から第5回については、図書委員による読み聞かせを行い、小・中学校の日常交流を行う。
（4）第6回からは、図書委員会で内容を再検討して活動する。

５　内　　容

（1）放送やポスターを使って「読み聞かせ」を告知する。
（2）活動時間は、始まりと終わりを厳守する。
（3）図書室への出入りは自由とする。
（4）「読み聞かせ」の本の選定は、「読み聞かせ」をする人が行うが、第１回から第5回までは、あらかじめ準備したものの中から選択させる。
（5）第6回以降は、図書委員が選定するが、事前に必ず＊＊先生及び＊＊先生に報告する。

６　そ の 他

（1）先生方で、「読み聞かせ」にお薦めの本があれば、情報提供願います。
（2）先生方で、「読み聞かせ」ができる場合は、ご協力願います。

読み聞かせによる「おはなし会」行動案　平成２６年１０月１０日（金）　（別紙２）

担当者名	Ｔ１（司書補）	Ｔ２（国語科）
プロローグ	（ＢＧＭを流して待つ。時間厳守で始める。）	
はじめの言葉 （１分）	３　自己紹介 中学校の「＊＊＊＊＊」です。＊＊せんせいって呼んでください。好きな果物は、バナナです。	１　あいさつ みなさん！こんにちは。「おはなし会」の時間です。 ２　自己紹介 中学校の「＊＊＊＊＊」です。＊＊せんせいって呼んでください。好きな果物は、メロンです。
前半（４分）	４「お迎え」読み聞かせ 今日のお話は２つ、「日本のお話」と「外国のお話」です。それでは始めます。「お迎え」始まり、始まり。	５　インタビュー 「（小学生の）みなさん！感想をお願いします。どんなことでも構いません。感じたこと、考えたことを聞かせてください。」 （２人くらい感想を求める。）
後半（４分）	７　インタビュー 「（小学生の）みなさん！感想をお願いします。どんなことでも構いません。感じたこと、考えたことを聞かせてください。」 （２人くらい感想を求める。）	６「ブラッドレーの請求書」読み聞かせ それでは始めます。「ブラッドレーの請求書」始まり、始まり。 ８　インタビュー 「（中学生のみなさん）みなさんに質問です。二つのお話に共通するテーマは何でしょう。」（２人くらい意見を求める。）
おわりの言葉 （１分）	９　れんらく 「感想カードを書いてくれたお友達（小・中学生）には、お返事上げます。帰りに読書ボックスに入れてくださいね。」	
	１０　あいさつ Ｔ２：＊＊せんせい！第１回目の読み聞かせはいかがでしたか。 Ｔ１：緊張しましたね。 Ｔ２：次回もたくさんのお友達がくるといいですね。 Ｔ１：小・中学生が集まる図書館を作りたいと思います。また来てね。 Ｔ２：ごきげんよう！午後の授業に！ 一緒：行ってらっしゃい！	
エピローグ	（ＢＧＭを流して送る。感想カードを配る。）	

（別紙３）　「忘れられない歌」（妹編）

課題曲が決まって、特設合唱部の練習が本格的に始まったある日、千恵子先生からこんな宿題が出た。

「みんなにとって『忘れられない歌』とは、どんな歌ですか。」

「去年、歌った課題曲ならまだ覚えているよ。」

「それ、『忘れていない歌』じゃない。」

合唱部のみんなが顔を見合わせて笑った。歌詞にある「忘れられない歌」って、どんな歌なんだろう。

「お姉ちゃん。和ね。特設合唱で、これ歌うの。すごく良い歌なんだよ。歌ってあげるね。」

中学三年の姉は、最近、元気がない。高校決めるってそんなに大変なことなんだろうか。

「先生がね。宿題だって。『忘れられない歌』を考えて来なさいって。和ね。請戸小の校歌をみんなでもう一度歌いたいな。」

「和。悪いけど、勉強の邪魔。あっちで歌ってよ。」

やっぱり機嫌が悪い。合唱やめて受験生になった姉は、急に大人になったみたいだ。前は、一緒に歌ってくれたのに。いいよ。一人で歌うから。

「だから、うるさいって言ってるでしょ。」

「お姉ちゃん、ひどい。うるさくないもん。歌ってあげただけだもん。」

お母さんが飛んできて、こっちに来なさいと、台所へ連れて行かれた。

お姉ちゃん。どうして、歌わないのだろう。

いつになく、強い姉の言葉に涙がこぼれた。なぜ、姉はあんなにいらついているのだろう。なぜ、私の気持ちが通じないのだろう。

私の家は、①浪江町から②二本松市に一時避難をしていたが、四年生の夏、③郡山市に引っ越した。転校した学校では、友達もできて毎日が楽しかった。特設合唱部に入ったおかげかも知れない。

週末に、④安波祭⑤田植え踊りの練習会があるときには、仮設住宅のある二本松での練習会にも参加した。しのじいやしげさんに会えるのが楽しみだったし、佳奈お姉ちゃんが本気で、祭りを引き継ぐために、踊っていたからだ。練習会には、家族総出で行く。もちろん、離ればなれになった友達に会えるのも、祭りに参加する理由の一つではあっ

④安波祭

⑤田植え踊り練習会

たけれど。

「Cからもう一度歌ってみましょう。」

コンクールが近づいてきて、特設合唱部の練習は、放課後、毎日続いた。千恵子先生の指揮棒があがる。

「ピアノ、止めて。少し、休憩しましょう。」

心を込めて歌っているのに、今日の練習は、なかなか合格点がもらえなかった。どう歌えばよいのだろう。

九月最後の安波祭田植え踊り練習会の日。しげさんが、風邪をひいて休んだことがあった。なんとかCDで練習が始まったけど、どうも感じがつかめない。

「佳奈お姉ちゃん。謡ってよ。」

何にも知らない、⑥早乙女役の小学生たちが言い出した。うちのお姉ちゃん、機嫌が悪くなっても知らないからね。

姉は、一瞬、困った顔をしたが、踊りの輪の中からはずれると、立ち止まって振り返った。そして、一呼吸すると、静かに歌い出した。その声は、透明で、力強かった。

お姉ちゃんは、本当は歌いたかったのかも知れない。転校して、合唱部やめて、それでも歌が好きなんだ。そうでなければこんなに格好良く歌えないよ。

合唱コンクールが一ヶ月後に迫ったある日のことだった。

「Cのところ。みんなはどんな風に歌いたいですか。」

千恵子先生の質問にどきっとした。今まで、「はぎれよく」とか「元気に」って考えながら歌っていた。でも、そうではない。なにか、もっと、こう、どう言葉にしていいかわからない。きっと、姉の声を思い出したからだと思う。

「やわらかいけど力強く。力強いのにやわらかい。なんて言ったらいいんだろう。」

もどかしい私の説明に、みんなが口々に意見を言い出した。

「そういうの、しなやかって言うんじゃないの。」

「竹のようにね。」

「ええっ。何、それ。」

「竹はしなるから折れないんだよ。」

「折れないなら強いんだね。」

「芯があるのかも。」

「そっか。じゃ、いろいろ試して歌ってみようよ。」

千恵子先生は、どういうわけかニコニコしてみんなの意

⑥ 早乙女

見が出尽くすのを待っていてくださった。そして、この日から「しなやかに強く」が、Cの部分を歌うときの合い言葉になった。

の中でたくましく生きてきた。忘れられない歌とともに。

ふと、あの日からのことがよみがえってきた。私は、心を込めて歌った。歌い終えたとき、仲間と一緒に歌ったこの歌もきっと忘れられない歌になる。そして、転校して歌うことを止めた姉の気持ちが、今なら少しだけわかるような気がした。

和はそう思うと、急に姉に会いたくて、駆け出さずにはいられない自分に気がついた。

ふるさとは、いつまでもやさしい。みんなそのやさしさ

（別紙４）　「続・忘れられない歌」（姉編）

「譜面のないこの歌がね。忘れ去られてしまうのが寂しいんだよ。」

しげさんが言った。

田植え歌は、①浪江町請戸に代々伝わる安波祭田植え踊りで歌われる。小さい頃から慣れ親しんでいる歌だけど、聴くのと歌うのとでは大違いだ。それなのに、しのじいは、私に「歌わないか。」と言う。

「いくら、しのじいの頼みでも、できることとできないことがあるんだからね。」

しのじいは、請戸芸能保存会の会長だ。全町避難した浪江町請戸に伝わる安波祭を、仮設住宅のある②二本松市で復活させてくれた。

私には、わかっていた。やっとの思いでよみがえった祭りだもの、ここで途絶えるなんて、思ってもみないことだった。だけど、今、誰かが謡いを継がなければ、しげさんの代で終わってしまう。私に謡えるだろうか。田植え踊りで、舞いも太鼓もやった。でもね。しのじい、これから進路だって決めなければいけないんだよ。部活を引退して、受験勉強して、中学三年は忙しいのだから。

あの日以来、歌を歌うことは我慢すると決めていた。歌は大好きだけれど、歌っていると、わけもなく申し訳ない気持ちになるからだ。

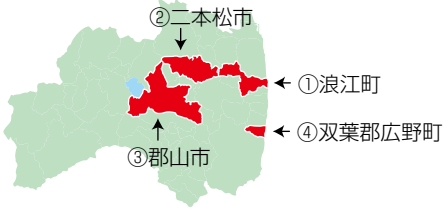
私の家は、浪江町から二本松市に一時避難をしていたが、一年生の夏、本格的に③郡山市に引っ越した。転校した学校は、合唱部から美術部に移ったけれど、それなりに楽しかった。

部活と両立しながら、安波祭田植え踊りがあるときには、二本松市での練習会にも参加した。しのじいが、一生懸命守ってきた祭りだ。仮設住宅のみんなが楽しみにしている祭りを、絶やすことはできない。

高校だって、浪江にいるときは迷うことがなかった。みんなが地元の高校に行く。学校を選ぶなんて、考えたこともなかった。だけど、新しい町では、県立高校と私立高校がたくさんあって、その中から選択する。たくさんあると選べるはずなのに、たくさんあって選べなかった。その上、④双葉郡広野町にも新しい高校ができると聞いた。前の家から通える距離だ。そう考えるとますます志望校を決められなかった。

「お姉ちゃん。和ね。特設合唱で、これ歌うの。すごく良い歌なんだよ。」

小学六年生の妹は、最近、やけに元気だ。妹の歌う調子のはずれた歌がしばらく続いた。



「先生がね。宿題だって。『忘れられない歌』を考えて来なさいって。和ね。請戸小の校歌をみんなでもう一度歌いたいな。」
「和。悪いけど、勉強の邪魔。あっちで歌ってよ。」
「別に、悪いことしてないよ。」
　妹は、さらに大きな声で歌い始めた。

「だから、うるさいって言ってるでしょ。」
「お姉ちゃん、ひどい。うるさくないもん。歌ってあげただけだもん。」
妹が泣き出して、母が飛んできた。叱られるのは、いつも私のほうだ。
「お姉ちゃん。最近、怒ってばかり。」
母のたしなめる声が聞こえる。
「佳奈は、和がうらやましいんじゃないの。」
「どうして。」
「和が気持ちよく歌うからよ。」
「お姉ちゃん。どうして、歌わないのだろう。」

　私にも、忘れられない歌がある。それでも、歌わないって決めたのは、楽しかった頃を思い出すからだ。友達とパートを張り合って歌った音楽室。先輩と遅くまで語り合った放課後。大会前には、みんなで手をつないで輪になって歌った。卒業式には、コンクールで歌った思い出の歌で先輩方を見送った。そして、その日。東日本大震災が起きた。
　私にとっては、歌いたくても歌えない歌なのだ。

　九月最後の安波祭田植え踊り練習会の日。しげさんが、風邪をひいて休んだ。なんとかCDで練習しようと始まったが、どうも感じがつかめない。私の太鼓も遅れるし、踊りがどうしても型にはまった動きになってしまうのだ。
「佳奈お姉ちゃん。謡ってよ。」
　⑤早乙女役の小学生たちが私に向かって勝手なことを言う。
「佳奈。CDだと太鼓が遅れるんだよね。」
　⑥中ぶちの彩ちゃんまでが、私の太鼓を取り上げて言った。
「みんな、佳奈が謡うよ。才蔵役から中ぶちやりたい子は、出ておいで。」
「私、やりたい。太鼓たたきたい。」驚いたことに、3人もの立候補があった。
　おまけに、一人抜けた⑦才蔵役に、早乙女役の和がやりたいと言い出した。
「私、青い法被（はっぴ）着てみたい。」
　ふと、私の足下を横切って、彩ちゃんの妹がみんなに向かって歩き出した。
　しのじいが言った。
「ごらん。佳奈。三歳の子まで踊りの輪に入ろうとしている。三世代の絆が、安波祭を守ってきたんだよ。この舞いは、どんなときも途切れることはなかった。そして、今、ふる

⑤早乙女

⑥中打ち

⑦才蔵

さとから遠く離れた町で、新しい絆が広がっている。だから、どこで謡ったっていいんだよ。」

いつの間にか、踊りの輪は、一回り大きくなっていた。私は、みんなに促されるまま、初めて相馬流れ山を歌った。

しげさん。私、好きなこと、続けていいのかな。もう我慢しなくていいのかな。

「お姉ちゃん。あのね。しげさんがね。安波祭の田植え歌はね。謡うのを止めたらみんなに忘れられてしまう、それが寂しいんだって。『忘れられない歌』は、『忘れたくない歌』なんだよ。だからお姉ちゃん、和のコンクール絶対聞きに来てね。」

合唱コンクールの日、私は、しぶしぶ会場に出かけた。それなのに、一生懸命に歌う妹の姿に、涙があふれて止まらなかった。

しげさん。わかった気がする。すべては心の中にあったんだ。しのじい。どこで謡ったっていいんだよね。和、ごめん。自分のことで精一杯だった。

佳奈は、ステージに向かって思いっきり手を叩いて拍手するもう一人の自分に気がついた。

決めたよ。私。本気で謡ってみようと思う。

ふるさとのために。

いえ、私自身のために。

（別紙５）

小学６年生「おはなし会」読み聞かせを活用した道徳授業指導案

１　主題名　真理・創意進取　１－（５）
２　資料名　「忘れられない歌」（妹編）・（姉編）（『私たちの道徳』Ｐ４２～４５）
３　ねらい　真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする態度を養う。
４　指導観　卒業を控えて中学校生活に期待するこの時期に、小学生の妹の視点から捉えた創意ある生活と中学生の姉の視点から捉えた理想を実現しようとする生き方について考えることは、相手の立場を慮る上で意義あることである。本資料は、同じ時期を経験する姉妹を双方の視点から描いたものである。二人のそれぞれの生き方を通して、小学校高学年で学ぶ創意進取から中学生で考える理想を実現しようとする態度を育みたい。
５　授業展開例

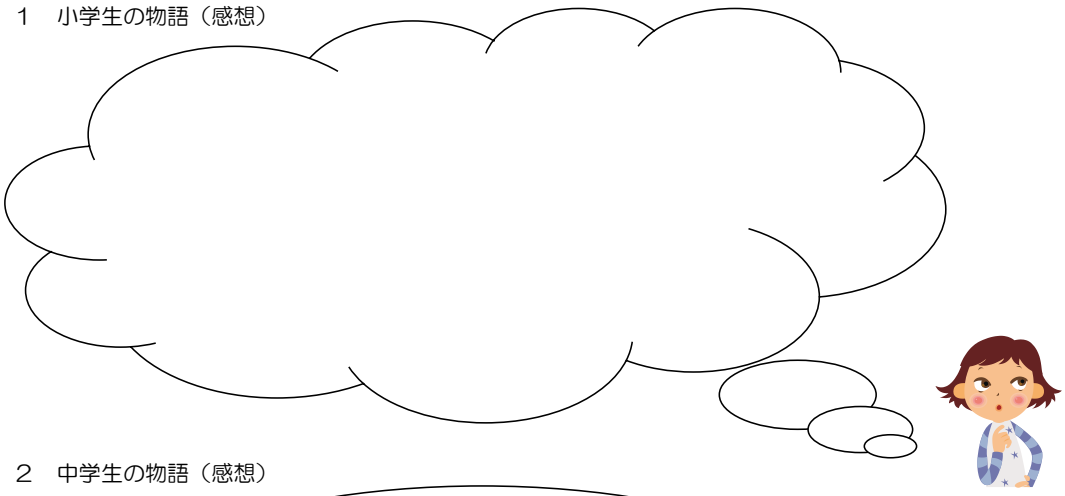
	学習活動・内容	時間	児童の反応	＊備考　○評価
導入	１　小学生と中学生の違いについて考える。	５	・自分の持つ価値と友達の価値を比較する。	＊自由に想起させる。（Ｔ２） ＊ワークシートを配付する。（Ｔ１）
展開前半	２　二つの物語に共通する「安波祭」について補足する。	５	・自分の住む町のお祭りと比較する。 ・地域によっていろいろな習慣があることを知る。	＊ＶＴＲで震災前の祭りの模様を紹介する。（Ｔ１） ＊写真を使って場面を紹介する。（Ｔ２）
	３「忘れられない歌（妹編）」を読み聞かせする。 （１）Ｃの部分をどんなふうに歌うのか悩んだとき、和はどんな気持ちだったかな。 （２）コンクールで歌い終えたとき、和はどんな気持ちだったでしょう。	10	・静かに聞く。 ・みんなで考えたが難しかったと思う気持ち。 ・みんなで考えると楽しいと思う気持ち。 ・みんなで歌えてよかったというれしい気持ち。 ・早く姉に会って話したいという気持ち。	＊資料を読む。（Ｔ２） ＊読後に発問をする。（Ｔ４） ＊意見を黒板に書く。（Ｔ２）
展開後半	４「続・忘れられない歌（姉編）」を読み聞かせする。 （１）歌いたくても歌えないときの佳奈は、どんな気持ちだったかな。 （２）「すべては心の中にある」ことに気づいたとき、佳奈は何を考えていたでしょう。	10	・静かに聞く。 ・本当は歌いたいから苦しい気持ち。 ・好きなことをあきらめて我慢する投げやりな気持ち。 ・ふるさとのために歌おう。 ・自分のために歌おう。 ・これからは大好きな歌を本気で歌おう。	＊資料を読む。（Ｔ１） ＊読後に発問をする。（Ｔ３） ＊意見を黒板に書く。（Ｔ２）
	５　二つの物語に共通するテーマについて話し合う。	10	・お祭り、合唱（歌） ・姉妹、小学生と中学生 ・思い、一生懸命生きる姿	＊自由に発言させる。（Ｔ２）
終末	６　教師の説話を聞く。	５	・エピソードを聞く。 ・感想を聞き合う。	＊合唱曲「ふるさと」を紹介する。（Ｔ１） ＊個人の気づきを大切にする。（Ｔ１・２・３・４）

（別紙６）

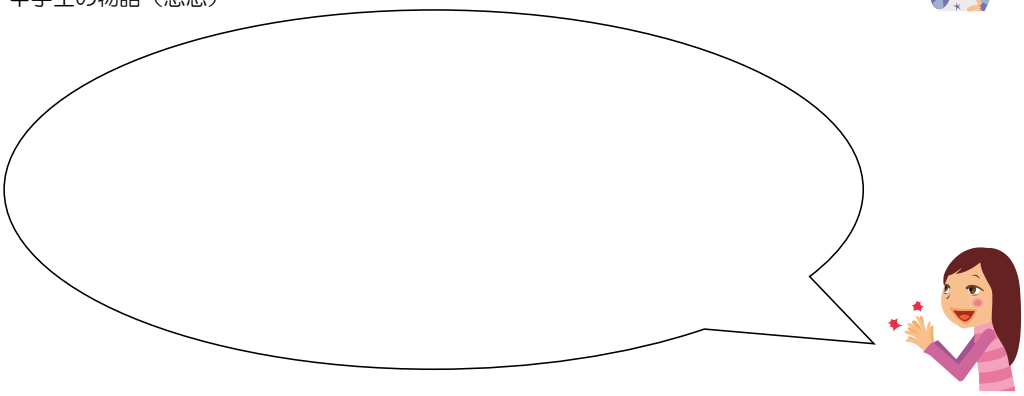
小学６年生おはなし会「忘れられない歌」

６年　　組　　番　氏名（　　）

１　小学生の物語（感想）



２　中学生の物語（感想）



３　活動を終えて、気づいたこと、感じたこと、考えさせられたことを書きましょう。

ふくしま復興のあゆみとこれから

～データ資料をもとに復興と自分との関わりを考えさせる道徳教育～

（高校生）

一　実施のねらい

大震災後の様々なデータから、これまでの復興のあゆみと現状をとらえることを通して、今後、福島の復興に向けて自分たちにできることを考えさせたいと考えた。道徳教育の内容項目４――⑻郷土愛（中学生）に焦点をあてた。自分の将来の職業や生き方について考える場を設定し、キャリア教育の視点も加えた実践である。

二　生徒の実態

東日本大震災及び原子力発電所の事故から三年の歳月が経ち、県民の多くは少しずつ落ち着きを取り戻している。そうした中、多くの生徒は穏やかな日常を過ごしており、望ましい状況にも見える。しかし、除染や耐震工事など、まだ十分進められていない状況があり、住み慣れた土地を離れて避難生活を余儀なくされている方、仮設住宅で生活している方などもいる。復興に向けて課題も多い。

生徒は、新聞やニュース、社会の授業などで、復興の状況について断片的には理解しているといえる。しかし、現状を見直したり、復興に自分自身がどのように関わっていけるかについて考えるまでには至っていない。

三　指導上の留意点

震災当時のことを思い出したくない、という生徒もいると思われる。事前に授業の趣旨を説明するとともに、授業中や授業後の生徒の様子にも留意する。

データでは数字として現れるが、実際はその一つひとつに人間が関わっていることを気づかせた上で考えさせたい。

四　資　料

［資料１］『ふくしま復興のあゆみ〈第８版〉』（福島県）
（https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/78854.pdf）
［資料２］『東日本大震災の記録と復興への歩み』（福島県）
（http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec_file/koho/e-book/index.html）
［資料３］「各都道府県の被災者受け入れ状況」
（http://f-renpuku.org/fukushima/evacuee_information）
［資料４］「福島生活復興ボランティアセンター『はあとふる　ふくしま』」
東日本大震災におけるボランティア活動者数集計
（http://www.pref-f-svc.org/archives/7766）

五　実践例（◯教師からの働きかけや発問　・生徒の反応や答）

一年生の「総合的な学習の時間」（一時間）で実施した。実施一週間前に資料とワークシート（Ｐ１３７）を配付し、目的・学習内容などについて伝えておいた。

⑴　現在の福島県の復興状況について身の周りの様子やそこから気づいたことを発表する。（五分…実施時間）

○震災・原発事故から三年が過ぎたが、身の周りの復興状況はどうか。
○福島県の復興状況について、見聞きしたり読んだりして知っていることは何か。

- 町内で除染が行われることになった。
- 公園で遊んでいる子どもは、以前より少ないように思う。
- 仮設住宅に住んでいる人がたくさんいる。
- 廃棄物の中間貯蔵施設が造られることになった。

(2)　資料から、震災の被害状況、その後の復興状況について読み取る。読み取った内容や新聞・ニュース・身の周りの復興状況をふまえ、これからの復興について考える。（十分）

［参考資料］
［資料1］P2～7

○現在の復興状況と比較するため、震災当時の被害状況を把握する。
- 被害状況のデータを見て注目したことは何か。
- 注目した被害状況は、データによると現在どの程度復興したか。

以上をふまえて、これからの復興についてあなたの考えを書きなさい。
○ワークシートの1・2を記入する。

(3)　グループに分かれ、それぞれの考えを話合う。（二十五分）
各グループの代表意見を発表する。

- 復興住宅の整備が進んでいない。
　政府は被災の復興を優先してもらいたい。復興の遅れの背景に、作業員や建築資材などの不足があると思われる。作業員が不足しているなら、外国人労働者を募ってはどうか。
- 住宅、道路、農地の除染の進捗状況が遅れている。
　目に見えないだけに心配だ。作業員や技術者が不足している。
- 浜通りの災害廃棄物の処理状況が遅い。
　浜通りは被害が広範囲に渡り、汚染されたがれきも多いためであろう。中間貯蔵施設が建設され、廃棄物の置き場ができれば状況もよくなると思われる。一方で、福島県が汚染廃棄物置き場のイメージをもたれ、県全体のイメージダウンや風評被害が生じる心配がある。
- 農林水産業施設の復旧が遅れている。特に漁業経営体と農地の復旧状況がよくない。
　仕事ができないと生活が成り立たないだけでなく、精神状態にも悪影響を及ぼす。漁場や農地の復旧を進めると共に、安全ならば現状を広く報道などで伝え、風評被害の払拭に努めるべきだ。政府や県は、全国紙の新聞や公共放送などで定期的に現状を伝えてほしい。

(4)　現在までの復興の過程でどのような支援があったか、どのように進められてきたかを知る。（十分）
　政府の支援・東京電力の補償はもとより、他県・NPOの援助、さまざまな作業に携わる人々・ボランティアの働きなど、多くの支援によって復興が進められてきたことを確認する。

［参考資料］
［資料2］　P302～305「支援物資・寄附金の状況」
　　P334～336「ボランティアの協力」
　　（P34～51　写真「支援復興状況」）
［資料3］「各都道府県の被災者受け入れ状況」

［資料4］東日本大震災におけるボランティア活動者数集計

○政府の支援や補償などの他にどのような支援があったか。

- 今でも多くの人が福島県のためにボランティアをしてくれている。今は仮設住宅の方々への支援が多くなっているようだ。
- 全国で思ったよりたくさんの被災者を受け入れてもらっている。

(5)　これから自分にできることを考える。（家庭学習の課題とした）

※家族で福島県の復興について話し合う機会になると考えた。

○あなたは福島県の復興にどのように関わっていくか、または、関わっていけるか。進路も考慮に入れた上で、できるだけ具体的に考え、ワークシートの3を記入する。

- 進路は福島の復興にあまり関係ありませんが、まずは今できることとして、福島県産の野菜・米などを食べたり、機会があれば募金活動をしたりしたいと思います。
- 私は将来司書になりたいので、震災や復興について「本」という面から風化させないようにしたいです。
- 私は将来幼稚園か小学校の教員を目指している。子どもたちに震災の時にあった出来事や災害時の対処のしかたなどを伝えたい。
- 私は将来福島のためになることができるかわからないが、他県の人に福島県のよいところや復興の状況を伝えていきたいと思う。
- 私は県庁に勤め、復興に関わっていきたい。具体的には、復興建築用資材の入手や除染作業員の募集、未来ある子どもたちの教育環境の整備などである。

(6)　友だちの様々な意見に触れる。あわせて「ふくしま子ども宣言」作文コンクール「モラル・エッセイ」コンテストの作品（百四十二ページから百五十三ページ掲載）を読む。

六　考　察

生徒たちは、福島県がまだまだ復興途中であり、今も苦しい状況にある人たちが多くいることを改めて確認するとともに、自分たちの住む地域を大切しようという思いを高めていた。また、これまで多くの人の支援があったことに対する感謝の声も授業の中で多く聞くことができた。

ただ、復興に対し、自分に何ができるかわからないという者も多かった。できることとして、募金やボランティア、県産品を買う、などの意見が多数出された。確かに、山積する問題はどれも多額の予算や多くの人員が必要な国家レベルのものばかりで、今できることは限られる。そのため、「進路」と関連させて、将来の自分が復興とどう関わるのかキャリア教育の視点から考えさせた。復興が自分たちの将来と大きく関わっていることについて深く考える機会となった。

内容的に、一時間で実施するのは厳しかった。(3)(5)の活動に時間をかけられるように、二時間続きで実施することが有効であると考える。道徳教育の視点を加えた実践であるため、郷土の未来についてじっくり考えさせる時間を確保する必要がある。(3)の活動については、最初に、自分の進路が社会の中でどのような役割を果たしているのかを捉えさせ、次に、そのことが復興とどのように関わっていくのか、という段階を踏ませることが有効であった。

（ワークシート）

年　　組　　番

福島の復興に関する考察

1　資料を見て、気がついたこと、考えたことを書きなさい。

2　福島県の現状について、考えたことを書きなさい。

3　今後、福島県の復興にどのように関わっていくか。または、関わっていけるか。
自分の進路もふまえて、具体的に書きなさい。

［資料１］　一部抜粋

新生ふくしま復興推進本部

福島県の被害状況①（地震・津波被害等）

平成23年3月11日14:46に三陸沖を震源として発生した「平成23年　東北地方太平洋沖地震」は、M9.0を記録し、観測史上最大の地震でした。
最大震度7を記録した激しい揺れとともに、広い範囲で大津波が押し寄せました。

地震・津波による被害状況

＜被害状況＞（平成26年10月2日現在）

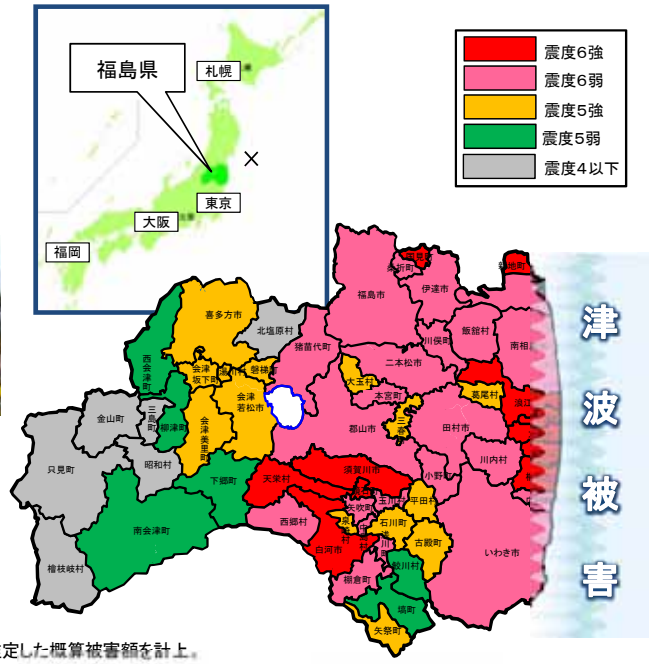
◆死者：3,602人（うち、震災関連死※1,774人）

◆行方不明者：3人

※震災関連死とは、地震などの直接的な被害によるものではなく、その後の避難生活での体調悪化や過労など間接的な原因で死亡すること。

津波に襲われる四倉湾

重機を使い捜索活動を行う警察職員（相馬市）

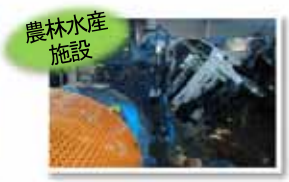


＜被害額＞（平成24年3月23日現在）

公共土木施設被害報告額	約3,162億円
農林水産施設被害報告額	約2,453億円
文教施設被害報告額	約　379億円
公共施設被害報告額総額	**約5,994億円**

※県所管分：福島第一原子力発電所から30km圏内は、航空写真等により推定した概算被害額を計上。
※市町村所管分：南相馬市の一部及び双葉8町村の概算被害額は含まれていない。
【出典】福島県東日本大震災復旧・復興本部県土整備班

いわき市の海岸



八沢排水機場（相馬市）

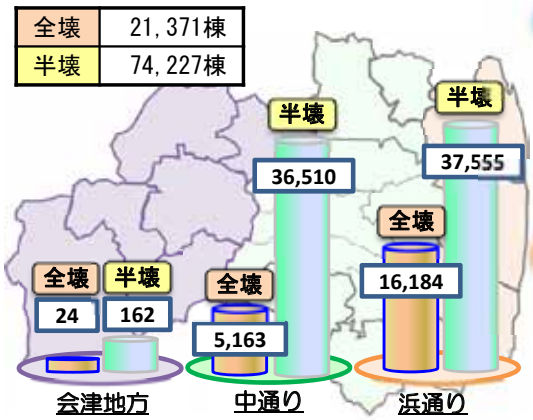
県道白河羽鳥線

県立岩瀬農業高校（鏡石町）

家屋被害の状況 ＜地域別＞

（平成26年10月2日現在）

全壊	21,371棟
半壊	74,227棟



家屋被害の状況（浪江町請戸地区）

家屋被害の状況（福島市伏拝地内）

【参考】県の住宅二重ローン対策

－被災された方々の住まいの再建・確保を支援－

新生ふくしま復興推進本部

被災者の生活再建

現在、避難者や被災者の居住の安定を図るため、「復興公営住宅」の整備を進めています。
原子力災害に伴う避難者向けの復興公営住宅については、県が主体となり、全体で4,890戸整備する予定です。このうち約2,100戸については平成27年度末までに、残りについては平成28年度末までに整備を進める予定です。

住環境の再建

＜被災者の住環境＞（平成26年9月30日現在）

仮設住宅管理状況	16,782戸（このうち入居戸数は12,781戸）
借上住宅支援状況	19,592戸（一般907戸、特例18,685戸）※数値は県内の状況のみ
住宅再建状況	18,459件（進捗率60.9%）（平成26年9月30日現在） （被災者生活再建支援制度における加算支援金申請件数18,459件/基礎支援金申請件数30,335件）

応急仮設住宅の供与期間延長

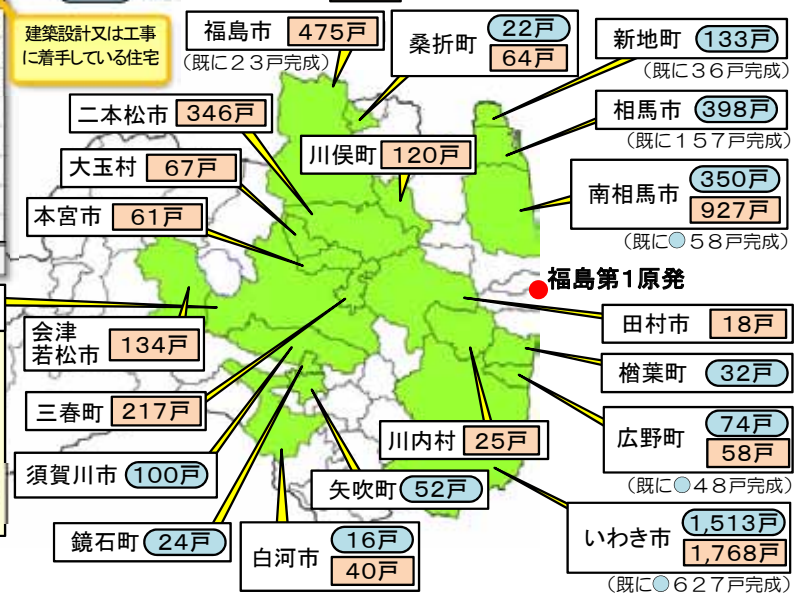
福島県においては、供与期間を1年延長し、平成28年3月までの5年間としました。

＜復興公営住宅等の整備状況＞（平成26年9月30日現在）

区分	整備予定	完成戸数
地震・津波被災者向け	11市町で計2,714戸を整備予定。	926戸
原発避難者向け	全体で4,890戸整備予定。このうち約2,100戸については、平成27年度末までに、残りについては28年度末までに整備予定。	23戸

市町村	整備予定戸数	着手済戸数
福島市	475戸	129戸
桑折町	64戸	25戸
二本松市	346戸	70戸
郡山市	570戸	474戸
会津若松市	134戸	100戸
南相馬市	927戸	414戸
いわき市	1,768戸	1132戸
その他	606戸	145戸
合計	4,890戸	2,489戸

建築設計又は工事に着手している住宅



避難者へのきめ細かな支援

避難者の見守り活動等

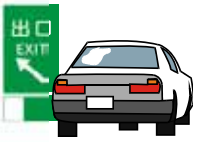
県内29の市町村社会福祉協議会に生活支援相談員201人を配置。高齢者の見守りや応急仮設住宅等へ避難している住民の支援を実施。（H26.10.1現在）

避難者向け情報紙提供

広報誌や地元紙のダイジェスト版を送付しているほか、福島県の復興に向けた取組や避難先での交流会等の支援情報を盛り込んだ「ふくしまの今が分かる新聞」を発行し、県内外の自治体やNPO等の協力のもと提供。

高速道路の無料化措置

避難指示区域等からの避難者と自主避難している母子避難者を対象とした高速道路の無料措置が平成27年3月31日まで延長。



「ふくしま子ども宣言」作文コンクール
「モラル・エッセイ」コンテスト
作品集

「ありがとうの気持ちを忘れない」あなたの決意をお聞かせください。
（「ふくしま子ども宣言」作文コンクール）

あなたの心温まる体験談・すてきなエピソードをお聞かせください。
（「モラル・エッセイ」コンテスト）

広がる未来

石川町立石川小学校
六年　小豆畑　咲季

私の家は酪農家です。福島第一原発が爆発し、テレビで牛乳の出荷が制限されたというニュースが流れた時、今まで感じた事もないくらい、大きな不安でいっぱいになりました。今まで大切にしぼってきた牛乳も処分しなければならないし、お腹いっぱいエサをもらえなくなってしまった牛の悲しそうな鳴き声を聞くのが一番辛かったです。

でもそんな時、北海道の酪農家のみなさんから、大きなロール（干し草）が海を渡って届いたのです。何よりもうれしかったのは、そのロールにメッセージが書かれていたことです。お父さんが牛舎の入口にそのメッセージを貼りました。『頑張った分だけ未来は大きい』。

私たち家族がこの言葉にどれほど勇気をもらったかわかりません。未来はまだ何も決められていなくて、自分がつくり出していくものなんだということに気付くことが出来ました。私はこの恩を忘れず、人のために行動できる強い意志を持った人間になりたいです。

ありがとう、先生と看護師さん

福島市立大森小学校
六年　亀田　有咲

三年前の震災当日、私は、浪江町に住んでいました。しかし、原発事故の影響で、次の日には、何一つ持たないまま、福島市、喜多方市と次々と場所を変えながら避難しました。

喜多方市のホテルに身を寄せた日の真夜中のことでした。兄が急性の胃腸炎になり救急車で病院に運ばれました。先生や看護師さんの素早い対応のおかげで、兄はすぐに落ち着きました。診察が終わると、私たちが避難してきたことを知った病院の先生と看護師さんは、仲間の看護師さんに連絡をとって、急いで私たちへ食べ物や洋服を持ってきてくださいました。朝方、病院の待合室で食べた、湯気の立ち上る、ほかほかのおにぎりのおいしかったこと、今でも忘れることができません。心も体も温まり、辛い気持ちを忘れることができた瞬間でした。私は、この日の出来事を今でも忘れることがありません。

いつか社会に出たとき、人の心を温かく支えられるような人になりたいと強く思っています。

ありがとうの気持ちを忘れない

福島市立福島第三小学校
六年　木下　渉

「ありがとう」

ぼくは、この言葉が大好きだ。なぜなら、言われた人はもちろん、言った人も笑顔になれるすてきな言葉だからだ。

ぼくは、普段から「ありがとう」という言葉をたくさん使うようにしている。友達に助けてもらった時や、先生や家族に分からないことを教えてもらった時、いろいろな場面で「ありがとう」という言葉が出てくる。

東日本大震災後、福島は世界中の人たちに助けてもらった。震災から三年が過ぎた今も、福島の子どもたちのために、たくさんの人が支援してくれている。ぼくたちの学校にも応援の手紙が届いた。手紙と一緒に、どんぐりや松ぼっくりが入っていた。みんなで感謝の気持ちを込めて大切に使った。ぼくは、この時のうれしさを今でも覚えている。これからもきっと忘れることはない。

ぼくは、この「ありがとう」という気持ちを大切にしていきたい。

ありがとうの気持ちを忘れない

いわき市立平第三小学校
六年　菅野　絵理

「ごちそうさまでした。」私のクラスでは、給食の時間がおわると、お皿を片づけるために、みんな配ぜん台の横にならびます。私の番がくると、ほぼ毎日食缶には残飯があります。それを当たり前のように、私も残った物を捨てることがあります。でもそれがどれだけぜいたくなことなのかを、私たちは三年前体験しました。

福島県は、三年前の東日本大震災でさまざまな被害を受けました。そんな福島に、給食さえ食べられない国も、支援物資を送って下さいました。その時、福島の人々は食料、水などがどれほど大切なものなのか改めて感じさせられました。

福島の子ども達はありがとうの気持ちを忘れず、そしてありがとうの気持ちをこめて、貧しい国を少しでも豊かにできるように努めます。また、将来復興を担っていく私たちが災害に負けない強い姿を見せるのも、支援して下さった方々へのありがとうの気持ちをしめすものだと私は思います。

「ありがとう」と伝えたい

いわき市立渡辺小学校
六年　渡邉　桃香

私は、原発の事故により被災者になりました。避難当日は、何も持たずにバスに乗りました。一時間半くらいでつく所でしたが、町の人全員が町を脱出するために道路も避難所もいっぱいで、避難指示が出てから、半日がたっていました。体育館の中は寒く、その日は新聞紙をかけて寝ました。

私が震災を経験して、名前もどこに住んでいるかも知らない人からたくさんの物やイベントの招待などいろいろな支援がありました。また、私たちのことを思い、涙を流しながら話を聞いてくれる人もいました。

震災前は、他の人の愛を感じることもなかったし、どこかの被災者のことも他人事のようにしか感じていませんでした。この震災で、なくした物もたくさんありましたが、それ以上に多くの人、世界中の人に支えられ愛されていることを私は知ることができました。世界中の人たちに今、本当に大きい声で「ありがとう」と伝えたいです。

父の初恋

白河市立表郷中学校
一年　渡邊　貴仁

僕は、父にこんな話を聞いたことがあります。それは、父が若かった頃の話です。

たくさんの人が行き来する郡山駅でのことです。切符売り場の人ごみの中に車いすに乗った一人の女性の方を見かけました。その人は、何か困っている様子で、しきりに周囲の人に話しかけているようでした。しかし、障がいを持ったその人の言葉は聞き取りにくく誰もその人にかかわろうとせずに通り過ぎるばかりでした。父も気付いてはいたけれど、かかわる勇気がありませんでした。

そこへ一人の女性がその人に近づくと、しゃがんで目線を合わせて、何度も何度も聞き返しながら笑顔でその人の話に耳を傾けていたそうです。親切なその女性は、その人がトイレに行きたいということを理解したようで駅員さんに声をかけ、トイレに案内する途中で家族の方に会えたらしく、父もほっとしたそうです。父は、その女性の勇気と思いやりの心に胸が熱くなったそうです。

僕も、ここまで話を聞き、その女性の心の美しさを感じ、とても美しい人を想像し、心があたたかくなりました。

父は、その時自分が何もできなかったことをとても後悔したそうです。僕も、父の話を聞き、その時の女性のように困っている人に自然に手をさしのべることができる優しい人になりたいと思いました。

そして、最後に父は僕におしえてくれました。その時の女性が、今、僕の母であることを。

あの海

いわき市立小名浜第一中学校
三年　太　雪乃

私は海が好きだ。晴れた日の静かな海はもちろん、雨の日の荒波の海も好きだ。季節によって表情を変えて、空の色が似合う海が私は大好きだ。

私の家はかつて海のすぐとなりにあり、窓からは海が見えた。海とともに小学生時代を過ごした。あの時、毎日聴いていた波の音は今でも思い出す。みんな、海とともに生活していた。あの日、その海が恐怖となるまでは。

あの日以来、その恐怖を経験した誰もが、もう海なんて見たくないと思っただろう。その海に、家も庭もごく普通の生活も奪われてしまった私と家族も同じだった。誰がやったわけでもない悲しみを怒りをどこへぶつければいいのかもわからない。私たちは、海を美しいと思うことも忘れてしまった。

「海を見ると、あの時を思い出す。もう怖くて海を見ることができない。」

父も母も言っていた。

私は昨年、地元ではなかったが市内のある海を見た。砂浜で海を眺めたのは震災後初めてのことだった。恐怖も何も感じなかった。

ふと昔の海を思い出し、やはり海は美しいなと思った。私は海を嫌いにはなれないんだな、とも思った。

時々、前の家があった所に行くことがある。海を嫌っていた母が、

「窓から見える海、きれいだったのにね。」

とつぶやいた。

悲しみは時間の流れが解決するという。私は、解決するきっかけの一つは思い出だと思う。私の、海が好きだという気持ちを取り戻してくれたのは、確かに私の思い出の中にあった海なのである。思い出すことを避けていては、海はいつまでも恐怖のままだ。そっと目を閉じてみてほしい。そうすれば、どこかで海を美しいと感じる自分に出会える。そして、きっとまた、海を好きになる。

親切料

白河市立表郷中学校
一年　中畑　萌々子

そこは、優しそうなお兄さんが焼き鳥を焼いているお店の前でした。いいにおいにさそわれ、姉と私が並んでいると、むこうから一人で大きなリュックを背負い、登山ぐつのようなくつをはいた外国人のきれいな女性が歩いてきました。

「これ。」

と文字が読めずに困っていた様子なので、私達はお兄さんに彼女が指さしている物を伝えました。すると、

「アリガト。私、日本人ジャナイカラ少シシカシャベレナイ。ハズカシイ。」

とかわいいしゃべり方で言いました。彼女は一人で日本に来たらしく道がわからないと、駅への道を聞かれました。するとお兄さんが、

「絵は上手？これに上手にかいてあげて。」

と白い紙とペンを私達にたくしました。私は説明が下手でしたが、紙に一生けん命書きました。

彼女は「アイガト。」と言って紙と焼き鳥の袋を持ち、ニコニコ笑顔で歩いて行きました。

お兄さんは私達に焼き鳥をわたすと、

「五百円でいいよ。親切料。おれここの出身じゃないから道わからないんだよ。助かった。」

と言ってくれました。

私達は、

「大丈夫です。」

と言って代金を支払いましたが、その言葉がとてもうれしかったです。

母に話すと、車で送ってあげればよかったねと言いましたが、すでに彼女の姿はありませんでした。無事に駅に着いたことを願いながら、私達は焼き鳥をほおばりながら笑顔で家に帰りました。

コーヒー牛乳

福島県立白河高等学校
一年　大越　千誉

曾祖母が亡くなったのは、小学生の頃だった。祖父母は農業をしていて、朝早くから夕方まで家にいないし、両親は共働きだったし、四つ上の兄は部活で帰りが遅かった。夜には皆いるから、寂しいと感じる事はなかったけど、学校から帰ってきて、私がただいまと言うよりも先に「おかえり」と言ってくれるのは嬉しかった。曾祖母が大好きだった。冬には、バタバタと玄関に靴を脱ぎ捨て、廊下にランドセルをおろし、こたつに潜り込む私に温かい飲み物を出してくれた。牛乳を温めて、コーヒーと砂糖を溶かすだけなのに、心も身体も温まる。何でコーヒー牛乳なんだろうと思う日もあったし、今までの合計したら何杯飲んだかなと思う日もあった。もう、帰宅後に一杯飲むのは日課になっていた。しかし、ある日の朝方に曾祖母は、サイレンと共に病院に行ってしまった。それから一度も家に戻る事なく、冷たくなった。数日後のお通夜で母が桃を出すと言うので、皮むきを手伝っていた。何個かむき終わって、一息ついた時に話してくれた。「お嫁に来たばっかりの頃はよく、ひいばあちゃんにコーヒー牛乳作ってもらってたんだよ。私が牛乳嫌いだったから、わざわざコーヒー溶かしてくれてたの。美味しかったのに、最近ずっと飲んでなかったな……」そう言った母は寂しそうだった。私は視界がぼやけていく中で、そうか、と思っていた。コーヒーを牛乳に溶かし始めたのは母のためで、砂糖を溶かして甘くしてくれたのは、私のためだったのではないか。母は甘いものをそれ程好まないし、曾祖母はもういないから、この考えが当たっているかは分からないが、違っていても良いと思う。包み込むような優しさを持っている人だから、私の知らないところでも、たくさんの事をしてくれていたはずだ。そんな曾祖母を尊敬してる。

十五年しか生きていない私には、知らない事や知らない人ばかりだ。出会いを大切に、友を気遣い、長生きをする予定である。

私の仏様

福島県立白河高等学校
一年　荒井　寿美

おじいちゃんは、何も話さない。必要な時以外は、ただ黙っている。そんな無愛想なおじいちゃんは、笑う時は大きな声で笑う。なんて表現すればいいか、私の中でのおじいちゃんは仏様だ。うんと小さい頃におじいちゃんのお父さんは亡くなった。家は大正寺というお寺である。兄弟は皆女だった為、大正寺の後継ぎはもう決まっていた。母から聞いたのだが、何も知らない状態から仏教の事を一から勉強したらしい。どれだけ努力をしていたのであろう。不思議なことに、バイオリンは弾けるしピアノもできる、家も建てられるし人を助けられるし、私はおじいちゃんが何かをできない所を一度も見たことがない。何でもできるおじいちゃんは、私の中で憧れの存在だ。ある日、私はおばあちゃんを泣かせた。おばあちゃんの作ったカレーがまずくて思わず

「何これ。おいしくない。もう食べないから。」

と冷たく言ってしまったのだ。すると普段は何も話さないおじいちゃんが

「残さず食べなさい。」

と言った。私はその時驚いて返事をすることはできなかったが、おじいちゃんのおばあちゃんに対する愛が伝わってきた。私はこの時、顔や表情には出さないけれど、行動でその人の愛情の深さは分かるんだと思った。

私はおじいちゃんを尊敬している。無口で何を考えているのかよく分からないけど、誰よりも人一倍努力した分、人間力があって強くて愛にあふれた人なんだと思う。私は将来大正寺を継ぐつもりだ。なぜなら、このおじいちゃんの魂を他人に渡したくないからだ。女で住職なんて……と思われるかもしれない。それでもかまわない。ただ私は、おじいちゃんの様な人間になりたい。

自分を福島県人であると意識したとき

福島県立いわき海星高等学校
三年　大和田　拓宏

私たちのクラス三十四名は、昨年の九月、乗船実習の外地寄港地活動として、ハワイで福島県人会九十周年を祝うため、クラス全員でじゃんがら念仏踊りを披露するという機会を得ました。私たちは、行事参加の日の朝早くから、最後の踊りの稽古をアロハタワーの下で行い、そのすぐ後にバスに乗って全員で会場であるアラモアナホテルに向かいました。会場には、ハワイ在住の福島県出身の方々、遠くはイギリスなど世界各国からの福島県出身の方々が参加していました。私にとって初めて体験する海外での式典です。校長先生、担任、副担任の先生方の緊張した面持ちの中でじゃんがら念仏踊りを披露しました。私の担当は、鐘です。緊張感で押しつぶされそうになりながら、乗船前から始まった稽古や、船の上で気分の悪い時もめげずに行った稽古をした自分を信じ、精いっぱいやろうと心に決めました。頭が真っ白になりながらも、一生懸命踊りました。終わってほっとして、やっと自分を取り戻したとき、会場を見回すと、立ち上がって拍手をしてくれている方、近寄ってきて、涙を流しながら何かを話している方がおられました。何を言っているかは、はっきりとはわかりませんでしたが、感動と、感謝して頂いているということはわかりました。いつもは、ばらばらである私たちのクラスが、この機会に一つにまとまって、ひたすら踊り、多くの方々に喜んでもらえたことに驚きとうれしさを感じました。たぶんこの体験は、これからも忘れることはないと思います。この体験から、人に喜ばれることの大切さと、一人ではできないことでも皆で協力することで成し遂げることができるという自信を持ち、そして、なにより、同じ郷土愛を持つ福島県人会の方々に喜んでいただき、福島に生まれ育った自分自身が福島県人であることに喜びと誇りを持つことができました。

地域とのつながり

白河市在住
佐藤　かおり

「いってらっしゃい。坊主頭似合ってるね。野球がんばって。」

家の前を通る近所の中学生に声をかける。真新しいランドセルと黄色の帽子姿を近所のみんなで「いってらっしゃい。」と見送っていたことがつい昨日のことのようだ。その当時一緒に「お兄ちゃん、バイバーイ。」と手を振っていた我が子が、今ではランドセルを背負い毎朝元気に小学校へ出かけていく。近所の人々に見送られながら。

私の子育ては、城下町の人々のあたたかさに支えられている。魚屋、豆腐屋、八百屋等々。

子供達が幼い頃から近所を散歩したり、買い物をしたり、行く先々で地域の方に声をかけてもらい、子供達の成長を一緒に喜んでもらえたことは、今、毎日の生活の中で生きている。元気よく挨拶をすること、道路を渡る時は注意すること、目上の人には丁寧な言葉遣いをすること……。地域とのつながりを通して、我が子は自然と、挨拶や社会のルールを体得してきた。人見知りもなく、近所の八十代のお年寄りと楽しそうに立ち話する子供達の姿は微笑ましいものだ。

近所の子ども達に「いってらっしゃい。」と声をかけたり、独り暮らしのお向かいさんと立ち話をしたり、私も子育てを通して得たことを地域の中で生かしている。

「じいじ、今日は太鼓習ってきたよ。」

歴史と伝統の白河提灯祭り。三世代揃っての初祭りに食卓の会話も弾む。今日も我が子は地域の中でのびのびと育っている。

犬猫たちの震災

いわき市在住
曽我　泉美

平成二十三年三月十三日の夜、市役所前に五匹の子猫が捨てられていた。「避難します。どなたかもらってください。」段ボールにはこんなメッセージが。原発事故のため、いわき市内からは人が消え、子猫の引き取り手などあるわけがない。職員は「犬猫捨てない会」に連絡を取り、無理矢理猫を預かってもらったという。しかし、残念なことに三匹は寒さと飢えで死んでしまった。その当時、市内にも鎖をはずされた犬や外に出された猫たちも多く、会の代表である遠藤さんは、対応に追われるさなかであった。その上、相双地区の迷子の犬猫の情報をチラシにまとめ、市内の避難所に配布する活動もしていた。

そんな時、遠藤さんから子猫の引き取り依頼の電話が。家にはやはり捨て猫だった黒猫がいた。私の愛情を一身に受けてきた彼女に同居人が容認できるかとても不安だった。

その年の夏、ピッピはやってきた。いたずら盛りの三ヶ月の女の子。先住猫のムギ姉さんを追いかけ回し、エサも横取りするようなたくましい性格。ムギはいつも「ファーファー」と背中の毛を立て、ピッピをなかなか受け入れなかった。私も二匹の争いを見て、心休まる時間を奪われてしまったムギを見るにつけ、胸が痛くなり「明日こそはピッピを帰そう」と毎日考えた。

そんなある日、二匹がくっついてひなたぼっこをしてた。「やっとムギが住人として認めたんだ！」と胸が躍った。しかし……。数日後に七階のベランダから、ピッピは転落してしまった。発見した時はまだ温かかった体がみるみる冷たくなっていった。

「三月に命を落としてしまったかもしれないのに、曽我さんのところで暮らした時間は彼女にとって、とても幸せだったと思うわ」遠藤さんの言葉がせめてもの救い。震災の裏で犬猫たちも大変な思いをしていた。小さな命でも同じ命。モラルなき行為で命を落とす犬猫たちがいなくなるようにと、切に願う。

ゴールを目指して

福島市在住　宍戸　悦子

遙か昔の学生時代、私は陸上部に所属していました。際立った才能があった訳でもなくただ走ることが好きということで、陸上を楽しんでいた時代でした。

社会人となり、日々の忙しさに紛れ運動する事から遠ざかっていましたが、知人の影響で昨年からランニングを再開することになりました。学生時代やっていた短距離とは異なり、長距離を走るには走法やペース配分を考えなくてはなりません。次第に長距離のその魅力に引き込まれていきました。

趣味はランニングですと言うと、「走っている時って何を考えているの」と、聞かれることがあります。走っているとき、それは無の状態であったり、自分を見つめ直す時間であったり、冷静に考えを巡らす貴重な時間です。

そして、大会に出場することは、トレーニングをする上での励みとなり、練習の成果を試す良い機会にもなります。

レースに参加すると、何百人、何千人のランナーと一緒に走ることになります。その一人一人は走り方も違えば、背負っている人生も様々です。そんなランナーが同じゴールを目標に走るのがマラソンの醍醐味だと思います。

まさにマラソンは人生と同じです。山もあれば谷もあります。いろいろな苦しさを乗り越えてこそゴールした時の悦びと達成感を味わうことができます。

長い道のりをゴール目指して走り抜くマラソンは、こつこつと努力を重ね、最後まで全力で目標に立ち向かうことで、人生に於けるどんな逆境にも負けない精神力を培ってくれるものと信じています。

人生に於いても、マラソンに於いてもまだまだ未熟ですが、いつかフルマラソンを走りきる力を身につけることが今の私の目標です。

小学校第５学年及び第６学年	中　　学　　校
(1)　生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。	(1)　望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
(2)　より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	(2)　より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
(3)　自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。	(3)　自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
(4)　誠実に、明るい心で楽しく生活する。	
(5)　真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	(4)　真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
(6)　自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	(5)　自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
(1)　時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	(1)　礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
(2)　だれに対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にする。	(2)　温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
(3)　互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。	(3)　友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
	(4)　男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
(4)　謙虚な心をもち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする。	(5)　それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ。
(5)　日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	(6)　多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
(1)　生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	(1)　生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。
(2)　自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。	(2)　自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
(3)　美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。	
	(3)　人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることに喜びを見いだすように努める。
(1)　公徳心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にし進んで義務を果たす。	(1)　法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。
	(2)　公徳心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
(2)　だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	(3)　正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
(3)　身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	(4)　自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
(4)　働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。	(5)　勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
(5)　父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	(6)　父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
(6)　先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	(7)　学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
(7)　郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	(8)　地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
	(9)　日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
(8)　外国の人々や文化を大切にする心をもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	(10)　世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第１学年及び第２学年	小学校第３学年及び第４学年
１　主として自分自身に関すること	
(1)　健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	(1)　自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
(2)　自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2)　自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
(3)　よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	(3)　正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
(4)　うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	(4)　過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気よく生活する。
	(5)　自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。
２　主として他の人とのかかわりに関すること	
(1)　気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	(1)　礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
(2)　幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2)　相手のことを思いやり、進んで親切にする。
(3)　友達と仲よくし、助け合う。	(3)　友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(4)　日ごろ世話になっている人々に感謝する。	(4)　生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
３　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	
(1)　生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。	(1)　生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
(2)　身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	(2)　自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。
(3)　美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。	(3)　美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
４　主として集団や社会とのかかわりに関すること	
(1)　約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。	(1)　約束や社会のきまりを守り、公徳心をもつ。
(2)　働くことのよさを感じて、みんなのために働く。	(2)　働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
(3)　父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3)　父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。
(4)　先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	(4)　先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。
(5)　郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	(5)　郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。
	(6)　我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

◇特別寄稿

谷田　増幸 氏　　兵庫教育大学大学院　教　授

◇監　　修

林　　泰成 氏　　上越教育大学副学長・同大学院　教　授
早川　裕隆 氏　　上越教育大学大学院　教　授
白木みどり 氏　　金沢工業大学　教　授

◇表　　紙

朝倉　悠三 氏　　県美術協会会員　馬の絵コンクール審査員

◇挿　　絵

森口　　律 氏　　福島大学附属小学校教諭
長谷川裕美 氏　　昭和村立昭和中学校非常勤講師
大石　正文　　義務教育課指導主事

◇作成協力者

工藤むつみ 氏　　スパリゾートハワイアンズ・ダンシングチーム
吉田　吉徳 氏　　㈱田村市常葉振興公社
伊達市立五十沢小学校教職員・児童・保護者・五十沢地区の方々
飯舘村松川第二仮設住宅自治会
郡山市立明健小学校教職員・児童

◇作成委員

委 員 長	内藤　良行	福島市立野田小学校長
副委員長	渡邉　真魚	郡山市立明健中学校教頭
委　　員	斎藤　恵美	伊達市立保原小学校教諭
	村越　　健	大玉村立大玉中学校教諭
	夏目利江子	二本松工業高等学校教諭
	村上　直子	田村市立要田小学校教諭
	根本　秀夫	郡山高等学校教諭
	永島　慶和	白河市立白河第三小学校教諭
	安齋　宏子	棚倉町立棚倉中学校教諭
	仲川　重人	会津美里町立本郷小学校教諭
	杉山　雅孝	昭和村立昭和中学校教諭
	棚木　千春	会津学鳳高等学校教諭
	青田　亮一	只見町立只見中学校教諭
	川島　るみ	南相馬市立石神第一小学校教諭
	蓬田恵美子	浪江町立浪江東中学校教諭
	齋藤　勇樹	相馬農業高等学校教諭
	安田　　茂	いわき市立江名小学校教頭
	中田　敬介	いわき市立三和中学校教頭
	今村　裕子	勿来工業高等学校教諭
	伊藤　貴史	福島大学附属小学校教諭
	佐藤　裕子	教育センター指導主事
	阿部　裕好	県北教育事務所指導主事
	宗形　潤子	県中教育事務所指導主事
	藤田　　篤	県南教育事務所指導主事
	佐藤　　毅	会津教育事務所指導主事
	渡部　　学	南会津教育事務所社会教育主事兼指導主事

目黒　信浩　　相双教育事務所指導主事
加藤　満福　　いわき教育事務所指導主事

◇県教育庁義務教育・高校教育課内作成委員

飯村　新市　　義務教育課長
菊池　篤志　　義務教育課主幹
渡辺　惣吾　　義務教育課主任指導主事
福地　裕之　　義務教育課主任指導主事
助川　　徹　　義務教育課指導主事
増子　春夫　　義務教育課指導主事
阿部　洋己　　義務教育課指導主事
大内　克之　　義務教育課指導主事
大石　正文　　義務教育課指導主事
原　　孝行　　義務教育課指導主事
大竹　孝喜　　義務教育課指導主事
小松　信哉　　義務教育課指導主事
桑名　秀和　　義務教育課指導主事
吉川　武彦　　義務教育課指導主事
菅野　重徳　　義務教育課指導主事
佐藤　文男　　高校教育課主任指導主事
持地　晶子　　高校教育課指導主事

◇出　　典

それでも僕は桃を買う
　法務局人権擁護局・全国人権擁護委員会連合会主催
　第33回全国中学生人権作文コンテスト　内閣総理大臣賞
　宮城県古川黎明中学校３年大沼逸美さんの作文
アイナふくしま
　平成26年５月　朝日新聞
命救った炊き出し（「命のおにぎり」）
　平成26年２月20日　福島民報新聞・福島民友新聞

◇参考文献

「三・一一水道部隊の軌跡」　金成恭一　　2012年
「南相馬の子供の祭り」DVD
企画・著作　南相馬市博物館　　2008年

表紙に寄せて

震災と原発のダブルパンチで肉親や職を失い、ふる里を追われた福島県の多くの方達の苦しみと悔しさ、淋しさは四年たった今でも続いている。

しかし、長かった暗い冬はもうたくさんだ。そろそろ、春に向けて飛びたつ時がきたのではないだろうか。いも虫が華麗な蝶に変身するように。ヒヨコが自力で殻を破って誕生するように。このへんで“ヘンシーン”しようではないか。

大空に羽ばたく心の翼と大地を駆けぬける足さえあれば……。もうそれで充分なのだから。

県美術協会会員　馬の絵コンクール審査員　朝倉　悠三

平成27年３月１日　印刷
平成27年３月11日　発行

編　　集　　福島県教育庁義務教育課
発行所兼印刷所　　有限会社 吾妻印刷